

42527

教科書文庫

4
810
44-1941
20000
171203

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

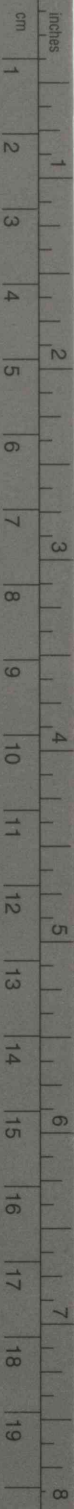


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



濟定檢省部文

實業
帝國新國文
改版
第三學年用



文部省檢定
昭和十六年十一月十七日 實業學校國語科

室料資

實業帝國新國文

改版 第三學年用

株式會社 帝國書院

教科書文庫
4
810
44-1941
2000071203

文學博士 藤村作編

広島大学図書
2000071203

広島大学
教
71203
圖書

4C
810
昭16



(集畫壁館畫繪念記德聖)

判談城開戶江

實業帝國新國文改版第三學年用

目次

一	愛國の歌	藤村	作	一
二	日本の風光	伊東	忠	三
三	仕事を樂しめ	増田	義	九
四	自動車王フォード			一四
五	ふるさとの山	石川	啄木	二一
六	崎人一茶	本山	荻舟	二五
七	一茶の俳句	相馬	御風	三一
八	若葉	正岡	子規	三七

目次

一



九	四季の眺	貝原益軒	三九
一〇	東西の自然詩觀	本間久雄	四八
一一	川柳選		五五
一二	瓜盗人		五七
一三	山のたより	五十嵐力	六二
一四	落葉松	北原白秋	六七
一五	世に處する道	勝海舟	七〇
一六	大根賣の話	柴田鳩翁	七五
一七	田家の朝	相馬御風	八一
一八	朝	川路柳虹	八六
一九	自然の愛	藤岡東圃	八八
二〇	空行く雁	(會) 我物語	九三
二一	大和の秋	佐佐木信綱	九八

二二	秋深し	横瀬夜雨	一〇二
二三	俚 諺	大西祝	一〇四
二四	汝の母	姉崎正治	一一〇
二五	松の下露	(太) 平記	一一八
二六	夜叉王	岡本綺堂	一二四
二七	蜜 柑	芥川龍之介	一三六
二八	故國に歸りて	島崎藤村	一四三
二九	野に出てよ	島崎藤村	一五二
三〇	眞 理	高山樗牛	一五三
三一	内藏助と主税	大佛次郎	一五七
三二	義士討入を報ず	榎本其角	一六五
三三	木曾殿の最期	(平) 家物語	一六八
三四	近世の歌		一七六

三五	日本の民謡	島木赤彦	一八〇
三六	勝敗	三宅雪嶺	一八九
三七	熟慮斷行	藤村作	一九四
三八	日本精神の眞髓	清原貞雄	二〇〇
三九	忠僕	小笠原長生	二〇五

艦

相模太郎
北條時宗
北條氏第八代の
執權
弘安七年歿

一 愛國の歌

藤村作

穢き履に淨き我が土
汚さんとせし元寇の
海を蔽ひし艦艦も、
相模太郎が愛國の
至誠の前に沈みたり。
たゝへよ、たゝへよ、祖國の精神。

内外の憂並び起りし
時の艱を救ひてし、
明治維新の大業の

玉松

名は操
勤王家
國學者
明治維新の際岩
倉公に用ひられ
公が功業の多く
は操の畫策する
所であつた
明治五年歿
(年六十三)

ザ
露西亞皇帝の稱
號
拔

礎置きし玉松が

復古の策のけだかさよ。

たゝへよ、たゝへよ、祖國の精神。

惡魔ののろひ世界の恐怖

シベリヤを越え滿洲を

おほひて伸びしザーの手も、

我が將卒が愛國の

血しほ捧げて被ひたり。

たゝへよ、たゝへよ、祖國の精神。

神の肇めしひさしき國の

かしこき生命育みて、

たふとき精神省みて、

迷の雲をかきはらへ、

祖國は安き時ならず。

たゝへよ、たゝへよ、祖國の精神。

二 日本の風光

伊東 忠太

日本は風光明媚な國であるといふことは、我々國民のお國自慢ばかりでなく、また外國觀光客の外交的辭令ばかりでもない。

日本の如く風景に富む國は、實際世界にあまり多くない。たゞその規模の小さいのは、地理地質によるもので遺憾としなければならぬ。

伊東忠太
米澤市の人
建築學者
工學博士
東京帝國大學名譽教授

何時からいはれた事か知らぬが、安藝の宮島、丹後の天の橋立、陸前の松島を日本三景と稱する。併しこの三つが果して日本最美の風景であらうか。

勿論風景の美をはかる尺度はなく、見る人の主観次第で批判されるのであるから、どこの景色が絶対に最優であるとは定め難いが、この三景以上の景色は決して少くないと思ふ。

この三景の選抜は恐らく日本本州を中央・西部・東部の三區に分けて、各區に一ヶ所づゝ特色のある景を選んだものであらう。即ち近畿地方で天の橋立、中國で宮島、東國で松島を選んだのであらう。或は又海洋の方面から見て、日本海で橋立、瀬戸内海で宮島、太平洋で松島を選んだものであるかも知れない。畢竟三景は地方代表的のものである。

予の観る所では、日本三景の中で、安藝の宮島が第一である。廻

浦々

杉野浦・腰細浦・青海苔浦・山白浦・洲屋浦・御床浦・網浦

嚴島神社

官幣中社

推古天皇の御代に始めて造營せられた

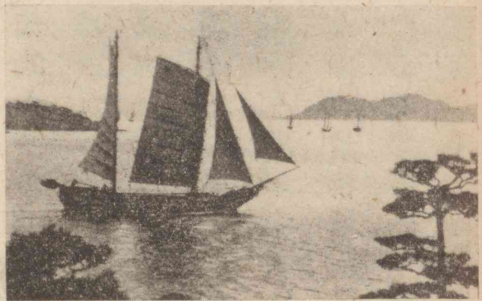
祭神は市杵島姫命・田心姫命・湍津姫命。相殿に天照大神・國常立尊・素戔嗚尊を祀る

彌山

嚴島神社後方の山

智恩寺

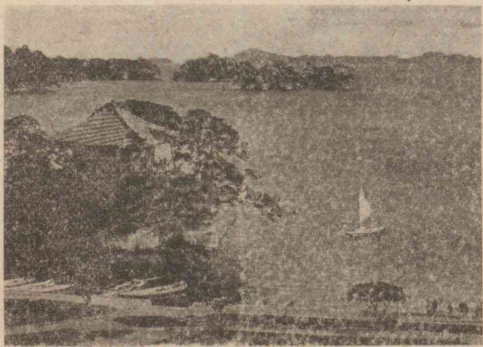
吉津村大字文珠の海濱(切戸)に在る切戸の文珠といふ



れば七里の浦々の中で、嚴島神社と彌山を海上から眺めたところが壓巻である。併し瀬戸内海には、單に山と水との關係から見れば、その規模・布置・色調等に於て、宮島にまさるとも劣らぬ所は決して少くない。ただ神社をその間に點じて風景を引締めた點に於て、恐らく宮島に及ぶものはなからう。

日本海の沿岸は概ね平板で奇巧なる風景は少い。この間に於ては、橋立はその選に入るべき資格は十分あらう。

橋立の智恩寺に於けるは宮島の嚴島神



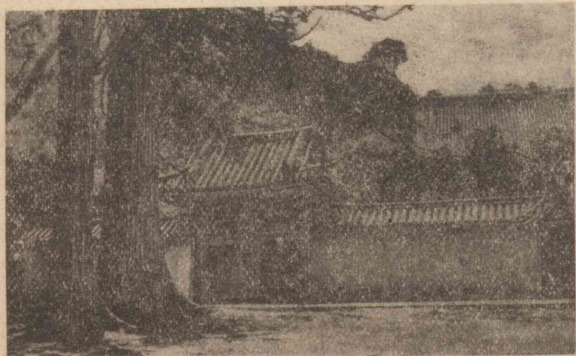
松島

富山
瑞巖寺の東北に
ある

瑞巖寺
淳和天皇の御代
圓仁の創立
今は臨濟宗で青
龍山と號する
松島村に在る

社に於けるが如き重大の意味はないが、なほ丹後の國道に當り、橋立の行路を扼し橋立と併存して離るべからざる關係にある。即ち自然の風景に人工の美を點ずるものと解することが出来る。

松島の景色は海と島とを取混ぜて平面的な景色である。松島の全景は富山の頂から展望しなければ分らぬ。景色がやゝ散漫で中心がなく、従つてその印象は淺く弱く、宮島ほどの深さと強さはないと思ふ。松島の景色に點ぜられた人工の景物は瑞巖寺である。寺は松島によつて名高く、松島は寺によつて名高い。日本三景は何れも海を取り入れた景色であつて、三者各、その趣を異にするとはいへ、畢竟同一種類である。



瑞巖寺

近江八景

比良の暮雪・矢走の歸帆・石山の秋月・瀬田の夕照・三井の晚鐘・堅田の落雁・栗津の晴嵐・唐崎の夜雨

若し自然の構圖が極めて巧妙に出来てゐたら、これに人文的素因を點ずるに及ばず、また點ずる餘地もない。しかし普通の場合にはやはり何等かの人文的要素の點出によつて風景が引締められるものである。尤もそれが餘りに多ければ、却つて風景を俗化させ、または庭園化させる。例へば近江八景の中に、石山の秋月を數へてゐるが、月だけでは景にならぬ。石山寺がその人文的素因となつて始めて美しい。

絶大なる自然の構圖でも、餘りに絶大では風景にならぬ場合がある。この時、人文的素因を投じて中心點を作れば始めて風景に



石山寺

一 眸

三 侍



なり得る。例へば、一眸千里の沙漠は、風景としては寧ろ索漠たるものであるが、そこにはるかに一群の駱駝の列が點出されるとき、好個の畫面となる。若し駱駝の鈴の音が風につれて斷續して聞えるならば、更に幽沙情を深からしめるであらう。又例へば萬漠の峻嶺が雲を破つて峙つ姿は實に雄壯のである。しかしこの山岳に伴ふ何等かの駱神祕的傳説を想ふとき、非情の土石も、有情の靈山として觀客を魅するのである。この場合は無形の精神的、人文的素因が加はつたのである。

舊日本三景はこの點から見て意味の深長なものがある。近江八景には小細工を弄した點もあるが、とにかく味ふべき所がある。

新日本八景には、美しいものもあれば物足らぬものもある。今後大いに考慮を費して、完璧な日本百景を選みたいものである。

—木片集—

新日本八景
華嚴瀧・十和田湖・雲仙岳・上高地溪谷・別府温泉・狩勝峠・木曾川・室戸岬

増田義一
新潟縣の人
衆議院議員
實業家

三 仕事を樂しめ
増田 義一

寡慾にして清貧に甘んずることの出来る人は恐らく氣樂であらうが、多數の人は富を得んことを望んでゐる様である。何人も敢へて富を嫌はぬけれども、只果して富を得らるるかどうか。その職業と境遇とによつては生活の安定さへ出来、子女の教育を施し得れば足れりと思ふ人もある。併しそれでも富を得らるゝものとするれば、之を望まざるものはなからう。

富は自ら造るのであるから、何か仕事を爲し、自ら働いてその收入の内より生活費を控除し、剩餘を蓄積するのに始まる事は言ふ

迄もない。故にその仕事は何より大切と思はねばならぬ。仕事を嫌つて収入のみを得んと欲しても、到底達成されない。仕事を樂しめば、自ら勉強もし努力もする。勤勉にして能く奮闘すれば、俸給生活者は漸次昇進し獨立自營は着々發展する筈である。東西古今を通じて巨富を造つた人は、皆自己の業務を樂しんだ人である。始めより富を造るに汲々したのでなく、その従事する業務が面白いために銳意努力し、その結果利益が増進し、自然に富が出来たと云ふのが普通である。事業を樂しんだ結果富が蓄積されるのだから、二重の愉快とも云ふべきであらう。

米國の小賣商王と云はれた大實業家ワナメーカー氏は、商賣するのは面白いのである。それを苦痛に感じたり、又は金儲け一方に考へたりするのは間違ひだと言つたが、氏は全く最初から自己の商業を非常に樂しんだ人である。而して客にも仕事にも親切

で、且つ努力する事が好きで、青年時代から勤勉が一種の習慣となつてゐた。それで氏は常に仕事さへすれば少し位の苦痛は驅逐



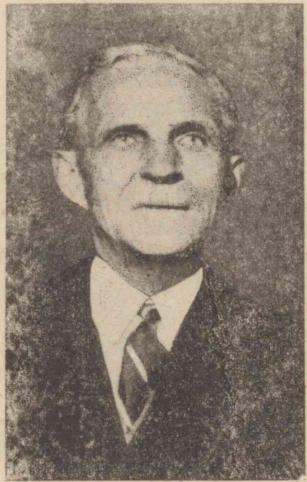
ワナメーカー

してしまふ。その快味は到底怠惰の人の知り得ない所であると語つてゐる。富を造らんと欲する者は、先づ自己の仕事を樂しむことから出發すべきだ。

働かずに富を造つた人は古來未だ曾つて無い様だ。多くの致富者は皆勤勉努力した人のみである。努力する人は多く發展し、怠惰なるものは失敗するのが普通である。努力する人は精神を籠めて働くから智慧も出れば分別も出る。自ら改良進歩も湧いて来る。自然に収入も増加する譯だ。

既往及び現在の富豪を調べて見ると、揃ひも揃うて努力家であ

る。それは我が國も歐米諸國も皆同一である。米國の自動車王ヘンリー・フォード氏の如きは、勤勞第一主義の權化とも云ふべき人だが、氏曰く「人間がなすべき自然の事を勤勞すべきこと、そして



ヘンリー・フォード

繁榮と幸福とは正直なる勤勉を通じてのみ得られるものである。人類の災禍は主としてこの自然の行路を脱出せんと企てることから發生する。私はこの自然的主義を極度まで採用せよと云ふの外には、何等の勸告すべき言葉を知らない。我々は勤勞せねばならぬと私は取りきめてゐる。」とこれフォード氏が體驗上より得たる致富の第一義であらう。

元來人間を作るものは幸福でなくして勤勞である。米國の記者は曰く「幸運は常に顯はれ来るものを期待するけれども勤勞

蹉跎

放棄

は、機敏な眼力と堅固なる意志とを以て、常に事務を創造する。幸運は寢床にあつて急使が遺産の通知を持ち來たすのを待つてゐる。けれども勤勞は、朝六時に寢床を離れて、ベン若くは槌を以つて忙しく合格の基礎を作らうと努める。幸運は悲鳴を洩らし、勤勞は歡聲を揚げる。幸運は機會に依頼し、勤勞は品性に信賴する。幸運は蹉跎して放恣に流れる。勤勞は向上闊歩してその抱負を獨立的に有する」と。右は能く實際を穿つた適切な言である。

米國の富豪カーネギー翁は「漫りに勞方を避けるものは無用の長物である」と叫んだが、富を造る人は怠惰を仇敵の如く思つてゐる。併し人間は休養も大切だし、娛樂も必要だから、決して極端に勤勞のみで世を渡れと言ふのではない。只勤勞第一であることだけは確かである。

— 運命の打開 —

四 自動車王フォード

「この子は機械や道具といつたら、目がないんでございますよ。若いヘンリーの母親は、よく附近の人にこんなことをいつた。それは出来のいゝ自分の息子に對する母親らしい誇りもあるには違ひなかつたけれども、また實際それほどヘンリーは道具や機械が好きであつた。彼は兩親から金を貰ふと、それで必ず鑿や鉋や鋸などを買つた。

彼は近頃出版した私の生涯と仕事に於て、その頃は今のやうな玩具はなかつた。私共の玩具といふのは、大概家庭で造つたものである。私の玩具は機械道具であつた。……そして今もなほさうである。私には、その機械道具の一片すらが寶であつた」と告白してゐるのでも、彼の機械道具に對する執着を知ることが出来る

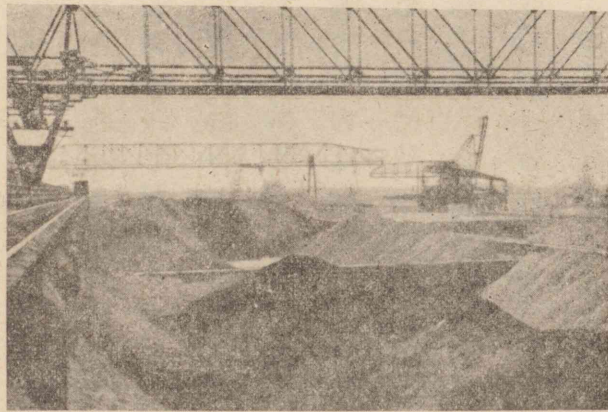
であらう。

彼の家は百姓であつた。大變な貧乏といふのではなかつたに

しても、水呑百姓の範圍を出てはゐなかつた。

「馬がなくて開墾の出来る車が發明されたといふぜ。」

或日、ヘンリーの友人はこんな話をした。その車はなんでも水蒸氣で自然に廻つて仕事をするといふのである。車といふと、すぐ馬と結び合はせて考へる當時にあつては、蠻人が飛行機を見たほどの珍らし



部一の場工ドーフォ
(山の石鑿るす鍊精を類鐵るなと料材)

い話であつた。

デトロイト
アメリカ合衆國
ミシガン州
エリー湖の西方
にある都會

「見たいな、その馬無し車を見たいな。」

ヘンリーは毎日さう考へた。或日彼はデトロイトに行つてそれを見た。それは彼の十二歳の時であつた。

「ア、動いてゐる！ア、蒸氣が出てゐる！」

彼は、田舎者が淺草の活動寫眞でも見るやうな喜と驚異とを以てこの「馬無し車」を見た。そしてこくめいにその機械やら運轉の方法やらに就いて運轉手に聞いた。その瞬間に、彼の頭には稻妻のやうに一つの考が閃いた。それは、人間が乗つて道を歩ける「馬なし車」の完成である。

「お前は百姓になつた方が一番いゝよ。お父さんの後を繼いでさ。機械技手などはつまらんよ。」

ヘンリーが機械の研究に身を投じようとする毎に、彼の父親はかういつては反對した。彼は表面、この父の言葉に背かなかつた

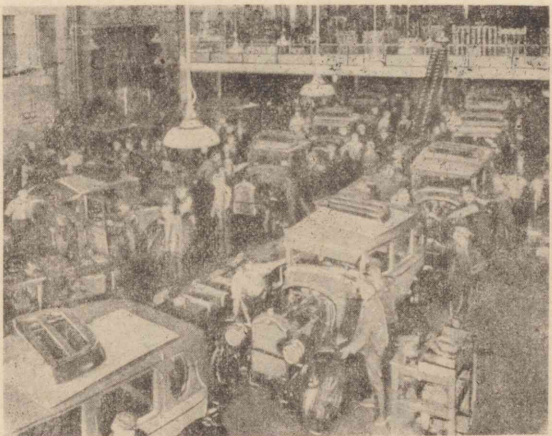
けれども、併し彼の興味が百姓になくて機械に走りつゝあるのを自分自身どうすることも出来なかつた。

彼自ら書いたものによると、彼は十三歳の時に、時計の崩れたのを拾つて来て、それを修繕して動くやうにした。十五歳の時に、時計ならどんなものを持つて来て、立派に直し上げることが出来た。誰からも教はらず、自分が造つた粗末な機械で精巧な仕事を仕上げるこの少年に、友人も先生も舌を捲いたのである。

十七歳の時、彼が小學校を出る頃になると、父親はもう根負けして居た。ヘンリーは父親の同意を得て、機械工場の見習に入つた。晝はそこで働いて、晩は時計の修繕工場に通つた。

「一時時計屋を始めようと思つたけれども、時計はどうしても一般的でないからよした。最大多數の人間を目がける仕事、それが私のねらつてゐたものだ。」

彼はその當時を回顧してかう言つてゐる。彼の着眼は何時でも大きかつた。



部一の場工ド-オフ

忍べるだけ忍んで来た大統領ウ
イルソンの堪忍袋の緒が切れて、米
國といふ偉大な巨體が大戦争の渦
中に飛び込んだ時であつた。召に
應じてフォードの瘦せた身體は、政
府の宏大な建物の應接間の中に役
人と相對して見えた。

「自動車やトラックや、その他のものが至急に要るんですが、最初の貨車を送り出すのにどの位の時間が必要でせうか。」

大戦争
西紀一九一四年
に始まつた世界
大戦

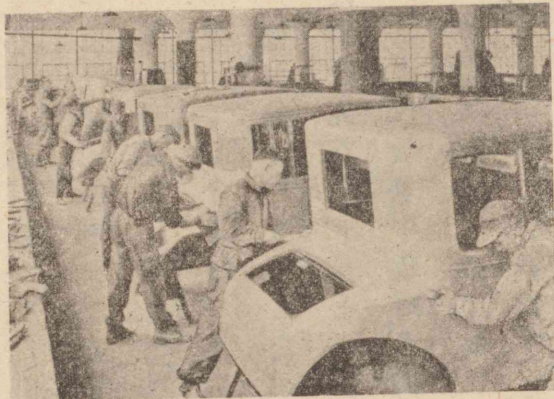
役人は思ひつめたやうにかう聞いた。

「只今御話の分は、明日午後三時までには皆お渡しを完了します。」

次の御注文は五分間づゝあつたら十分です。」

フォードは午後のお茶でも呑むやうな平靜さで答へた。

彼の言ふ事に一分の違もなかつた。あの戦争の間、彼の工場からは機械のやうに規則正しく自動車が流れ出た。そして聯合國側をして十二分にその實力を發揮させることが出来た。



部一の場工ド-オフ

「ヘンリーフォードですがお役人にお目にかゝり度い。」

戦争が終つて後フォードの姿がもう一度役所の玄關に現れた。

「あなたのお蔭で、米國政府はどれだけ助かったかわかりません、厚くお禮を申します。」

政府の高官は、フォードの顔を見るなり、かういつて固く手を握つた。燃えるやうな感謝の念は、その熱心な顔色にも觀取された。

「いえ、國民としてなさなければならぬことをなしただけです。就いては、今日は一寸御手數を煩はしに來たのですが……。」

彼が鞆から取出したのは、一枚の銀行小切手であつた。それには二千九百萬ドルと書いてあつた。

「これは、戰爭中政府の御注文をいたゞいて得た利益です。國をあげて戰つてゐる時に、私だけが儲ける理由はありません。どうぞ國庫にお納め下さるやうお手續を願ひます。」

「これを政府に……御厚意は感謝に堪へませんが、あなたのとこゝろの品物はそれだけでなくも廉いのですから、正當な報酬として

お受けになつて少しも差支ないと思ひますが。」

「私の良心の命令です。どうぞ何分のお取計ひを願ひます。」

フォードの飾らない誠意を見て、政府の高官の頭は自然に、下つた。

—清澤洌の文に據る—

五 ふるさとの山

石川 啄木

ふるさとの山に向ひて

言ふことなし

ふるさとの山はありがたきかな

汽車の窓

はるかに北にふるさとの山見え來れば
襟を正すも



石川啄木

名は一
岩手縣の人
歌人
明治四十五年歿
(年二十七)

今日もまた胸が痛みあり。

死ぬちよらば

ふるさとに行きて死なむと思ふ

かにかくに澁民村は戀しかり

おもひ出の山

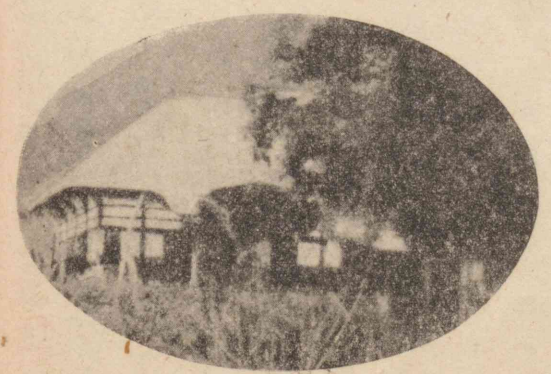
おもひ出の川

その昔小學校の柱屋根に

我が投げし鞆

いかにかなりけむ

ふるさとの



澁民村の木生の家

かの路傍のすて石よ
今年も草に埋もれしならむ

ふと思ふ

ふるさとに居て日毎聴きし雀の鳴くを

三年聴かざり

なつかしき

故郷にかへる思いあり

久し振りにて汽車に乗りしに

何事も思ふことなく

いそがしく

暮らせし一日を忘れじと思ふ

たはむれに母を背負ひて

そのあまり軽きに泣きて

三步あゆまず

飴賣のチャルメラ聴けば

うしなひし

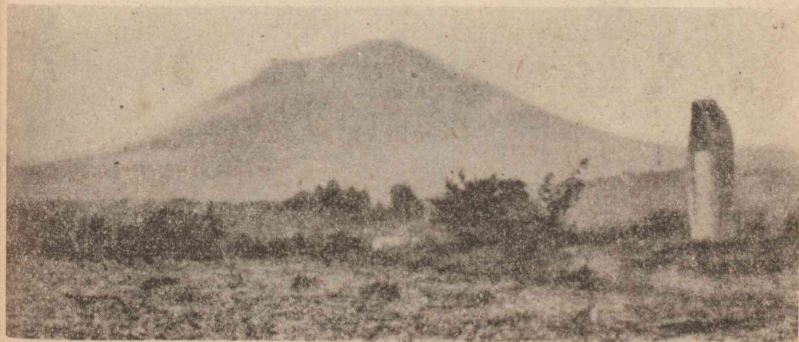
をさなき心ひろへるがごとし

東海の小島の磯の白砂に

われ泣きぬれて

蟹とたはむる

—啄木全集—



啄木歌碑

本山荻舟

名は仲造

岡山縣の人

文學者

柏原

長野縣上水内郡

柏原村

俳諧寺

小林一茶の家

號

一茶

小林氏

名は彌太郎

信州柏原の人

俳人

文政十年歿(年

六十五)

六 崎人一茶

本山 荻舟

柏原の名主嘉右衛門がいそくとして俳諧寺を訪れた。

「すぐにこれから私と一緒に本陣まで来て下され。」

「御用とは何事ぢやな。」

「はて大切な御用ぢや。加賀様參勤の御途次當宿にお泊りなさ

れて、此方の風流をお聞きなされ、是非その發句を見たいとあつ

て、目通り仰せ付けられたのぢや、何と有難い事ではないか。」

一茶は鼻の先で冷笑しながら、

「折角ぢやが、御免蒙らう。」

「あれまあ、何をいはつしやる。」

「風流に御用はない、また面目にする俳諧でもござらぬわ。宇宙

萬物さうした御用で俗化されてしまふのが、私は大嫌なのぢや。」

眠

きよとんとしてゐた嘉右衛門は、瞞すに手なしと、

「いやこれは私があるかつた。御用と言つたはつい何時もの口癖が出たので、加賀様からは入懇のお招きぢや。わざ／＼私の處へお使を下されて、表立つてのお使者では却つて此方が迷惑



御膳所
一茶肖像

(筆市春松村)

一であらう、どうぞ私からさう言つて、懇に同道してくれとお頼みぢや。此方の氣心はよう知つてゐながら、ついあんな事をいつたのは、重々私のあやまりぢや。それが爲若しも此方が来て下さらぬと、私は腹切仕事ぢやから、どうかさういはずに機嫌を直して一寸でも顔を出して下され。」

「あは、腹切仕事はよく出来た。併しそれ程迄にお前様を困ら

せては氣の毒ぢや、念晴しに同道しまじうよ。」

「やれ有難い。それでやう／＼落着いた。」

「併し衣服は改めぬ、尤も改める衣服もないが。この古布子でよからうの。」

嘉右衛門は澁々承知するより外なかつた。

古布子をばつと二三度振つたまゝ、すぐに引懸けて出掛けようとする一茶の袖を嘉右衛門は一寸控へて、

「も一つ私の願ぢやが、何といつても先は百萬石の加賀様ぢや。

此方も何時もの氣性をやめて、少しは御機嫌取に體のよいお世辭でもいふ様にして貰へまいか。」

「あは、是は又異なお頼みぢやな。併し外ならぬ名主殿の事ぢや。思ひきつてやりませうよ。」

「有難い／＼。何時もそのやうに素直に言つて下さると、此方も

古布子

唯
唯唯唯

30
釋

「好いお人ぢやがなあ。」
「は、。お前様も亦何時もそのやうに腰が低いと、好い名主殿ぢやがなあ。」

一茶は皮肉に笑ひながら、弊衣垢面、せびし 跛せびして醜い姿を恥ぢる色も無く、平然として嘉右衛門と一緒に歩んだ。

柏原の本陣には、梅鉢の紋打つた幕を張渡し、盛砂に打水、高張提灯、儀容堂々として百萬石の威を示してゐたが、前田侯は案外打寛いだ體で一茶を引見した。嘉右衛門は無論御前へは出られなかつた。

「其方が一茶か。よう參つた。豫て風流の名は聞いてゐたが、俳味とはどんな事ぢやの。」

一茶は畏るゝ氣色も無く膝を進めて、
「俳諧の道は、孔釋の道と同じでござる。今の俳諧をいふ者は、唯

題を得て發句を作るだけの事。共に談ずるに足りませぬ。」

「左様か。して其方の俳諧はどうぢやの。」

「山水風月、みなこれ俳家生涯のこととござる。心の赴くまゝに發するのが、即ち自然の俳諧でござつて、巧まぬものこそ最も俳味は濃やかでござらう。戸位素餐の輩に眞の俳諧が解らう道理はござりませぬ。」

と、傍若無人の放言に、席に在る者は色を變へたが、侯は却つてにこやかに、

「齒に衣着せずよく申した。聞きし

に違はぬ其方の器量、予はその意氣が氣に入つたぞ。」

「あは、恐れ入ります。」

「これ一茶に膳部を取らせよ。」

一茶

筆蹟

一茶
おのれがすがた
にいふ
ひいき目に見て
さへ寒きそぶり
かな

あつた、
ひいき目に見て
さへ寒きそぶり
かな

小林一茶筆蹟

「はつ。」

やがて運ばれた膳部に對しても、一茶は何の遠慮もなく心のままに酒を飲み肴を荒した。次いで引出物として時服一領を下された。一茶は一寸考へてゐたが、にこりと笑つて、

「有難く頂戴仕りまする。ではこれでお暇を。」

「左様か、大儀であつたの。」

一茶は御前を下がらうとして、何故かふと躊躇した。

「どう致したか。」

「いや飛んだ事を失念致しました。高貴の御前へ出たら、必ず追従を申すやうにと折角名主に頼まれて參つたのに、とんと忘れて居りました。改めて御世辭を申し上げます。」

と一茶はまじめに、額の汗を拭きながら低頭した。

「は、面白い事を申す。その罰として一句吟まぬか。」

子供までのんのうと呼ぶ梅の花

一茶としては珍らしく如才のない句であつた。上首尾で本陣を出た一茶は、拜領の衣服を抱へて、別に嬉しい顔もせず、例の怪しい足どりて飄々と庵室へ立歸つた。庵に入ると、さつそく硯を引寄せて、塵紙を伸ばし、禿筆を嚙んで

何のその百萬石も笹の露

と書いて見せた。門人は顔を見合はせた。

—名人崎人—

七 一茶の俳句

相馬御風

一茶は六歳にして既に句を詠んだと自ら記してゐる。

おれと來て遊べや親のない雀

これは、三歳にして慈母に死なれ、祖母の手一つで育てられてゐたあはれな母なし子の淋しさのおのづからなる表現であらうが、

禿筆

相馬御風
名は昌治
新潟縣の人
文學者

而も全く驚嘆に値する立派な藝術的表現である。

おれと来て

あそべや

親のない雀

近年童謡といふ名の下に兒童の詩的表現が大いに尊重され奨励されてゐるが、それにしても今日これだけの秀れた作を見出すことは決して容易ではない。

そればかりでなく、この一句に現れてゐる六歳の母なし子彌太郎の詩情が、最後まで一茶の俳句の一面の特色をなしてゐることは一層興味深い事實である。

瘦蛙負けるな一茶是にあり

やれ打つな蠅が手をする足をする

行け螢とくく人の呼ぶうちに

蚤どもが晝夜長だろ淋しかろ

雀の子そこのけそこのけお馬が通る

寝返りをするぞそこのけきりくす

蝸牛壁をこはして遊ばせん

こんな風に、小さな弱い動物に對する温かな思ひやりの表現が、

蛙
きん
瘦蛙負けるな一茶是にあり

一茶筆蹟

筆蹟

蛙たゝかひ
瘦かえるまける
な一茶是に有
俳諧寺

一茶の句に於ける一つの顯著な特色をなしてゐるのであるが、それが既に七歳の彌太郎の雀子の吟に於て、いみじき表現を得てゐたことは、まことに驚嘆すべきである。

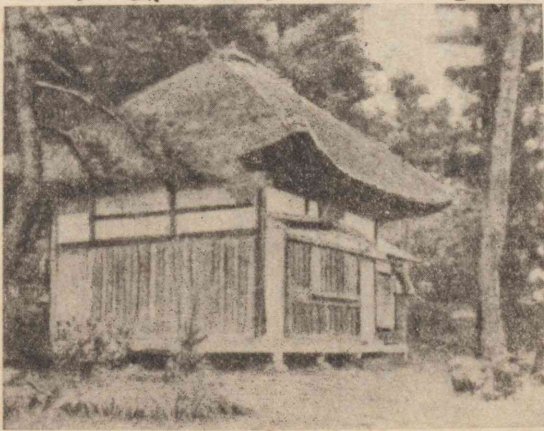
ところが更に私の面白く思ふことは、一茶にさうしたやさしいしみじみした一面があつたと共に、他面に於て次の句に現れてゐ

るやうな皮肉なところもあつたことである。

虱を捻り潰さんことのいたはしくあり、又門にすてて斷食さず
るも見るに忍びざる折柄、御佛の鬼
の母にあてがひ給ふものをふと思
ひ出して、

わが味の柘榴へ這はす虱かな

昔から柘榴の實には人肉の味があ
ると言ひ傳へられてゐる。そこで一
茶は或時自分の體にたかつてゐる虱
を捉へて「きさま、おれの肉を食ふ代り
に同じ味のする柘榴の實でも食つて
ゐろ」といつたやうな工合にそれを柘榴の木に匂はせてやつたと
いふのである。いかに柘榴の實に人肉の味があるといふ傳説が



寺 諧 俳

葦蒲公英

あらうとも、虱が柘榴の實なんか食つて生きて行かれないことは、
一茶と雖もよく知つてゐたに違ひない。しかも、一方に潰す事を
いたはしく思ひ、さうかといつて外へすて、斷食させることも見
るに忍びないことだと思ひながらも、それを柘榴の木に這はせて
興がつてゐる。時々さうした皮肉な冷やかな微笑を以て物を見
ずにゐられなかつたことも、たしかに一茶の一面であつた。

布施東海寺に詣でけるに、鶏どもの迹をしたひぬることの不便
さに、門前の家によりて米一合ばかり買ひて、葦蒲公英のほとり
にちらしけるを、やがて仲間喧嘩をいく所にも始めたり。その
うちに木末より鳩雀ばらぐとび來たりて、心しづかにくらひ
つゝ、鶏の來る時小ばやくもとの梢へ逃げさりぬ。鳩雀は鶏の
蹴合ひの長かれかしと思ふらん、士農工商その外さまさまの
稼たはひ、みなかくの通り、

米蒔も罪ぞよ鶏が蹴合ふぞよ

これは一茶の日記中にしるされたところであるが、初め自分のあとを慕うて来た鶏をふびんと思ふあまり、米を買つて来て蒔き與へて置きながら、その米がもとて鶏が仲間喧嘩を始めたのを面白がつて、傍觀したり、鳩や雀が隙をねらつて、心しづかに鶏に與へられた米を喰つてゐるのを追ひもせずに眺めてゐた一茶の心持は面白い。「喧嘩なんかよせ、なぜ仲よく皆で食はないのだ」といつた調子で、その場合鶏に喧嘩を止めさせようと騒ぎ廻つたり、「おいそれは鶏にやつた米だぞ、きさまだちはあつちへ行つてをれ」といつた風にその場合、鳩や雀を追ひまくつたりせず、たゞもう何といふことなしにその場の光



一茶終焉の土蔵

景を眺めてから「土農工商その外さまさまのなりはひ皆かくの通り」などと捨せりふを残してもぞく／＼その場を立ち去つて行く――そこにもたしかに一茶一流の皮肉な微笑がある。幼い頃から逆境に處して苦しみ續けて来た一茶には、その苦勞ゆゑに、弱いもの、憐れなものに對する同情も人一倍深かつたのであるが、それと同時に他面に於てさうした皮肉な心もいつとなしに出来上つたのであつた。

――郷土に語る――

八 若葉

正岡子規

城門を出てをちこちの柳かな

竹垣や雨の山吹土に伏す

夜越して麓に近き蛙かな



正岡子規

子規は號
松山市の人
俳人
明治三十五年歿
(年三十六)

舟よせて鳥居を仰ぐ若葉かな
城跡や麥の畑の桐の花
舟に見る膳所の城下の幟かな

疾一斗糸瓜の水

水も了あたま

蹟筆規子岡正

筆蹟
疾一斗糸瓜の水
も間にあはず

手に満つる蜩うれしや友を呼ぶ
須磨寺のともし火うつる青田かな
第三の石門涼し雲の上

椎の木やしげりて見えぬ上野かな
植ゑ残す水田に朝の靄深し
苔清水馬の口籠をはづしけり

九 四季の眺

貝原益軒

一 春

花もやうく咲きつゞきて、梅花すてにうつろひて後新なるは、
我が國ならぬ唐桃の花なるべし。桃紅なるは、たなびく雲の面影
のたつ心地す。李白きは消えがての雪の梢に残れるかと思えて
いとうるはし。

櫻の綻び出でたるこそ花に心はなけれど、人の心を動かしてえ
ならぬ眺なれ。これ我が日の本にて四時の花の多き中にも第一

貝原益軒
福岡の人
徳川時代の學者
正徳四年歿(年
八十五)

櫻 花 眺



(筆年景尾今)

櫻

の 見ものなれば、梅
散りて後、この頃の
異花は皆けおされ
ぬ。されど日頃待
たせ待たせて、やう
やう咲けるが、あく

まで見る程もなく疾く散るは又うらめし。

よしさらば散るまでは見じ山櫻

花のさかりを面かげにして

と古人のよみけんも、後の思出にせんとにや情深し。この折から
春雨のしきりに降れば、我が宿の園の櫻は如何にあらんとうしろ
めたし。柳緑に花紅にして春の色を描き出せるはいと麗しき眺
なり。

よしさらば
續古今集(藤原
爲家)

二 夏

惜しめども
惜しめどもとま
らぬ春もあるも
のをいはぬに來
たる夏衣かな
新古今集(素性
法師)

惜しめどもとまらぬ春すでに去りぬれば、よばぬに來たる夏衣
のうら珍しく、今めかしう改れるころほひ、おほかたの空のけしき
心地よげなるに、青葉の梢若やかに、物毎に春に立ちかはりて、又世
異なる有様なるもいとなんめでたき。緑陰晝寂を生ずれどもわ
びしからず、閑談にふける人は繁花にも優れりとす。折待ち得た
る杜鵑の初音まづなつかしく、鶯の啼く音すでに老いたるに代
れる心地ぞすなる。もろこし人は杜鵑の聲きくことを悪めども、
我が日本にては昔よりこれをあはれみて、歌にも多く詠めり。夜
もすがら空もとゞろに鳴きわたれども、聞く人みなあなかまと思
はず。多からぬ所は、今一聲だに聞かまほし。又鳴き行く方の人
も待ちなんと思へば、過行くも更に恨むべからず。卯の花の垣根
の雪にまがへるも、ひとりこの月の名をおひて美を専らにすとい

空もとゞろに
五月雨の空もと
どろに杜鵑何を
うしとか夜たゞ
啼くらん 古今
集(紀貫之)

ふべし。およそ卯月のけしきは清く和かにして、空晴れ雨久しく降らず、餘寒盡き、日いや永くして暇多ければ、出でて遊ぶによし。朝まだき起きて、園をうかがふにも、風暖にしてなやみなければ、日に涉りて見所多く、草も木も皆緑の色をあらはして、各、その趣を



杜成せる
は、天地
の恵を
享けし
まにま
(筆 畝 秀 上 池)

に生ける類より更に私なくして、いぶかしみなくなづさはれぬ。

卯月はかく空はれやかなれど、やがて皁月になりぬれば、大空の景色さいつ頃に引きかへてさみだれ久しく續き、折々はなるかみおどろ／＼しくて、降らぬ時だに曇らしく、物のあやめも知らず園をうかゞふべき隙稀にして、常にたれこめて日數を経るもわびし。

夏もやう／＼深くなりぬれば、木として繁らざるはなく、草として榮えざるはなく、日々に物を引伸ぶるやうに見えて、ひたすらに緑の色深き夏木立こそ、花にもをさ／＼劣るまじけれ。春の花は處々に咲きて稀なり。夏は山も里もあるとしある草木ごとに打ちへて、皆緑の色なれば、春に異なる眺なり。八千草に植ゑ集めてなづさひし前栽の草木ども、雨を帯びておの／＼その梢をあらはし、所得顔に心にまかせて生ひ茂れるもうれしと見ゆ。昔おぼゆる花橘のかをれる夜は追風もいとなつかし。早苗とる頃、田家は雨を待ち得て忙はしく賑はし。この頃遣水のほとりに飛ぶ螢の音もせですだくを見れば、鳴く蟲よりいと憐むべし。夏山のけしき、青みわたりたる高き峯大空につらなりて、雲の外に聳えたるをあくまで見るこそ、殊にすぐれて心を快くする眺なれ。白樂天

花橘のかをれる
さつき待つ花橘
の香をかげば昔
の人の袖の香ぞ
する(古今集)
音もせで
音もせでおもひ
にもゆる螢こそ
鳴く蟲よりもあ
はれなりけれ
源重之

白樂天
支那唐代の詩人

が、眼を放にして青山を見る。」といへるが如し。

三 秋

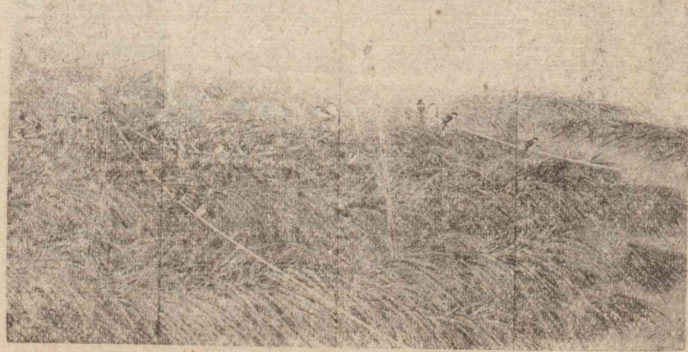
阮籍
支那晉代の人
竹林七賢の一人

秋來ぬれば、初風涼しく、打吹きて、草木のそよぎ、秋の聲のいづこにもうちなびきて、聞ゆるこそ、初春の風にかはり、心を傷ましめ、身にしみて、金氣の至れるしるべと、覺ゆれ。きりくすのきざはしのもとに、すだくも、折知り顔に聞えさす。阮籍が懷を詠ぜし詩に「開秋兆涼氣、蟋蟀鳴床帷」といひしも、この頃の景氣をいへるなり。大暑やうやく退き、新涼すてに來りぬれば、恰も酷吏の去りて、故人のここに來れる心地ぞすなる。この頃は人の形氣力を得て、燈も親しくなりぬれば、古き書ども、卷き舒ぶるに時を得て、萬づの樂しみに勝りこよなう面白し。萩の上風、萩の下露さまぐの蟲の音、皆秋のあはれを催して、身にしむこと限りなし。門田の稻葉朝露にうるほひ、夕の風音づれて、そよぐけしき、殊更早稻晚禾の先だち

後れて、穗に出でたる有様、皆見るに堪へたる眺なり。

秋も半ば過ぎ行けば、大空に初雁がねのつらなりて、鳴き渡るもまた珍し。春は花とこそいへれ、秋もまた花多かめり。殊更野邊に立てる秋草の名も知らぬ花ども多く、叢に紐とき錦を曝すが如く見ゆれば、秋の野いと珍し。秋の花の久しきに堪へて、散りがてなるは、春の花の見る程もなく、早く散りぬるに勝れり。

およそ花のいとけやけきは、春は梅・櫻・李・海棠など、木々の花多きは、陽氣はまづ空に昇れる故にや。秋は萩・女郎花・尾花・葛・花・撫子・藤袴・朝顔、この七草の外、桔梗・龍膽など、くさりの花猶も多



(菅菰千倉繪)

位 豊

春は唯一つ草と
緑なる一つ草と
ぞ春は見し秋は
色々の花にぞあ
りける(古今集)

かり。秋はまづ陰氣下へ降れる故ならずや。撫子春は唯一つ草とのみ見ゆれど、夏より咲きそめて、秋の色をあらはせるは、唐の日本のいろ／＼の花ぞ咲くめる。長月の頃は、秋の花も過ぎ紅葉もまだしき折なるに、菊は百花に後れてひとり晩節を保ち、霜に誇りて操の色をあらはし、すべての花に時を異にするのみならず、色・形・匂ともに殊にすぐれてあてやかなれば、この時もし花多くともわきてあはれむべきに、秋の末にひとり盛なれば折にあひていとめでたし。

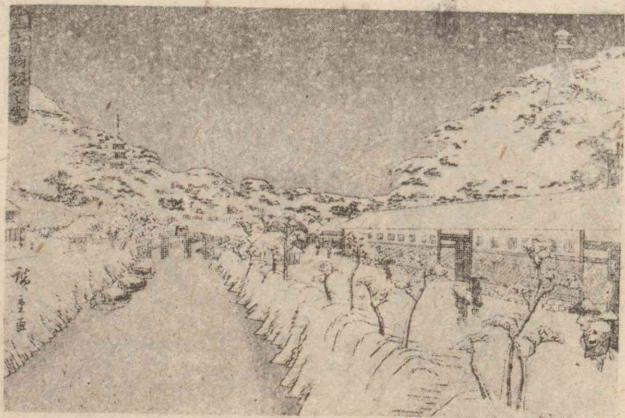
四 冬

すこし春ある心地

冬も來ぬれば、今朝より馴る、埋火のもと、やう／＼立ち離れ難し。露と霜とおきかはし、紅葉色濃く、木々の梢淺茅が原も冬枯の景色となり、面がはりするも秋にことなる眺なり。神無月の時雨も過ぎて日暖なれば、すこし春ある心地す。むべこの月を小春と

空さむみ花にま
がへて散る雪に
すこし春ある心
地こそすれ(枕
草子)
木の葉降りて
冬の來て山もあ
らには木の葉降
り残る松さへ峯
にさびしき(新
古今集)

ぞいへる。されど一の日二の日やうやくかさなれば、風氣いよいよはげしく、木の葉降りて山もあらはに見え、残れる松も峯にさびし。春夏秋の艶なる景色、よそほしかりつる有様、皆この時に至りて盡きぬれば、殊の外にもかはれる空かなと、目驚かさされぬ。日ごろ雪いみじう降りていかめしう積りたる曉は、山も里もひたすら銀世界となりて、世かはり景色異なる有様なり。冬ごもりせし梢の枯れたるも再び花咲けるが如し。殊更冬の澄める月に、雪の光りあひたる空こそ、見る人なくひとり身にしみてあはれも深けれ。空霽れて後まで、友待つばかり處々消え残り



(筆重廣)

雪

たるはだれ雪もいと心にくし。かゝる時するわざなく唯袖く、
みしていらゝぎ居る人はいとわびしげに見ゆ。或は埋火に向ひ、
文を卷き舒ぶるを以てわざとする人は、楽しみ深くぞありぬべき。
およその事、年に先だちて早く計るべし。若き時つとめて文を讀
み習はは、かゝる時もわびしかるまじ。

樂訓

本間久雄

米澤市の人

文學博士

早稻田大學教授

一〇 東西の自然詩觀

本間 久 雄

吾々日本人と西洋人とは、自然に對する觀方が著しく異なつ
てゐる。この事は、彼我の文學や藝術を比較鑑賞する者の容易に
首肯し得る所である。

先づ吾々日本人は、自然といふものに對して、著しく親愛の感情
をもつて居り、また自然の美に對して敏感である。西洋人は、この
點に於て遙かに劣つてゐるらしい。その證據には、例へば英語で

ルソー
フランスの思想
家(西紀七三十一
年)

「ネーチュア」といふ言葉は、少くとも十八世紀の終頃までは今日用ひ
てゐる外界の自然といふ意味ではなくて、^{ヒューマン}人間の性情^{ネイチヤ}といふ意味
であつた事に徴しても分る。十八世紀の後半に哲人ルソーがそ
の當時の文明に反抗して、例の有名な「自然に還れ」といふ事を唱へ
たが、この場合の自然もまた、人間の本性といふ意味で、言葉を換へ
て言ふと、徒に人爲的な文明の虚偽と虚飾とを一切捨去つて、赤裸
々な、純眞無垢な人間の本性に立返れといふ意味であつたのであ
る。蓋しこの事實は、「自然」といふ言葉が、西洋に於ていか様に用ひ
られてゐたかといふ事を示してゐると共に、また自然そのものが
いかに鑑賞の對象として重んぜられてゐなかつたかを語るもの
である。

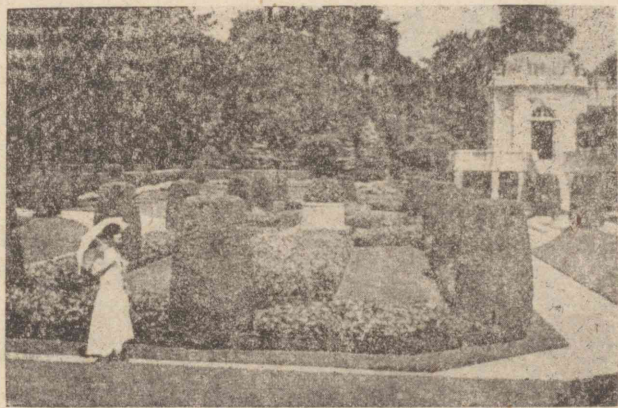
事實また繪畫などに就いて見ても、自然そのものを取扱つたい
はゆる風景畫といふものの重んぜられたのは、極めて近代の事て

あつて、少くとも十七世紀以前には、天然の風景そのものを主題と

した、繪畫は殆どなかつたと言つてよい。無論風景を描いたものもないではないがそれは唯人物畫の背景としてに過ぎなかつた。自然そのものの美を感じ、それをそれ自らとして繪畫の題材としたものではなかつたのである。

またはゆる造庭術などいふものに就いて見ても、自然に對する彼の態度の相違がよく分る。西洋では、庭は客間の延長に過ぎない。

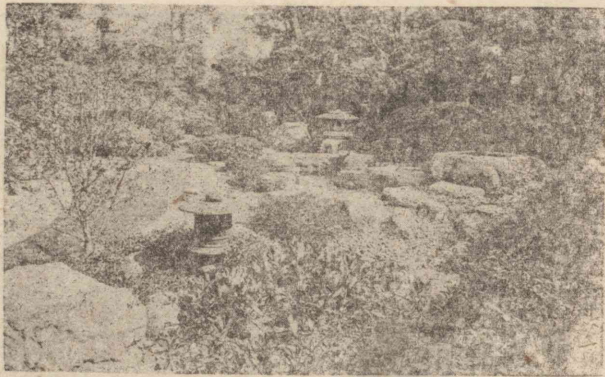
随つて庭の芝生は、普通に「緑の毛氈」と呼ばれてゐる。客間に毛氈



西の庭園

を敷く様に、庭の緑の毛氈即ち芝生をこしらへるのである。であ

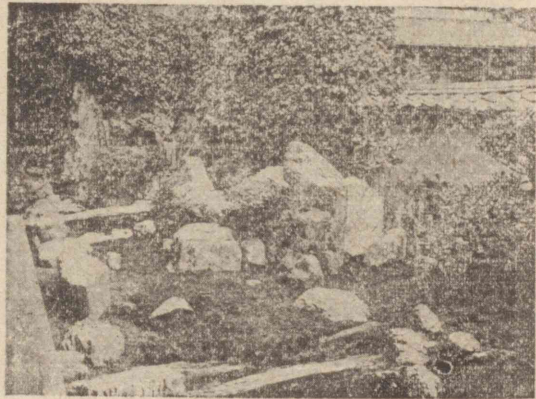
るから、樹木の配置でも、石の配置でも、すべてそれは客間に、椅子や、卓子や、その他の家具類を配置すると同じ氣持で造られたものである。これに反して日本の庭は、出来るだけ人工を加へない自然のままの面影を取入れようとしてゐる。即ち石の置き方でも、樹木の植ゑ方でも、水の流でも、出来るだけ深山幽谷の趣を傳へようとしてゐる。自然に對する態度のいかに異なる。つてゐるかは容易に領かれるではな



日本の庭園

いか。

また同じく、自然を描いた詩歌を取出してみても、西洋のは自然



(園庭院仙大寺徳大東京) 園庭の本日

を描く事によつて、同時に作者がその抱懐してゐる思想感情を吐露したといふのが多い。言葉を換へて言ふと、詩人が自己の人生觀なり、宇宙觀なりを専ら表白する爲に、自然を借りて來たのである。例へば、イギリスの詩人ゼームストムソンの有名な「四季の歌」が春夏秋冬の移り變りを描きながら、其所に人生の榮枯盛衰の果無さを暗示したり、同じくイギリスの詩人ウィリヤムウォーヅワースが、自然の美を讚へながら、其所に麗しい人間の世の相を冥想し、併せて神の恩寵の遍く充ち溢れてゐるのを感じるとい

ゼームストム
ソン
(西紀1700—1750)

ウィリヤムウォ
ーヅワース
(西紀1700—1850)

ふ如きである。

しぎ立つ澤云々
一心なき身にも
あはれは知られ
けりしぎ立つ澤
の秋の夕ぐれ
(山家集)
夏草の云々
「夏草や兵ども
が夢の跡」奥の
細道)

日本にも、これに類した自然詩人のある事は言ふまでもない。しぎ立つ澤の秋の哀れに人生の無常を觀じた西行、夏草の所得類に生ひ繁つてゐるのを眺めて、兵どもの夢の跡を弔つた芭蕉の如き、その代表である。が、日本には更に、自然の風光をそれ自らとして、何等の主觀をも加へずに詠じてゐる多くの詩歌のある事を忘れてはならない。

即ち古い所では、人麻呂の

天の海雲の浪立ち月の船

ほしの林に漕ぎかくる見ゆ

の如きから、近世では蕪村の

菜の花や月は東に日は西に

の様に、自然の美しい相を純粹な客觀的な立場から、全くそれ自ら

として、詩歌の對象としてゐるものが甚だ多いのである。蓋し、かくの如きは、外國の詩歌には比較的少い所で、明らかに日本の詩歌の一つの特徴と見てよいのである。と同時に、この一事は、偶、以て吾々日本人が自然美そのものに對して、いかに外國人よりも、より一層敏感であり、それを鑑賞する能力に於てより一層優れてゐるかといふ事、一言で言へば、自然そのものに、彼等よりもいかにより一層深い親愛を感じてゐるかといふ事を證するものに外ならぬのである。

さて、それならば、どうして吾々日本人がさうであるかと言ふに、その一つは、日本人の國民性の中に、自然愛好の一念の特に際立つて強いものがあるといふ事に歸しなければならぬ。が、更に遡つて、どうしてさういふ國民性が形作られたかと言ふ事になると、その一つの原因は、明らかに日本の自然そのものが特に豐潤であ

り、風光そのものが特に明媚であるといふ事にあるのである。と言ふのは、もとゞ、國民性は、風土の關係によつて影響される事の極めて多いものだからである。この意味から言ふと、日本の自然と外國の自然とはそれ／＼、それにふさはしい自然鑑賞の態度を、彼我國民の間に形成したとも言ひ得るであらう。が、それはとにかく、自然に對する親愛の感情の特に強い事は、確かに吾々日本人の誇つてよい特徴の一つである。

—東遊記—

一一 川柳選

寝てゐても團扇のうごく親ごゝろ
 本降になつて出て行く雨やどり
 武者一人叱られてゐる土用干
 義貞の勢はあさりをふみつぶし

自然
 親愛の感情

芭蕉は飛び込み道風は飛びあがり
 知れてゐるものをかぞへる泉岳寺
 わらぢくひまでは能因氣がつかず
 米つきに所をきけば汗をふき
 泣くくもよい方をとるかたみわけ
 おさへれば芭はなせばきりくす
 釣れますすかなど、文王傍により
 源左衛門鎧を着ると犬が吠え
 うた、ねの顔へ一冊屋根に葺き
 あしたでも剃つてくれろと飛車がなり
 かみなりをまねて腹掛やつとさせ
 居候三杯目にはそつと出し
 武藏坊とかく仕度に手間がとれ

一二 瓜盗人

瓜主罷出でたる者は、この邊の耕作人でござる。當年は瓜を作り
 てござるが、身共が仕合で、殊の外よう出来てござる。今日は畑へ
 見舞うて、臍落の致したを、ちと取つて参らうと存ずる。まことに
 この邊方々に瓜を作りたれども、某がやうなはござらぬ。畑へは
 毎日見舞はねばならぬ。これが身共が畑ぢや。やれ、嬉しや。
 夥しう生つた。思ひ出した。いつも畑へ獣がついて瓜を荒す。
 人形を作りおかう。人形を作る。一段好い。明日見舞うて臍落を取ら
 う。太鼓座へ入る。

瓜盗これはこの邊に住居致す者でござる。今日所用ござつて、山
 一つ彼方へ参つてござるが、道に見事な瓜が生つてあつた。私に
 お目をかけらるるお方に、瓜好きな人がござるほどに、今夜あれへ

参つて、四つ五つ取つて参らうと存ずる。方々に瓜畑が數多ござれども、今日見て置いたやうな、見事な瓜はござらぬ。この邊にあつたが、どの畠ぢや知らぬ。これぢや。まづ垣杭を抜かう。垣を二三本抜がめて畑へはいる。さあ畑へは這入つたが、番の者は無いか知らぬ。有るならば聲を立てうが無いものぢや。晝見たれば瓜がいかい事見えたが、夜ぢやによつて見えぬ。これが瓜さうな。瓜かと思うたれば枯葉ぢや。あそここゝを瓜にあたたらぬ。この様な事では、瓜を取る事はなるまい。何としたものであらう。思ひ出した。瓜を取るには轉びをうつて取るものぢやと聞いた。さらばこれから轉びをうつて見よう。さればこそ、枕のやうにあたつた。枕時寝て居てわらふ。一扱もく、好い匂ぢや。此所にあるわ。後の方にもあたつた。この様にして取らば、如何ほどなりとも取られう。此所にて地謡ひの方にかがせあり。その側へ轉びかゝる。人形を見て肝を潰す。眞平御免されませ。私は盗人で

はござりませぬ。こなたの畑が、餘り見事に瓜が生りましたと承りまして、見物に参りました。命の儀を御免されませ。瓜二つ三つ取りましてござる。皆返しませう。御免なつて下されませ。申し、物を仰しやらねば、何とも迷惑でござる。重ねては最早参りますまい程に、平にゆるさせられて、返させられて下されませや。申し、なう。手をあげて暗き時物を見る態して、人形と見付けて、これは如何なこと。うしにくらはれ、扱もく、よい肝を潰いた。瓜主かと思つて、いくせの事を思ひ、迷惑した。この様にようもようも、上手が作つたものぢや。その儘人のやうな。獸が見たらば、肝を潰いて、あたりへは寄るまい。此奴故思ひも寄らぬ肝を潰いた。重ねて來る事ではなし、うちこかいて退けう。腹の立つ事ぢや。瓜蔓も引き拵つて退けう。よい仕合。急いで戻らう。太鼓の側へ入る。瓜主、昨日瓜畑へ参つた。まだ臍落が致さなんだ。今日は大方臍

落がござらう。取つて参らう。内の者を遣れば、瓜を盗み居るによつて、某の毎日参らねばならぬ。これは如何な事。散々に畑を荒れておいた。これは扱、蔓も引き撈つて置き居つた。その上人形も打倒れておきをつた。これはいかさま、獸の業ではない。瓜盗人め、ゆうべうせたものであらう。扱も、腹の立つ事ぢや。今夜は某が案山子になつて捕へう。定めてゆうべの味を得て、また今夜も取りに参らぬことはあるまい。右の人形の様に烏帽子を著、面を被り、左に網右に竹の杖、床几に居るか

瓜盗他所へ物を遣るとも、後前の分別して遣らう事ぢや。盗んだ瓜を、さるお目をかけらるゝ方へ進上致したれば、さても好い瓜ぢや、これはそちが手作りかと仰せられたによつて、なか、私の手作りでござると申したれば、扱も好い瓜ぢや。近頃無心なれども、客があるほどに、瓜をま四つ五つくれいと仰せらるゝ。何とも返

事の致しやうがなうて、畏まつてござると申した。某の手作りでござると申したによつて、今更なりますまいとも申されぬ。是非に及ばぬ。今夜あれへ行て、瓜を取つて参らうと存ずる。この様に又参らうとは知らいで、瓜畑を散々に荒して置いた。瓜主が見舞はぬ事はあるまい。見舞うたらば腹を立てて、今夜は番をして居る事もあらう。何とやら胸騒ぎがして氣遣ひな。この畑ぢや、いや、ゆうべ垣を破つて置いたが、その儘ある。定めて瓜主が見舞はなんだものであらう。見舞うたらば、この様にしては置くまい。さればこそ撈つておいた瓜蔓が、その儘である。嬉しい事ぢや。その人形の側へ寄り、見つけて大きに肝を潰す。これは如何な事。不思議な事ぢや。ゆうべ人形をうちこかいて置いたが、又立てて置いた。これは思へば、瓜主が見舞はぬではない。合點がいかぬ。はあ、合點した。定めて内の者の業であらう。主が畑を見舞うて来いと言ひ付けたによ

つて、見舞はしたれども、人形ばかり立てて置いた垣もその儘で戻つたものぢやあらう。總じて下々は、どれもこの様なことぢや。殊にこの案山子はゆうべよりは猶よう人に似た。こゝにて仕様あり、下に居てうそふきどして笑うて、その儘人ぢや。」

瓜盗「これは如何なこと。何者やら飛礫を打つた。四邊に人は無いが、不思議なことぢや。何者が打つたぞ知らぬ。合點が行かぬ。今この綱を引いて肩にかけたればうつつたが、はあ、扱もく、よう拵へたものぢや。百姓は賢い者ぢや。これなれば氣遣ひない。」
瓜主面「がつきめ、やるまいぞ、やるまいぞ。」
瓜盗「あら悲しや。免させられ、免させられ。」

—續狂言記—

五十嵐力

山形縣の人

國文學者

文學博士

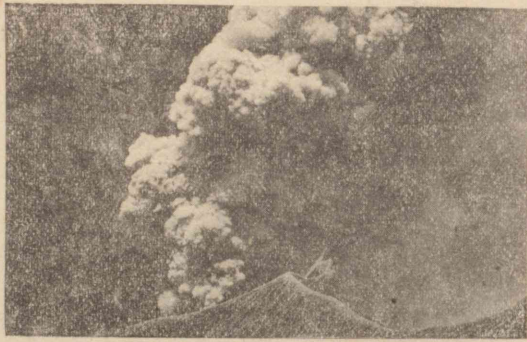
早稲田大學教授

一三 山のたより

五十嵐 力

一 阿蘇山より

栃の木温泉
白川の溪谷に沿
ひ高森線長陽驛
から約二軒
二十餘町
約二・一八キロ
メートル



阿蘇山の噴火口

今日愈、阿蘇登山致し候。朝の六時に栃の木温泉を發ち、十一時少し過に山上なる阿蘇大權現の社前に著し候。それより上ること二十餘町にして、世界一の大噴火口の懸崖の縁に立つべく候。この大噴火口を護りて周圍に立てる外輪の山々は、概ね緑の矮草を纏うて、撫肩麗しく見え候へども、その間を通り過ぎて大火山口の縁に立ち候へば、光景俄然として一變致し候。磊々たる赭色の火山壁に、白ちやけたる筋の幾つとなく通れる所は、地球といふ大いなる動物の身を切れる横断面とも申すべく、徑十餘町、深さ六十幾間といふ大火山口の底に、色異なる五つの熱湯湖の横はれる趣は、地獄の庖厨とも申すべきか。

私はこの大噴火口を見て、天地の實に大きく、人間の實に小さき事を覺り候。今まで見たる事なき、恐しき尊さといふものに接したる心地致し候。やがて下山の途につきて無事に柵の木に著き候は、午後五時頃にて候ひき。非常に偉大なる者に接し候後の心地は、今だに茫然惘然と致し居り候。

頓首

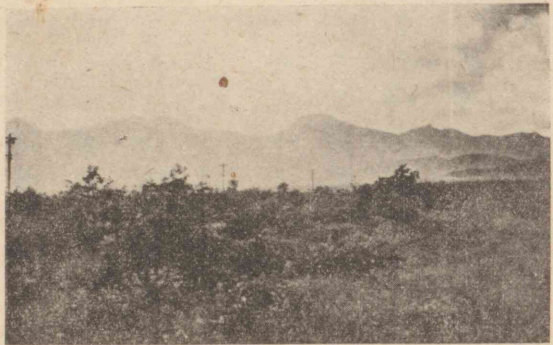
二 那須より

拜啓。盛夏の折柄、愈々御健勝に御過し遊ばされ候や。小生兩三日、前當温泉に參り候。青葉を渡りくる山風冷えくとして、眞夏といふに單衣を重ねても寒きくらゐ、それに杜鵑、鶯、閑古鳥、るり鳥、未明より啼きそひて、耳の極樂は此所にやと疑はるゝばかりに候。今朝はまた快晴にそよのかされ、朝日に先だちて起き、一浴して山路を散策致し候。日蓮上人の喰初庵くひぞめを左に見、綠樹に挟まれ、露に濕れるだら／＼坂を登りて旭橋に至り、清き空氣を壇に呼吸し

當温泉
栃木縣那須郡那須村那須温泉

壇
喰初庵
新那須温泉にあ
ス湯本温泉より
約一キロメート
ル南

静觀樓
新那須温泉にあ
る旅館



那須の連嶺

て、爽快の氣分を存分に味はひ候が、更に靜觀樓の上なる山見新道にさしかかりて、俯仰の壯觀に打たれ候。

仰げば北の空には、大笠を冠れる如き活火山の那須嶽、一名茶臼嶽、舊名月山を盟主として、大鋸の刃を刻める朝日嶽、一名毘沙門山、筑波に似たる雙峰の南月山、美しく片裾を曳きたる黒尾谷山、右より左に蜿蜒として變化ある輪郭空に劃し、朝ざめの颯爽たる雄姿を横たへるには候はずや。南には大那須野のしもと原、綠渺茫として、彼所此所に朝霧をあしらひつゝ、繪の如く遙かに展開しをるには候はずや。小生此所に來れる初には、山に富士の如き、美容なく、野に瀬戸内の如き色彩なきを見て、いかにも單

七湯
湯本・高雄股・辨
天・北・大丸・板
室・三斗小屋

今二十七日
昭和三年七月

調平凡なる様に感じ候ひしが今朝の山野の眺望によりて、すつかり迷の夢を覺されたる心地致し候。この那須の野の渺茫たる青木が原、何時までこのまま續くかは知らず候へども、原始的なる野趣の一部分だけは、何時までも保存したく存じ候。五嶽雲際之美、これは此所の名高き七湯の温泉と共に永へに存在すべく、憂ふるに足らず候。

今二十七日は正午間近に聖駕御用邸に行幸あらせらるるとの事にて、久しぶりの快晴野も山も草も木も、御迎へ心に装を凝し候さま、嬉しき限りに候。また晝のうちの晴天が夕方よりうち時雨れて、風なき雨しとく、とうち煙り候が思ふに行宮におちつかせ給へる大君、なごやかに御寝りませとの、那須の野の神の美しき心づかひにも候べし。曉より夜にかけて、美しさ面白さの限りを盡せる那須の一日の消息、走筆勿々御知らせ申し上げ候。 不盡

一四 落葉松

北原 白秋

北原白秋
名は隆吉
福岡縣の人
詩人

一 からまつの林を過ぎて、

からまつをしみじみと見き。

からまつはさびしかりけり、

たびゆくはさびしかりけり。

二

からまつの林を出でて、

からまつの林に入りぬ。

からまつの林に入りて、

また細く道はつづけり。

三



からまつの林の奥も、
わが通る道はありけり。
霧雨のかゝる道なり、
山風のかよふ道なり。

四

からまつの林の道は、
われのみかひともかよひぬ。
ほそぼそと通ふ道なり、
さびくといそぐ道なり。

五

からまつの林を過ぎて、
ゆるしらず歩みひそめつ。
からまつはさびしかりけり、

からまつとさゝやきにけり。

六

からまつの林を出でて、
浅間嶺にけぶり立つ見つ。
浅間嶺にけぶり立つ見つ、
からまつのまたそのうへに。

七

からまつの林の雨は、
さびしけどいよよしづけし。
かんこ鳥鳴けるのみなる、
からまつの濡るのみなる。

八

世の中よあはれなりけり、



常なけどうれしかりけり。

山川に山がはの音、

からまつにからまつのかぜ。

—北原白秋集—

一五 世に處する道

勝 海 舟

勝海舟
名は安芳
海軍卿
樞密顧問官
明治三十二年歿
(年七十七)

世に處するには、どんな難事に會つても臆してはいけぬ。「さあ、何でも来い。おれの體がねぢれるなら、ねぢつて見よ。」といふ料簡で行くがよい。さうすれば、難事が到來すればするほど面白みがついて来て、物事は造作もなく落着してしまふものだ。

何でも大膽にかゝらなければいかぬ。どうせうか、かうせうかと躊躇するやうになつてはもういかぬ。若し一度で出來なければ、何度でも出來る所までやり通す。兎角世間の人は、事業の成就する前には、や根氣が盡きて疲れてしまふから、大事が出來ぬのだ。

確乎たる方針を立て、決然たる自信によつて知己を千載の下に求むる覺悟で進んで行けば、何時しか我が赤心の貫徹する時機が来て、これまで敵視して居た人の中にも互に肝膽を吐露しあふほどの知己が出來るものだ。區々たる



勝 海 舟

世間の毀譽褒貶を氣にするやうでは到底仕方がない。そこに行くところ、西郷南洲などはどれ程大きかつたか分らぬ。高輪の一談判で自分の意見を容れたばかりでなく、江戸全市鎮撫の大任まで一切自分に任せて少しも疑はぬ。昨日まで敵味方であつたといふことは何處へか忘れてしまつたやうだ。その度胸の大きいことには、自分もほと／＼感心した。官軍が品川まで押寄せて来て、いまにも江戸城へ攻入らうとす

る際に、西郷は自分が出した唯一本の手紙で、芝田町薩摩屋敷までその談判にやつて來た。當日、自分は羽織袴で馬に騎つて、從者を一人連れたのみで出掛けた。まづ一室へ案内されて暫く待つて



西郷 隆盛

居ると、西郷は庭の方から、古洋服に薩摩風の下駄をはいて、例の熊次郎といふ忠僕を従へ、平氣な顔で出て來た。「これは遅刻しまして誠に失禮。」と挨拶をしながら座敷に通つた。その様子はすこしも一大事を眼前に控へたものとは思はれなかつた。さて愈、談判になると西郷は自分のいふことを一々信用してくれ、その間に一點の疑念を挟まない。「色々むづかしい議論もありませうが、私は一身にかけて御引受します」と、かういふのだ。西郷の

社稷 培着

筆蹟
尊翰拜誦仕候陳
は唯今田町迄御
來駕被成下候
段爲御知被
下早退罷出候様
可仕候間何卒
御待居被下度
此旨御受迄如
此御座候 頓首
三月十四日
西郷吉之助
安房守様
拜復

桐野
名は利秋
西郷隆盛の幕僚
明治十年歿

此の一言で、江戸百萬の生靈もその生命と財産とを保つことが出
來徳川氏も亦その社稷を保つことを得たのだ。若しこれが他人
であつたら、いや貴様のいふ事は自家撞着
だ。とか、言行不一致だ。とか、澤山の暴徒があ
の通り處々に屯集して居るのに、恭順の實
が何處にある。とか、色々喧しく責立てるに
違ない。さうなると談判は忽ち破裂だ。
併し西郷は流石にそんな野暮はいはない。
よく大局を達觀する明と大事に處する斷
とをもつてゐた。

西郷 隆盛 筆蹟

安房守様 拜復

といふ豪傑連は、大勢次の間へ來て竊かに様子を覗つて居る。薩
摩屋敷の近傍には官軍の兵隊がひし／＼と詰めかけて居る。實

筆蹟

昨日御囑之拙詠
認候得共平仄殊
に不出來候得共
認候間爲持さし
出候よろしく希
候以上
○筆つゝでに一
枚認候間貴見迄
入御一笑候
五月八日 再拜
安 芳



に殺氣陰々として、物凄い程であつた。然るに西郷は泰然として、あたりの光景は少しも眼に入らぬものゝ如く、談判を終へてから、自分が門の外まで見送つた。自分が門を出ると、近傍の街々に屯集して居た兵隊はどつと一時に押寄せて來たが、自分安が西郷に送られて立つて居るのを見て、芳一同恭しく捧銃の敬禮を行つた。

この時、自分が殊に感心したのは、西郷が自分に對して幕府の重臣たるだけの敬禮を失はず、談判の時にも始終座を正して、手を膝の上に載せ、少しも敗軍の將を遇するといふやうな風が見えなかつたことだ。その度量の大きいことは、いはゆる天空海濶で、見識ぶるなどいふことは、固より

少しもなかつた。知識の點に於ては或事柄は自分の方が上で、外國の事情などは却て自分が話して聞かせた位だつたが、その氣膽の大きいことに至つては眞に絶倫と謂ふべく、議論も何もあつたものではなかつた。

—氷川清話—

一六 大根賣の話

柴田 鳩翁

柴田鳩翁
京都の人
天保十年歿
(年五十七)

江戸の神田邊に至つて貧乏な大根賣がありました。或日例の通り一荷の大根を擔ひ、朝早うから賣歩いたが、どうしたことやらその日は一把の大根も賣れぬ。日ざしを見れば、はや晝すぎ、腹の時計は八つさがり、財布の中にはまだ一文の錢もたまらず、これはつまらぬ、この大根が暮方まで七百文の錢に化けぬと忽ちあすは釜の中に蜘蛛の巢がはる。どうしたらよからうと工夫しながらいつのまにやら兩國橋を渡り本所の屋敷町を「大根、大根」と賣り

歩いた。

或御屋敷の表長屋の窓の内からこれ大根屋と呼ぶ「やれ嬉しや、まづ知行にありついた」と呼ぶ所を見れば、表御門から右へ三つ目の窓の内から呼んだのぢや。そこで大根屋が、表御門から荷を擔ひこんで、御長屋へ廻つて見ると、門から三軒目の高塀の内門口には何某と標札が打つてある。

荷を持ちこんで見れば、縁先の障子をあげ、旦那殿が今、月代を剃られたと見えて、鏡立にむかつて自分の髪を結びながら、「その大根はいくらぢや」といふ。「百に三把でございます」といへば、「それは高い。二十四文づゝにして置け」といはれる。賣りたさは賣りたけれども、現在損のたつことなれば、「どうぞ三把にお買ひなされて下さい。けさから江戸中を泣歩いて、まだ一把も賣れません。どうでも賣つて歸らねばならぬ大根、懸値は一切申しません」といふ。

かの御侍かぶりをふり、それでも高い。まからずば、まづよしにせう」と言ひ捨て、縁先の障子をはたと締められた。

大根屋もいろ／＼というて見ても、かの御侍が相手にならぬ。そこで仕様ももやうもなく、「はてつもらぬ。もう日の入には間もなし。何でも四五百の錢を持つて歸らぬと親子五人があすの命が繫がれぬ。何としたものであらう」と、手を組んで思案をしながら、縁先の銅盥にふつと目がついた。こゝが大事の關所ぢや。心の關所が油断なく番をしてゐたら、銅盥に目はつかぬ筈ぢや。子の口はく、君子固より窮す。小人窮すればこゝに濫す」と。小人は困窮の時



江戸時代の賣物風俗

にのぞんで無理に困窮せまじともがくゆゑ終に悪心が起つて、ふと銅盃に目がつくやうになる。こゝを指して、小人窮すればこゝに濫す」と孔子は仰せられたのぢや。

そこでかの大根賣は、縁先の障子はしめてある、あたりに見る人はなし。かの銅盃を水の入つた儘で、大根二三把の下へそつと隠す。怖いものぢや、今まで廣かつた世界が、立ちどころに狭うなつて、五尺の身體を暫くも置くことがならぬ。

そこで荷を擔ぎ出して、門口を出ようとすると、障子の内から「これ大根屋」と呼びかけられる。ぬからぬ顔で「まかりません」といふと、「いや、直はねぎるまい。その大根買はう」といひさま、障子をさらりとあけられた。大根屋もびつくりしたが、どうぞして逃げて去なうと思ひ、何把程いります。はした賣はできません」といふ、「いや、はしたでは買はぬ。その大根皆買はう。この縁先へ

並べてくれ」といはれる。さあ大根屋も一生懸命、障子の締つてあるうちなら、銅盃の出しやうもあらうに、今更銅盃が出されもせず、というて、賣るまいともいはれず。逃げて行かうにも、荷を捨てて歸つてはならず。千百萬の後悔も、今になつては間に合はず、うろろとしてゐると、かの御侍が、大根屋の顔をきつと見て、「われはきつうろろたへてゐるぞよ。まづ銅盃から出して、大根の數を數へて見よ」といはれる。大根屋は總身に冷汗を流して、もう斬られるかぶたれるかと、わなわな震へながら、かの銅盃を耻づかしさうにそつと出して、土に手をつき、旦那様、眞平御免なされて下されませ。何を隠しませう。先刻も申します通り、けさからまだ一文の商もいたしません。このまゝ歸りますと、あす親子五人が食べますことがありません。悲しい貧のぬすみ根性、面目次第もござりません。七つを頭に子供が三人、どうぞ親子五人が命をお助け

なされて下さりませ」と色青ざめて、土にあたまをすりつけて詫言をする。かの御侍、思の外氣立のよい人で、更に立腹の氣色も見えず、「いや／＼」その詫言には及ばぬ。まづ大根の數を讀んで見よといはれる。こは／＼ながら、大根を縁へ積上げたところが二十三把。かの御侍、やがて七百六十四文の錢を取出し、「さあ、その方がいふ通り、二十三把、七百六十四文、序に銅盥を添へて遣す。貧のぬすみとはいひながら、われが根性はよほど汚れてあると見える。この銅盥は顔や手足を洗ふ道具なれど、たゞ顔、手足を洗ふばかりではあるまい。心の洗ひやうもありさうなものぢや。持つて歸つて、とつくりと思案をし、心の垢を洗ひ落せ」と言捨て、障子を締めて内へはいる。

さてこの大根賣もこれから本心になつて、夜晝働き、遂に三年目には相應な八百屋になつたといふことであります。

—鳩翁道話—

一七 田家の朝

相馬 御風

寛をおちる水の音を聴きながらいつとなしに夢のない深い眠に沈んでゆく。——さうした田家の夜の静けさも懐しいが、それ以上には私は朝の寢覺めに寛の水の音を聴くすが／＼しさを好む。寛の水の音は田家の夜と朝とを詩味あらしめる爲には、なくてはならぬ要素のやうにさへ私は思つてゐる。それは僅かに細い一本の竹筒の口を洩れる水の音でしかないが、しかも何といふ大きな魅力をそのうちに藏してゐることであらう。それが一家の者の生命をつないで行く上になくしてはならぬ貴いものであることは云ふまでもないが、それを外にして私達には山の水を取り入れる爲の寛を持つた田家の詩味が、たまらなく懐しくも又うらやましくも思はずにゐられぬのである。

朝の寢覺に我知らず耳傾ける筧の水の音のすがくしさ。それが筧をおちるのでなくて直に山腹の岩間からこそくと流れ出る泉であれば、その音のすがくしさに神祕な味はひさへも加はつて、私達の心に一層たふとい静けさを與へてくれる。

水の音を聴きながら眠り、水の音を聴きながら目覺めた刹那の心の静けさは、田家に住む人々に惠まれた大自然の最も大きな恩惠の一つである。

外のもゆく馬の足音鈴のおと夜はほのぼのと明けてゆくらし

こんな歌を私は嘗て或山奥の村家に泊めて貰つた時詠んだことがあつた。

その時もやはり私の寢てゐる枕の近く筧をおちる水の音がし

てゐた。

安らかな眠りから覺めたばかりの私の耳に、その水の音はおのづと爽かな響を傳へた。私は何と言つて見ようもないすがすがしさと静けさと安らかさとに心身を抱かれながら、その水の音に聴き惚れてゐた。

部屋の中はまだ暗かつた。しかし私はそれが眞夜中であるか朝であるかといふことすらも考へなかつた。私はたゞうつりと安らかな寢覺の快さに浸つてゐた。

その時ふと私はどこからともなく響いて來る鈴の音を聞いた。



田家

そしてそれが馬の頸に下げられた昔ながらのあの鈴の音であることを私はすぐにたしかめることができた。

チャラン チャラン、チャラン……

鈴の音はだん／＼近づいて来た。それにつれてバツタン、バツタンといふ藁の杵をはいた馬の足音も、刻々に近く聞かれるのであった。

その馬の鈴の音と足音とが初めて私に朝を感じさせた。

「あ、もう草刈に行く人がある。夜が明けたんだな。」

さう思ふと同時に、私は起き上つて雨戸を明けにかゝつた。

あの時のすが／＼しかつた氣持を、今でも私は忘れることが出来ない。

山家に泊つて、朝、谷川へ顔を洗ひに行く氣持も、私にはたまらな

く懐しい。

清流に口をすゝぎ、顔を洗ひ、頭を冷やすことの快さはいふまでもないが、私はそれ以上に清流に口をつけて直に流を飲むことの快さを愛する。

草の上に、又は岩の上に寝そべり、顔を清流の上に差し出して流に口づける。水は容易に口の中には入らないものであるが、しかしさうして飲む水の味と、手や何かで掬つて飲む水の味とはまるで違つてゐるやうな氣がする。

「流を飲む。」

さうした氣持だけでも既にうれしいのである。

手ですくひ上げた水に、曉の空の光の映つた感じもいゝ。

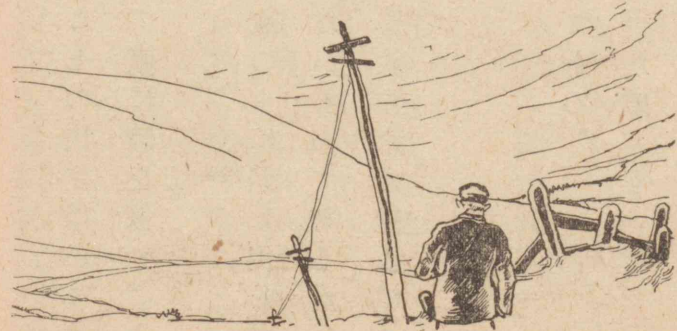
— 郷土に語る —

川路柳虹
名は誠
東京市の人
詩人

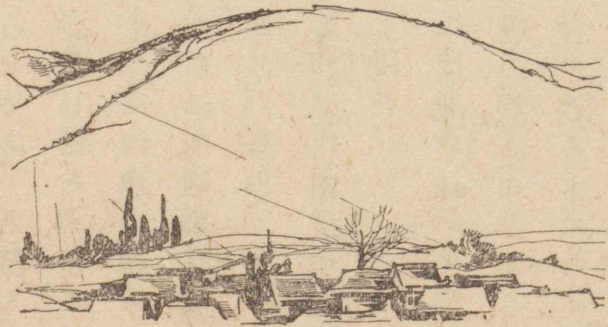
一八朝

朝は晴れたり。友よ立て。
空ははるかに色澄みて
高きおもひにくもりなき
聖者のひとみしのぼしむ。
朝は晴れたり。口すゝぎ。
この曉の生まれゆく
空のさなかに神ありと
静かにおもへ、汝が胸に。

川路柳虹



日に照らされて、煙るもの
遠き山なみ、町の屋根
今労働のほめうたの
さけびとも聞く汽笛の音。
朝は晴れたり。いざ立たん。
われら頼むはみづからの
いとなみつくる力のみ。
いざわが路を踏みゆかん。



—修養文藝名作選—



藤岡東圃

名は作太郎
金澤市の人

國文學者
文學博士

明治四十三年歿
(年四十二)

一九 自然の愛

藤岡 東圃

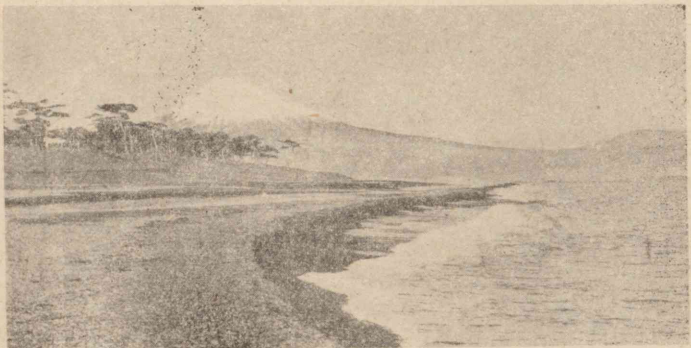
國民の特性は、初よりその人種に固有なるものありと雖も、またその住處の地勢・氣候に由つて、馴致せられ、變化したるものも少からず。そのもと同じき印度・歐羅巴種族が、東洋に西洋に相分れて、寛猛・柔剛匹を異にする種々の國民と成りたるは、南國の日北地の風、山海さまさまの風物が、これを養ひたるなり。日本國民が全體としてよく結合せるも、また蒼々たる煙波の外、四圍接する國なき、その地位に影響せられしこと少からざるべし。

日本は東洋の樂園と稱せらる。國の大半は北半球の溫帶中に位すれば、氣候中和にして、山水明媚、瘴烟毒霧の襲ふことなく、猛獸・毒蛇も棲むこと稀に、曠茫たる平原、眼界の盡きざるものなく、浩蕩たる長流、數百里の山野を浸すを見ず、雄大・瑰偉なる大陸的風致に

乏しと雖も、到る處優麗・嫺雅なる勝景あり。東海の岸を縫うて進

めば、富士を前にし、後にして、長汀曲浦浪靜かに砂滑かなり。瀬戸内海に船を行れば、松の島を迎へ、巖の嶼を送りて、朝日夕日に移らふ景趣は、應接に暇あらず。

陽春櫻あり、晚秋菊あり、初夏の梢に懸れる藤波は、紫の綾を池水の鯉に織り出し、冬の森鶉の聲暗き蔭に、紅の椿は拾ふ兒なきに切りに落つ。美なるかな山河、これに接するものは怒れる心も和ぎ、結べる思も解けぬべし。山川は優美なり、穩和なり、これに馴れ、これを愛する國民の、また優美にして穩和なる特性を有するに至れるは、即ち自然の感化が致す所



長汀曲浦

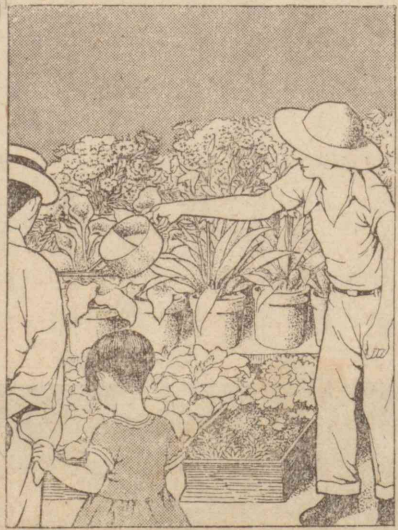
なるべし。

慈愛なる母の懷に養はれたる子は、生涯その恩愛を忘れず。日本の風土は國民の慈母なり。地味豊饒にして、河海に魚貝の利多く、生活をして自由ならしむるが上に、優美穩和なる山川は常に臉上に愛を湛ふるが如し。接するものは之に親しみ、親しむものはこれを慕ふ。愛に迎へらるゝ者は、愛を酬いざるを得ず。天然の大公園に棲むわが國民が、その一木一草をなつかしむは、自然の情なるべし。

都會の緣日に張りたる夜店には、食品も玩具も數ふるに足らず、露を帯びたる植木の葉の翠、花の紅こそ、カンテラの光に映えて瑞しく鮮かなれ。そを中流以下の市民は、あれこれと擇び求めて、座敷に飾り、庭に植う。裏長屋の道具の据ゑ處もなき窓前にも、稗蒔を作りて田舎の面影を偲び、破れ鉢に唐の芋を育てて、やさしき

野趣を楽しむ。長火鉢のわきの福壽草は、鏡餅に對して暖かげに、軒端に吊りたる忍草は、風鈴の音と共に涼し。上下貴賤を通じて自然を愛することかくの如きは、他の國民にその匹ありや。

わが國民は自然を愛賞するの餘り、またよくこれを尊重せり。尊重するものには悦んで服従す。かれらは漫に人工の手を加へずして、自然の儘に自然を仰ぐ。この服従を以て屈伏といふ勿れ、悦服は自動的なり。屈伏するものは、不正なる奴婢が氣儘なる主人に對するが如く、悦服するものは、從順なる兒孫が寛仁なる家長を見るが如し。任意的なるものは、毫も抑壓の念をその間に感ぜず、他の意を以て



夜店

喜んで己の意とす。花を愛する趣味のわれらと西洋人との間に如何に異なるかを見よ。薔薇は枝ながら幹ながらの姿の美はしきにあらず、花一輪の色の艶に香の芳しきなり。櫻は一枝の趣を賞すべきよりも、峰に渡り、川に沿ひて、雲とたなびきたる態の目ざましきなり。花瓶に挿す時、西洋人は花ばかりをちぎりて手翹の如くし、日本人は葉も枝もそのまゝに願はくはこれに置く朝露をも落さざらんとす。一は枝を撓めて花輪を作り、花瓣を卓上にふり撒きて歡興を助くるに、一は床上の盆石盆栽に、自然の大景を方寸に寫す。彼は色彩の變化を喜ぶに、此は形態の多趣なるを賞すること、恰も油繪と水墨畫との異なるが如し。同じ菊を見るにも、彼は色を重んじ、此は形を主とすといふ。西洋草花のチウリップ、ピア



石 盆

シンスなどその葉に何の趣もなくして、その花の妖艶なるは、寧ろわれらの眼に毒々しと感ぜらる。秋の野の女郎花、尾花、その花に何の美はしきことかある。されどあるかなきかの黄花を捧げてなほたよ／＼と下蔭の蟲の音にもゆらぐ様ますほの色はやがて白くほ／＼けて霧に濡れ、風に靡く趣は、われらが胸に浸みて忘れられず。日本人が花を愛するは、その外形にあらず、賦色にあらずして、その風情にあり、直ちに自然の懐にわけ入つて、その眞意義を握るにあり。かくしてこそ自然を愛し、自然を尊ぶなれ。自然に親しむことの深きは、これ日本國民の特性なり。

—國文學史講話—

二〇 空ゆく雁

頭は人皇第八十一代安徳天皇の養和元年、新玉の年立返り、一萬は九つ箱王は七つにぞなりにける。ある夕暮箱王は母の膝の上

枕を置きて 會 我 物 語

母

名は滿江夫河津
祐泰の死後二子
を連れて曾我祐
信に再嫁した

曾我殿
曾我祐信

工藤一藹
工藤祐經

この里
神奈川県足柄下
郡下曾我村

にたはぶれながら、いかに母御前、父はいづくにおはしますぞや。
その佛はいづくにましますぞや。往きて拜みたてまつらばや。
母御前、いささせ給へといひければ、遙に忘れたる來しかたも、今更
思ひいだされて、消え入るばかりに思はれて、母泣く。のたまひ
けるは、あの曾我殿こそおのれらが父にてあれと、心強くかたらひ
けれども、涙に咽びて陳じやる方ぞなかりける。

箱王重ねて申しけるは、父御前は、まことやらん、狩場より歸り給
ふ道にて、工藤一藹とやらんに射られ、死に給ひぬと、兄御前は語ら
せ給ふぞや。當時鎌倉殿のきりものにて、鎌倉より伊豆へ下る時
もあり、伊豆より鎌倉へ上る時もありとや。我等をも殺さんとや
思ふらん。我等がこの里に在りと知らずや、過ぐらんなど、おとな
しく語りければ、母より始めて、女房達まで皆袖をぞ絞りける。
かくて夏も過ぎ、秋も闌け、九月十三夜の月隈もなかりけるに、兄

弟二人庭に出て遊び、るに、五つ連れたる雁が、ねの南をさし
て飛びけるを見て、一萬申しけるは、あれ見給へ、箱王殿空を飛ぶつ
ばさも、皆別のつばさぞまじへざりける。五つ連れたる鳥の中、一
つは父、一つは母、三つは子供にてぞあるらん。物いはぬ鳥類すら
かくの如し。われらは人倫に生れながら、和殿は弟、我は兄、母はま
ことの母なれども、曾我殿は實の父にてましますまことこそ悲し
けれ。われらが父をば河津殿と申してありきとかや。父だにも
世におはしまさば、馬鞍をも賜はり、弓矢をも持ちて、今ぞ思ふやう
に物を射ありきなん。われらより幼きものにて、馬鞍、弓矢をも
て物を射ありくことの羨しさよ。これらのことども思ひ續くれ
ば、いつより今宵は父御前の戀しくおはしますぞやとて、袖に顔を
差入れてさめくと泣きければ、弟もこざかしく顔をあはせて泣
きゐたり。一萬の乳母の女房、これを聞きて、あなあさまし、人もこ

河津殿
河津三郎祐泰

そ聞け。いかに和上藤達夜も更けぬるに、左様にておはするぞ。とくく入らせ給へ」と怖しげにいひければ、二人の者は門外へ逃げ出でて、思ふやうに飽くまで泣きて後に入りけり。

ある時兄弟は竹の小弓に薄矧の小矢を取添へて、遠侍に出でてあそびけるが、明障子のありけるに二人たち向ひ、あなたこなたへ射とほして、一萬箱玉に申しけるは、われらもいつか成長し、和殿は十三、われは十五だにもなるならば、いかならん野山にてもあれ、親の敵祐經をかくの如くさし合ひて射取りて、とにもかくにもなりなん。和殿も弓よく射習ひ給へ、われも射習はん。弓矢は男の一の能にあるなるぞ」といひければ、弟も打ちうなづきて領掌しけり。年ばへには怖しきことかなと人々思ひけり。

一萬が乳母、この由を聞き知りて、大きに驚きて母にかくと申しければ、母も大きに仰天し、二人の子供を呼びよせ、泣くく語られ

伊東入道
伊東祐親
千鶴御前
母は祐親の女
松河が淵
静岡縣伊東町に
ある

石橋山
神奈川縣足柄下
郡にある
土肥の杉山
石橋山の南にあ
る

梶原景時
頼朝の寵臣

けるは、まことか、おのれらがさも怖しき謀叛を起さんと議しあふなるは、もし人の耳に入りなばよかるべきか。おのれらが祖父伊東入道殿は、當鎌倉殿の若君千鶴御前を松河が淵に沈め奉りし故に、御敵となつて、先年伊東の館に於て失はれ給ひぬ。おのれらかゝる謀叛人の孫なれば、敵左衛門尉上の御敵に申しなして失はるべし。その時、千たび百たび悲しむともかなふべきか。その上、汝等が鎌倉殿へ召されし時も、曾我殿なげき申して止まりたり。その故は、鎌倉殿、石橋山の合戦に打負けて、土肥の杉山へ入らせ給ひし時、梶原景時と曾我殿と二人心を合せて助け奉りし故に、駿河國八郡の大名になされしその御恩を皆返し參らせて、二人の幼き者共を助けて給はらんと申されければ、鎌倉殿憐ませ給ひて、それ程の志ならば、二人の子供祐信に預くるぞ」と仰せられける故にこそ、汝等も安穩にて今迄稀有の命を保ちたるぞ。それにつきて、

曾我殿の芳恩をば生々世々にも報じ盡すべきか。鳥類畜類にて
も恩を知るところそ聞け、況や汝等人倫に於てをや。然るを却つて
曾我殿に歎きを與へんこと返すくも口惜しかるべし。その恩
を報ぜんと思はば、速に謀叛を止むべしと、口説きたてて誠められ
ければ、二人の子供目と目とを見合せ、顔打赤らめて立ちにけり。
それより後は、人の聞かぬところにては内々談議しけれども、人
目にあらはれては語り合ふこともなし。母も内々怖しき者共の
心ざまかなと思はれければ、弟の箱王をば出家にせんとぞ思はれ
ける。

二一 大和の秋

佐佐木信綱

空の色も秋になつた。百舌の鳴く聲を聞くにつけてもなつか
しまれるのは大和の秋である。すぐにも行つて見たい氣がする。

佐佐木信綱
三重縣の人
竹柏園と號す
文學博士
國文學者
歌人

萬葉

萬葉集
日本最古の歌集
二十卷

秋山われは

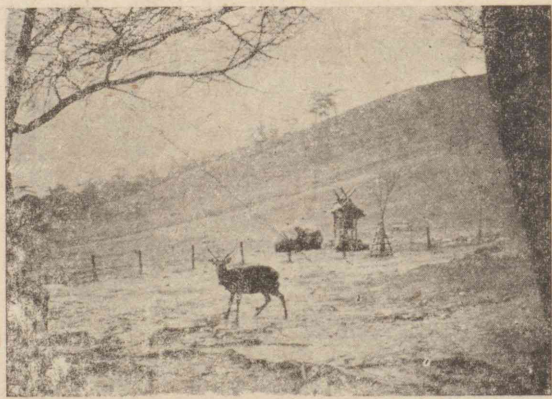
冬ごもり春ざり
來れば鳴かざり
し鳥も來鳴き
ぬ、咲かざりし
花も咲けれど、
山を茂み入りて
も取らず、草深
み手折りても見
ず、秋山の木の
葉を見ては、黄
葉をば、取りて
ぞ忍ぶ、青きを
ば、置きてぞ歎
くそし恨めし
秋山我は(卷一)

南園堂

奈良興福寺金堂
の南西にある
弘仁四年藤原冬
嗣の創建

大和は自分の爲には、心のふるさとともいふべき地である。これ
まで度々遊んだが、秋が最もよい。萬葉を見ても、全體として秋の
物をうたつた歌が春の景物をうたつ
たのよりも遙に多い。「秋山われは」と
いふ額田女王の歌は、一般の萬葉歌人
の感情を言ひ表したものと思ふ。千
數百年前の詩人の胸にも秋のあはれ
が深く響いたのである。

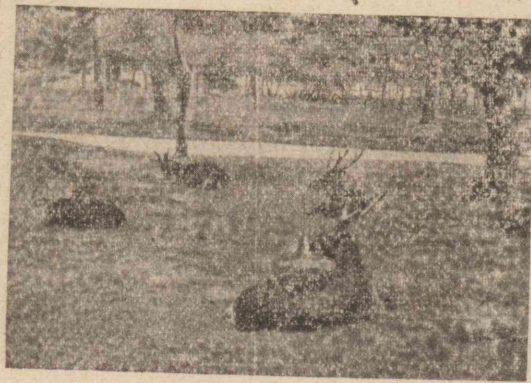
去年の秋は京都滞在中、奈良に行つ
た。南園堂の邊りから聞える夕暮の
鐘の響を聞きつゝ、奈良ホテルに着い
た。洋風の建物ではあるが、流石に室内の裝飾にも心が用ひてあ
つて、さばかり奈良の氣分を損はない。食堂で、晚餐を終へた後、月



(山笠三) 良 奈

東大寺
奈良市の東にあ
る七代寺の一、
聖武天皇の天平
勝寶元年に成る
正倉院
大佛殿の北に在
る

夜の公園をめぐつた。胸にしむ冷たい光を身に浴びつつ、ほの暗
い老木の杉の木蔭にたゞずんで居る鹿に驚かされたことも幾度
かであつた。東大寺の横を通つて知足
院の院主を訪うた。院は正倉院の眞裏
なる高い岡の上にある。幾十階の石磴
を登つて門前から振りかへつて見ると、
奈良の町の燈火は朧に浮いてゐる。夜
更けての歸るさに、雪消の澤のほとりて
鹿の鳴くのを聞いた。

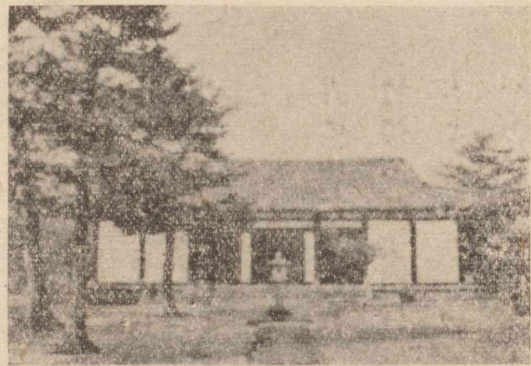


奈良公園の鹿

霧のこめた曙の心地よさ。春日山は
こゝかしこ紅に染つてゐる。今は小さ
な流となつた佐保川を渡つて、聖武天皇の佐保山の御陵に赴いた。
萬葉集中の雄大なる御製に、また典雅なる御筆の跡に、今もまさや

かに御爲人の偲ばれる奈良大帝の御上を偲んで、ぬかづいてゐる
折しも、時雨がさと降つて來た。やがて晴れて日が照り渡つた。

新薬師寺
奈良市高昌井之
上町に在る
東大寺の末寺
人麿
柿本人麿
萬葉集時代の歌
人
憶良
山上憶良
萬葉集時代の歌
人



春日山の木の間の紅葉道の邊の櫻紅葉
が雨にぬれて輝いてゐる美しさは、目覺
むるばかりであつた。新薬師寺へゆく
ついで道で、また時雨が追つて來た。萬
葉人の昔から千年の年月は早く過ぎた。
しかも、この春日山のすがたは、人麿も憶
良も眺めた趣にはかはるまい。この美
しいやさしい時雨の雨も、また彼等があ
つた昔ながらの雨であらう。萬葉集に
は時雨の歌が多い。自分は奈良に住む事が出來ぬのをなさけな
く思つた。

萬葉漫筆一



秋深し

名は虎壽
茨城縣の人
詩人
昭和九年歿

二二 秋深し

二二 秋深し

煤垂りし簀子の上に

三毛の雄の仔猫生まれて、

家舊りし古き籬を、

幾返り雨は打つらん。

井の中に栗の落ちぬと

竹持ちて弟騒げど、

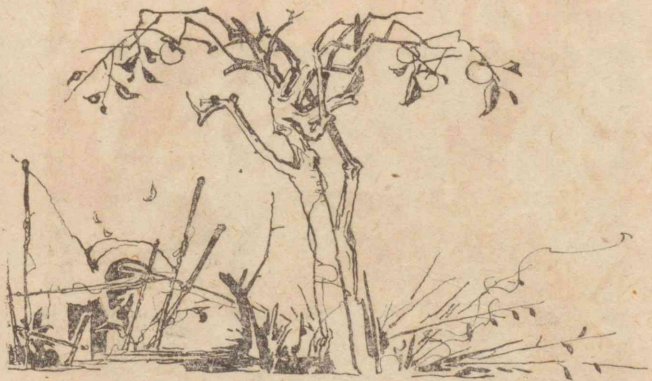
木より散るしづく佗びつゝ、

芋洗ふ姉は走らず。

秋は今半ばなりけり

1011

横瀬 夜雨



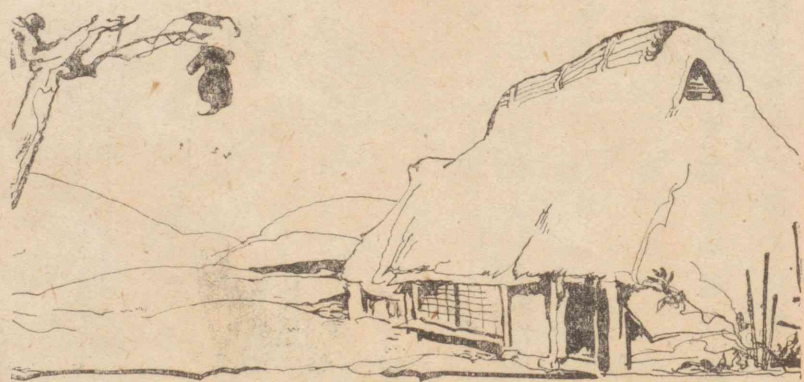
筆繪 滝藤 加

頃の秋

澁柿の紅き葉隠れ
大蜻蛉飛ぶに勞れて
牛部屋の羽目に憩へり。

日暮るれば森に百舌鳴き、
夜明くれば田に鳴飛ぶと
草の中に鶉がは張れども、
雨に濡れて鶉ものみ流る。

蕎麥の花白き畑にも、
山遠き落穂の田にも
生ける案山子、生ける人なく
一村は雨に浸れり。



秋は今半ばなりけり、
厩戸の馬も肥えたり、
藁も腐れ笠も破れよ、
堰の戸に水は満つらん、

七つ星隠せる雲に
曉の光迷へり、
石に當て、鎌を磨けば
石の上に雨は注ぎて、

二三 俚諺

羅馬の一詩人が警句を蜜蜂に、譬へて「螫あり、蜜あり、軀は小さし」と云へるは、すべての俚諺にとは謂ひ難きも、その最も巧妙なるも



—雪燈籠—

大西祝

大西祝

號は操山
哲學者
文學博士
明治三十三年歿
(年三十六)

○

のには適當の語なるべし。俚諺の上乗なるものは多くはこの三者を具ふ。言短くして意義味ふべく、寸鐵人を殺すの妙あり。

人口に膾炙し易からむことを求むる故に、俚諺はおのづから律語をなす傾あり。我が國語にては、五又は七が自らなる律呂なれば、我が國の俚諺にはこの律に従へるもの甚だ多し。

雉子も鳴かずば撃たれまい。
心の鬼が身を責める。

などいふごとく、最もよく人口に膾炙せるものにして七五の調子をなせるはいと多し。

人と屏風はすぐには立たぬ。
思ふ念力、岩をもとほす。

身を捨て、こそ浮む瀬もあれ。
などは七七の調子を成して語路頗るよし。

十て神童十五で才子、二十過ぎてはたゞの人、
といふも、七七、七五の律あり。また同じ理由により同音または同語を重ねたる類のもの多し。例へば、

多勢に無勢。

短氣は損氣。

弱り目に祟り目。

處かれば品かはる。

藥九層倍。

勝つて兜の緒をしめよ。

といふが如し。

かく律を成し、尾韻又は頭韻を用ひること詩の句法に似たる所あるのみならず、俚諺に抽象の語少く、多くは具體的に言ひなして感動の強からむことを求め、又これが爲に屢、誇張の言を喜ぶこと

も亦その詩歌に似たる點なり。この故に、諺にて物の度量を言ふには、その數又は量を定めて言ふを好む。

七たびさがして人を疑へ。

人の噂も七十五日。

預り物は半分の主。

などの類數ふるに違あらず。數の中にも最も好んで用ひるは

三の數なるべし。

三度目が定の目。

三年たてば三つになる。

懺悔話をすれば三年の罪が減じる。

三人よれば文珠の智慧。

朝起は三文の徳。

その他なほ多かるべし。又

も亦その詩歌に似たる點なり。
とつて

ゆふのりつはそも春纏はる
みくろはそも春纏はる
ゆふのりつはそも春纏はる

ゆふのりつはそも春纏はる

三度目が定の目
三年たてば三つになる
懺悔話をすれば三年の罪が減じる
三人よれば文珠の智慧
朝起は三文の徳

用心は臆病にせよ。

黒犬にくはれて灰の和滓わづにおそれる。

などは誇張に因りてその意味を成せるもの、例なるべし。

誇張を喜ぶと同じ理由を以て、俚諺は一見まことしからぬ語句

即ちパラドックスを用ひるを喜ぶ。この種の諺に深く味ふべき

もの少からず。

急がばまはれ。

言はぬは言ふに勝る。

逢ふは別れのはじめ。

兄弟は他人のはじまり。

論語讀みの論語知らず。

人を使ふは使はれる。

などその例なるべし。かく相反するが如き事柄の中に却つて相

通ずる所あるを發見するは深遠なる智慧の一特徴なり。

パラドックスのみに限らず、總べて反對のものを相並ぶるは、吾

人の注意を捉ふる一方便なり。俚諺は總じて對照を喜ぶ。

骨折損の草臥儲け。

聞いて極樂見て地獄。

訊くは一旦の恥、訊かぬは一生の恥。

長者の萬燈より貧者の一燈。

反對を並ぶるのみならず、總じて二種の事柄を相並べて、それを比

照するは俚諺の一大特色なり。これ俚諺の比論に富める所以に

して、その比喩の極めて巧妙なる、詩人の作としても恥かしからぬ

ものあり。俚諺の最も巧妙なるものは、多くこの類にあり。今思

ひ出づるに従うて、その三四の例を擧げむか。

馬には乗つて見よ、人には添つて見よ。

パラドックス
逆語

旅は道づれ世はなさけ、

といふ如きは、幾たび誦するもその趣味の津々たるを覺ゆ。

花は櫻木、人は武士。

これ、以て我が國民の理想を誇るに足るものゝ一なるべし。

佛法と藁屋の雨は出て、聞け。

風流の心に富める國民ならて、誰か能く之を言はむ。之を口ず

さみ見よ。如何に詩心道心宗教心の相結びてなせる高雅幽玄な

る妙趣の浮び來るぞ。

二四 汝の母

姉崎 正治

姉崎正治
東京市の人
文學博士
東京帝國大學名
譽教授
帝國學士院會員

イギリスの一飛行士官が、敵の飛行機を射落した時の事である。彼は敵機の地に落ちるのを見ると共に、其の乗組んで居る敵兵の事を思ひ、敵の塹壕前ながら、敵機の跡を追うて着陸した。敵機は

翼を折つて破れ、乗組士官の體は地に横はつて、呼吸は既に絶えて居た。敵ながら、今まで空中に飛翔して居た人の事を思ひ、物のあはれを覺えて、其の屍體を片付けてやらうと、胸のポケットの邊に手が觸れると、そこに堅い物がある。之を搜り出して見ると、一葉の寫眞で、それには、汝の母と書いてある。即ち今戰死したドイツ士官は、空中戦にも常にポケットに母の寫眞を藏して居たのである。イギリスの士官は之を見て一層のあはれを感じ、先づ敵の屍體を味方の塹壕に齎し、それからまた自分の機に乗じて一戦した。そして其の日の戦にも武運強く、安全に味方の戦線に歸つた。彼が敵の屍體をいたはり處理する間は、壕中の敵兵もそれと知つてか、一向發砲もしなかつたのである。

その夜イギリスの士官は、其の日射殺した敵と其の老母の事を思ひ、それにつけても自分の身の上、且は早くなくなつた自分の母

の事などを考へて、感慨に堪へず、敵士官の姓名をたどつて、彼の母に一書を送つた。

其の書面は、大略左の如くであつた。

私はイギリスの飛行士官です。

今日私は敵たるドイツの一飛行機を射落して功名をしましたが、其の敵兵が死ぬまで母君の寫眞をポケットに藏して居たのを發見し、其の母君たるあなたに此の手紙を差出します。

即ち私はあなたの御子息を殺しました。然し其の人を憎んだのでもなければ、又その母君たるあなたの悲しみを知らないでもないのは勿論の次第です。たゞ軍人としての私の義務であつたのです。敵の士官、即ちあなたの御子息が、味方の陣地を空中から偵察して無事に歸られたなら、其の結果、味

方は必ずやそれだけの攻撃を受けて、味方の兵何人かの生命は、其の爲に亡くなります。此の不幸を防ぐ爲に、私は敵機を射落しましたが、其の乗組士官の身體に敬意を表し、それを片付けようとする時に、其の人の母君たるあなたの寫眞を發見して、無量の感に打たれたのです。

私は子供の時に母を喪ひ、今でも人に母親があるのを見て、羨しく思ふのですが、私の殺した敵士官には、あなたといふといしい母君が居られ、彼の人死にぬまでその寫眞を抱いて居られたのを見ては、私はじつとして居られない感じがします。彼の人は既に此の世の人ではありません。あなたもこの報を得て、さぞ悲歎に沈んでいらつしやるでせう。彼の人を殺した私が、あなたに手紙を上げるのは、残忍だとも思はれませうが、私としては、彼の人の母君に對して、恰も自分の母に對

する様な親しい感じを、悲しみの中にも禁じ得ません。私は彼の人を殺しました。然し今私があなたの寫眞を前に置いて、あなたに手紙を書く時には、亡き彼の人があなたに向つて話をして居るのか、又は私が自分の亡き母に向つて手紙を書いて居るのか、自分には區別がつかず、とめどもなく涙がこぼれます。

私が彼の人を殺したのは戦争の爲です。あなたも、又亡くなつたあなたの御子息も、此の事を思つて、私を許して下さいなせう。そして、又彼の人の亡くなつた代りに、私が一人の母を得た様な思ひのあるのを察して下さいなせう。今私の書くこの手紙は、彼の人と私と二人の魂が——殺された彼の人と殺したわたしの真心が、——一緒になつて書くのだと思つて下さい。もうこれ以上は書けません。涙で目はくもり、手

もふるへて、筆を執ることは出来ません。

此の手紙はイギリス軍の本營から中立國の手を経て、ドイツ國內の宛名の人に届いた。一人の兒を喪つた母が之を讀んだ時の感じは、思ひやるだに涙の種である。そして此の婦人は、數日の後に長い手紙を書いて、彼のイギリス士官に送つた。

その大意は下の如くであつた。

御手紙の着く前に、倅の戦死は既に知つて居ましたが、其の戦死の相手たるあなたの、情深い御手紙を見た時の私の思は御察して下さい。通常ならば、あなたを倅の仇敵とする所ですが、御述懐に接しては、其の仇敵が却て倅の生れ代りとなつて、此の母に手紙を寄せてくれた様に思はれます。あなたが倅の懐にあつた私の寫眞に對して、亡き母御に對する心持がすると言はれる様に、あなたの御手紙は、私にとつては、戦死した

倅の手紙としか思はれません。

あなたは倅を殺したと云はれ、又事實其の通りに違ひないとは知つて居ますが、殺すも殺されるも、共に銘々の國の爲で、個人として何等の怨も仇もある譯のないのは、お互に明白な事です。其の怨もない者が互に殺しあふのも、つまりは戦争のためですが、此についてはわたしは何も申しません。唯仇といふべきあなたが私を母の如く思ひ、私にもあなたが死んだ倅の身代りの様に思はれるのは、何といふ不思議な事です。併し思へば此も不思議ではなく、我々がお互に、眞の愛情を深く汲取り得るからでせう。死んだ倅も、あなたを兄弟と思ひ、つゆ怨む心などを懷かず、此の世に生残つた母と、又不思議に兄弟となつたあなたと、又他の兄弟との爲に禱つて居るに違ひありません。

わたしには三人の男子があり、戦死したのは其の末子ですが、兄二人もやはり戦線に出て居て、何時、弟と同じ運命になるとも計られません。併しわたしは、末子の戦死した爲に、あなたといふ新な子を得たことを悦びます。戦争が済み、平和の時が來、そして兄二人も無事に歸る事があつたら、あなたにも此の家へ一度來て戴きたいと思ひます。二人の兄も、あなたを弟と思つて迎へるでせう。其の時にはあなたは、死んだ倅とあなたと二人分の子として、弟として、わたしの家庭にいつまでも滞在していたゞきたい。其の日の早く來る事を祈ります。

この手紙の最後には彼の寫眞に書いてある通り、汝の母と書いてあつた。

—光あれ—

主上
後醍醐天皇

藤房・季房
共に宣房の子

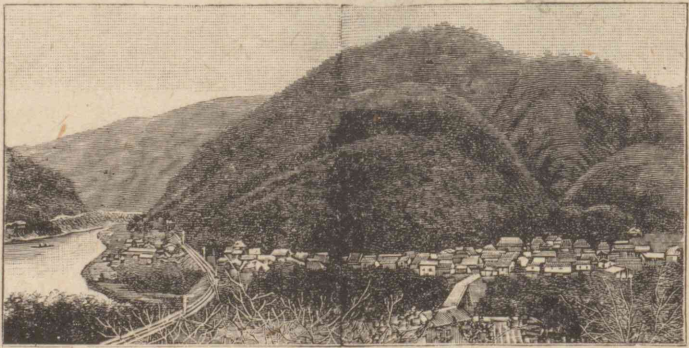
赤坂の城
河内國南河内郡
赤坂村
楠木正成の築いたもの

二五 松の下露

(太、平、記)

さるほどに類火東西より吹かれて、餘煙皇居にかゝりければ、主上を始めまゐらせて、宮々卿相雲客徒跣なる體にて、何所を指すともなく、足にまかせて落ち行き給ふ。この人々、初め一二町がほどこそ、主上を扶けまゐらせて、前後に御供をも申されたりけれ、雨風烈しく道暗うして、敵の鬨の聲こゝかしこに聞えければ、次第に別になつて、後にはただ藤房季房二人より外は、主上の御手を引きまゐらする人もなし、忝くも十善の天子玉體を田夫野人の形に變へさせ給ひて、そのことも知らず迷ひ出でさせ給ひける御有様こそあさましけれ。いかにもして夜の中に赤坂の城へと御心ばかりをつくされけれども、假にも未だ習はせ給はぬ御歩行なれば、夢路をたどる御心地して一足には休み、二足には立ちどまり、晝は道

のそばなる青塚の蔭に御身を隠させ給ひて、寒草のおろそかなるを御座の褥とし、夜は人も通はぬ野原の露分け迷はせ給ひて、羅縠の御袖をほしあへず。とかくして、夜晝三日に山城の多賀郷なる有王山の麓まで、落ちさせ給ひてけり。藤房季房も、三日まで口中の食を斷ちければ、足たゆみ、身疲れて、今はいかなる目に逢ふとも、逃れぬべき心地せざりければ、せん方なくて、幽谷の岩を枕にて、君臣兄弟諸共に、現の夢に臥し給ふ。梢を拂ふ松の風を雨の降るかと思し召して、木蔭に立寄せ給ひたれば、下露のはらはらと御袖にかかりけるを、主上御覽ぜられて、



山 置 笠

さして行く笠置の山を出でしより

あめが下には隠れがもなし

藤房卿御涙をおさへて

いかにせん頼むかけとて立寄れば

なほ袖ぬらす松のしたつゆ



藤原藤房 (小堀範普筆)

山城の國の住

人深須入道松井

藏人二人はこの

邊の案内者なり

ければ山々峰々

残る所なく搜し

ける間皇居隠れなく尋ね出されさせ給ふ。主上誠に恐ろしげなる御氣色にて、汝等心あるものならば天恩を戴いて私の榮華を期

せよ。と仰せられければ、さしもの深須入道俄かに心變じて、あはれ

この君を隠し奉つて義兵を擧げばや。と思ひけれども、後に續ける

松井が所存知り難かりける間、事の漏れ易くして、道の成り難から

んことをはばかつて、もだしけるこそうたてけれ。俄かの事にて

網代の輿だになかりければ、張輿の怪しげなるに扶け乘せまら

せて、まづ南都の内山へ入れ奉る。その體ただ股湯、夏臺に囚はれ

越王、會稽に降ぜし昔の夢に異ならず。これを聞き、これを見る人

毎に、袖を濡さずといふことなかりけり。

この時、こゝかしこにて生捕られ給ひける人々都合六十一人、そ

の所従、眷屬どもに至るまでは數ふるに違あらず。或は籠輿に召

させられ、或は傳馬に乗せられて、白晝に京都に入り給ひければ、そ

の方ざまかと覺えたる男女、ちまたに立並んで、人目をも憚らず泣

き悲しむ。あさましかりし有様なり。

南都

奈良

股湯

股の湯王

越王

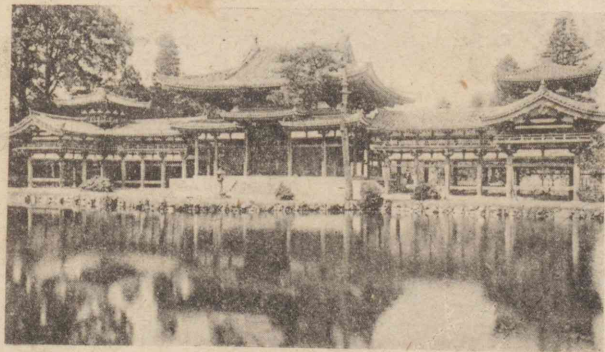
勾踐を指す

會稽

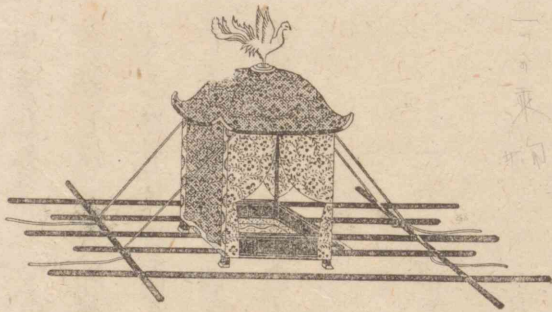
中華民國浙江省紹興府城の東南にある會稽山

兩大將
大佛貞直
金澤貞將

十月二日、六波羅の北方常葉駿河守範貞、三千餘騎にて路を警護
 仕つて、主上を宇治の平等院へ成し奉る。その日、關東の兩大將京
 へは入らずして、すぐに宇治へ参り向つて
 龍顔に謁し奉り、まづ三種の神器を渡し給
 ひて、持明院へ参らすべき由を奏聞す。主
 上、藤房を以て仰せ出されけるは、三種の神
 器は古より繼體の君位を天に受けさせ給
 ふ時、自らこれを授け奉るものなり。四海
 に威を振ふ逆臣あつて、暫く天下を握るも
 のありと雖も、未だこの三種の神器を自ら
 擅にして、新帝に渡し奉る例を聞かず。そ
 の上、内侍所をば笠置の本堂に棄ておき奉
 りしかば、定めて戦場の灰塵にこそ落ちさせ給ひぬらめ。神璽は



(堂風鳳) 院 等 平



山路に迷ひし時、木の枝に懸け置きしかば、遂にはよも我が國の守
 とならせ給はぬことあらじ。寶劔は武家のともがら若し天罰を
 顧みずして玉體に近づき奉ることあらば、自
 らその刃の上に伏させ給はん爲に、暫くも御
 身を放たるゝことあるまじきなり。と仰せら
 れければ、東使兩人も六波羅も言葉なくして
 退出す。

翌日に龍駕を廻らして六波羅へ成しまる
 らせんとしけるを、さきさき臨幸の儀式なら
 ばは還幸なるまじき由を強ひて仰せ出され
 ける間、力なく鳳輦を用意し、袞衣を調進しけ
 る間、三日まで平等院に御逗留あつて、ぞ六波羅へは入らせ給ひけ
 る。日來の行幸にことかはりて、鳳輦は數萬の武士にうち圍まれ

654 32 /
H 2 4 次

河原
賀茂の河原

月卿雲客は怪しげなる籠輿傳馬に扶け乗せられて、七條を東へ河原を上りて、六波羅へと急がせ給へば、見る人涙を流し、聞く人心を傷ましむ。

悲しいかな、昨日は紫宸北極の高きに坐して、百司禮儀の装をつくろひしに、今は白屋東夷の卑しきに下らせ給ひて、萬卒守禦の厳しきに御心を惱ませらる。時移り事去り、樂しみ盡きて悲しみ來る。天上の五衰、人間の一炊、ただ夢かとのみぞ覺えたる。

二六 夜叉王

岡本綺堂

元久元年七月十八日。

伊豆の國狩野の莊、修善寺村、桂川の畔、夜叉王住家。

藁葺の古びたる二重家體。破れたる壁に舞樂の面など懸け、正面に

岡本綺堂
名は敬二
東京市の人
戲曲家
修善寺村
靜岡縣田方郡修
善寺村

紺暖簾の出入口あり。下手に爐を切りて、素焼の土瓶など掛けたり。庭の入口は竹にて編みたる門、外には柳の大樹、その後は島を隔て、塔の峯つゞきの山又は丘など見ゆ。

二重の上手に續ける一間の家體は細工場にて、三方に古りたる暖簾を下せり。庭前には秋草の花咲きたり。

楓門に立ちて人を見送る體。そこに修禪寺の僧一人、燈籠を持ちて先に立ち、續いて源頼家卿廿三歳、後より下田五郎景安十七八歳、頼家の太刀を捧げて出づ。

僧 これ、將軍家の御微行ぢや、疎相があつてはなりませんぞ。楓はつと平伏す。頼家主從進み入。夜叉王出で迎へて、

夜叉 思ひも寄らぬ、成とて、何の設けもござりませぬが、先づあれへお通り下さりませ。

頼家は縁に腰を掛く。

夜叉 して、御用の趣は。

頼家 問はずとも大方は察して居らう。我が面體を後の形見に遣さんと、曩に其の方を召出し、頼家に似せたる面を作れと、繪姿までも遣はして置いたるに、日を経れども出来せず。幾度か延引を申立て、今まで打過ぎしは何たる事ぢや。

五郎 たかゝ面一箇の細工、如何に丹精を凝らすとも百日とは費すまい。お細工仰付けられしは當春の初、その後已に半年をも過ぎたるに、未だ献上いたさぬとは餘りの懈怠、最早猶豫は相成らぬと、上様の御機嫌散々ぢやぞ。

頼家 予は生まれ附いての性急ぢや。何時まで待てど暮らせど埒明かず。餘りに齒痒う、覺ゆるまゝ、この上は使など遣はすこと無用と、予が直々に催促に參つた。おのれ何故に細工を怠り居るか。仔細をいへ、仔細を申せ。

夜叉 御立腹恐入りました。ござりまする。勿體なくも征夷大將軍

源氏の棟梁のお姿を刻めとあるは、職の名譽、身の面目、いかてか等閑に存じませうや。御用承りて已に半年、未熟ながらも腕限り根限りに、夜晝となく打ちましても、意に適ふ程のもの一箇もなく、更に打替へ作り替へて、心ならずも延引に延引を重ねましたる次第、何とぞお察し下さりませ。

頼家 え、催促の都度と同じ事を……その申譯は聞き飽いたぞ。

五郎 この上は唯延引とのみでは相濟むまい。何時の頃までには必ず出来するか、豫め期日を定めてお詫を申せ。

夜叉 その期日は申上げられませぬ。左に鑿を持ち、右に槌を持ってば、面は容易く成るものと思召すか。家を作り塔を組む番匠なんどとは事變りて、これは生なき粗木を削り、男女・天人・夜叉・羅刹ありとあらゆる善惡邪正の魂魄を打込む面作師。五體に漲る精力が兩の腕に自ら湊る時、我が魂魄は流るゝ如く彼に通ひて、

始めて面を作られます。但しその時は半月の後か、一月の後か、或は一年、二年の後か、我ながら確とはわかりませぬ。

僧 これく、夜叉王殿。上様は御自身も仰せらるゝ如く、至つて

御性急でおはしますぞ。三鳥神社の放し鰻を見るやうに、ぬらりくらりと取止の無い事申上げたら、御瘡癖が愈、募らう程にこななも職人冥利、何日の頃までと日を限つて、確と御返事を申すがよからう。

頼家



夜叉 ぢやというて出来ぬものはのう。

僧 何の、こなたの腕で出来ぬ事があらう。面作師も多くある中で、伊豆の夜叉王といへば、京鎌倉までも聞えた者ぢやに……

夜叉 さあ、それ故に出来ぬといふのぢや。わしも伊豆の夜叉王と

三鳥神社
静岡縣三島市に
ある社

いへば、人にも少しは知られた者たとひお咎め受けようとも、己が心に染まぬ細工を世に遺すのは、如何にも無念ぢや。

頼家 何、無念ぢやと……さらば如何なる祟を受けうとも、早急には出来ぬといふか。

夜叉 恐れながら、早急には……

頼家 んゝ、おのれ覺悟せい。

瘡癖募れる頼家は、五郎の捧げたる太刀を引取つて、あはや抜かんとす。奥より桂走り出で、

桂 まあく、お待ち下さりませ。

頼家 え、退けく。

桂 先づお鎮まり下さりませ。面は唯今献上いたします。のう父様。

と願みれども、夜叉王は黙して答へず。

五郎 何面は既に出来して居るか。

頼家 え、おのれ前後不揃の事を申立て、予を欺かうでな。

桂 いえ、嘘偽りではござりませぬ。面は確かに出来して居ります。これ父様もうこの上は是非がござんすまい。

楓 ほんにさうぢや。昨夜漸く出来したといふ彼の面をいつそ献上なされては……。

僧 それがよい、それがよい。こなたも凡夫ぢや。名も惜しからうが、命も惜しからう。出来した面があるならば、早う上様に差上げて、お慈悲を願ふが上分別ぢやぞ。

夜叉 命が惜しいか、名が惜しいか。こなた衆の知つた事でない。黙つておゐやれ。

僧 さりとて、これが見てみられうか。さあ娘御、その面を持つて来て、ともかく御覽に入れたがよいぞ。早う、早う。

楓 あい。

細工場へ走り入りて、木彫の假面を入れたる箱を持出づ。桂受取りて頼家の前に捧ぐ。頼家無言にて心少しく解けたる體なり。

桂 偽ならぬ證據、これ御覽下さりませ。

頼家 假面を取りて打眺め、思はず感歎の聲を擧げる。

頼家 お、見事ぢや。好う打つたぞ。

五郎 上様おん顔に生寫しぢや。

頼家 。

と飽かず打ちまもる。

僧 さればこそいはぬ事か。これ程の物が出来してゐながら、とかう澁つて居られたは、夜叉王殿も氣の知れぬ男ぢや。はははは。

夜叉王形を改める。

夜叉 何分にも我が心に適はぬ細工。人には見せじと存じましたが、かう相成つては致方もござりませぬ。方々にはその面を何と御覽なされます。

頼家 さすがは夜叉王、天晴のものぢや。頼家も満足したぞ。

夜叉 天晴との御賞美は憚ながらおめがね違ひ。それは夜叉王が一生の不出来。よう御覽じませ。面は死んで居りまする

五郎 面が死んで居るとは……。

夜叉 年來數多打つたる面は生けるが如しと人も言ひ、我も許して居りましたが、不思議や、この度の面に限つて、幾度打直しても生きたる色無く、魂も無き死人の相……。

それは世にある人の面ではござりませぬ。死人の面でござりまする。

五郎 そちはさやうに申しても、我等の眼にはやはり生きたる人の

面……。死人の相とは相見えぬがのう。

夜叉 いや、どう見直しても生ある人ではござりませぬ。しかも眼に恨を宿し、何者かを呪ふが如き怨靈、怪異などの類……。

僧 あ、これ、そのやうな不吉な事は申さぬものぢや。御意に適へば、それで重疊、あり難く御禮を申されい。

頼家 へ、とにかくにも、この面は頼家の意に適うた。持ち歸るぞ。夜叉 たつて御所望とござりますれば……。

頼家 お、所望ぢや。それ。

願にて示せば、桂は心得て假面を箱に納め、頼家に捧ぐ。頼家立つ、五郎も立つ。桂庭にありて立つ。

僧 やれ、これで愚僧も先づ安堵いたした。夜叉王殿、明日又逢ひませうぞ。

頼家 行きかゝりて物に躓く。

頼家 お、何時の間にか暗うなつた。

僧は進み出でて桂に燈籠を渡す。桂は假面の箱を僧に渡し燈籠を持ち出て出づ。夜叉王はじつと思案の體なり。

楓 父様お見送を……。

夜叉王始めて心附きたる。如く、楓と共に門口に送り出づ。

頼家 そちへの御褒美は改めて沙汰するぞ。

頼家等相前後して出で行く。

夜叉王起ち上つて、暫時默然としてゐたりしが、やがてつかく縁に上り、細工場より槌を持來りて、壁に懸けたる種々の假面を取下し、あはや打碎かんとす。楓は驚きて取絶る。



(劇) 王 叉 夜

楓 あゝこれ、何となさる。お前は物に狂はれたか。

夜叉 せつば詰りて是非に及ばず、拙き細工を献上したは悔んでも返らぬ我が不運。あのやうな面が將軍家の御手に渡つて、これぞ伊豆の住人夜叉王が作と實物帳にも記されて、百千年の後までも笑を遺さば、一生の名折れ、末代の恥辱。所詮夜叉王の名は廢つた。職人も今日限り。再び槌は持つまいぞ。

楓 さりとは短氣でござりませう。如何なる名人、上手でも、細工の出來不出來は時の運。一生の中に一度でも天晴名作が出來ようならば、それが即ち名人ではござりませぬか。

夜叉 ん。

楓 拙い細工を世に出したが、さ程無念と思召さば、これから愈、精出して世をも人をも駭かす程の立派な面を作り出し、恥を雪いで下さりませ。

楓は縋りて泣く。夜叉王答へず、思案の眼を瞑びてゐる。(日暮れて
笛の音遠く聞ゆ)

—綺堂戯曲集—



歩りたて

東京市の人
文学者
昭和二年歿(年
三十六)

二七 蜜柑

芥川龍之介

或曇つた冬の日暮である。私は横須賀發上り二等客車の隅に
腰を下ろして、ぼんやり發車の笛を待つてゐた。とうに電燈のつ
いた客車の中には、珍らしく私の外に一人も乗客はゐなかつた。
外を覗くと、薄暗いプラットフォームにも、今日は珍らしく見送
りの人影さへ跡を絶つて、唯檻に入れられた小犬が一匹、時々悲し
うに吠え立ててゐた。これ等は、その時の私の心もちと、不思議な
位似つかはしい景色だつた。私の頭の中には、云ひやうのない疲
勞と倦怠とが、まるで雪曇りの空のやうなどんよりした影を落し

てゐた。私は外套のポケットへちつと両手をつつこんだ儘、そこ
にはいつてゐる夕刊を出して見ようといふ元氣さへ起らなかつ
た。

が、やがて發車の笛が鳴つた。私はかすかな心の寛ぎを感じな
がら、後の窓枠へ頭をもたせて、眼の前の停車場がずる／＼と後ず
さりを始め、のを待つともなく待ちかまへてゐた。所がそれよ
りも先にけたゝましい日和下駄の音が、改札口の方から聞え出し
たと思ふと、間もなく車掌の何か云ひ罵る聲と共に、私の乗つてゐ
る二等室の戸ががらりと開いて、十三四の小娘が一人、慌しく中へ
はいつて來た。と同時に、一つづしりと揺れて、徐ろに汽車は動き
出した。

小娘は油氣のない髪をひつつめの銀杏返しに結つて、横なでの
痕のある輝だらけの兩頬を氣持の悪い程赤くほてらせた、如何に

も田舎者らしい娘だった。しかも垢じみた萌黄色の毛絲の襟巻がだらりと垂れ下つた膝の上には、大きな風呂敷包があつた。その又包を抱へた霜焼けの手の中には、三等の赤切符が大事さうにしつかり握られてゐた。私はこの小娘の下品な顔だちを好まなかつた。それから彼女の服装が不潔なものやはり不快だつた。最後にその二等と三等との區別さへも辨へない愚鈍な心が腹立たしかつた。だから巻煙草に火をつけた私は、一つにはこの小娘の存在を忘れたいと云ふ心もちもあつて、今度はポケットの夕刊を漫然と膝の上へひろげて見た。

それから幾分か過ぎた後であつた。ふと何かに脅されたやうな心持がして思はずあたりを見まはすと、何時の間にか例の小娘が、向ふ側から席を私の隣へ移して、頻に窓を開けようとしてゐるが、重い硝子戸は中々思ふやうにあがらないらしい。輝だらけの

頬は愈、赤くなつて、時々鼻涙をすゝりこむ音が、小さな息の切れる聲と一しよに、せはしなく耳へはいつて来る。これは勿論私にも幾分ながら同情を惹くに足るものには相違なかつた。しかし汽車が今將に隧道の口へさしかゝらうとしてゐる事は暮色の中に枯草ばかり明るい兩側の山腹が、間近く窓側に迫つて來たのも、すぐに合點の行く事であつた。にも係らず、この小娘は、わざ／＼じめてある窓の戸を下ろさうとする。その理由が私には呑みこめなかつた。いやそれが私には、單にこの小娘の氣まぐれだとしか考へられなかつた。だから私は腹の底に依然として險しい感情を蓄へながら、あの霜焼けの手が硝子戸を下ろさうとして悪戦苦闘する様子を、まるでそれが永久に成功しない事でも祈るやうな冷酷な眼で眺めてゐた。すると間もなく凄じい音をはためかせて、汽車が隧道へなだれこむと同時に、小娘の明けようとした硝

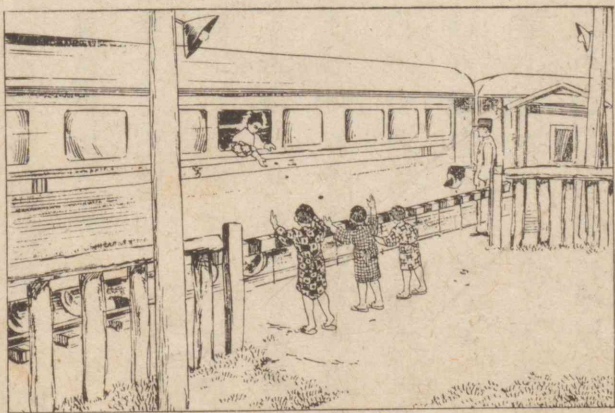
子戸は、とう／＼ぱたりと下へ落ちた。さうしてその四角な穴の中から、煤を溶かしたやうなどす黒い空氣が、俄に息苦しい煙になつて濛々と車内へ漲り出した。元來咽喉を害してゐた私は、手巾を顔に當てる暇さへなく、この煙を満面に浴びせられたおかげで、殆ど息もつけない程咳きこまなければならなかつた。が、小娘は私に頓着する氣色も見えず、窓から外へ首をのばして、闇を吹く風に銀杏返しの鬢の毛を戦がせながら、ちつと汽車の進む方向を見やつてゐる。その姿を煤煙と電燈の光との中に眺めた時、もう窓の外が見る／＼明るくなつて、そこから土の匂や枯草の匂や水の匂が冷かに流れこんで來なかつたなら、漸く咳きやんだ私は、この見知らない小娘を頭ごなしに叱りつけてでも、又元の通り窓の戸をしめさせたのに相違なかつたのである。

しかし、汽車はその時分には、もうやす／＼と隧道を迂りぬけて、

枯草の山と山との間に挟まれた、或貧しい町はづれの踏切りに通りかゝつてゐた。踏切りの近くには、いづれも見すばらしい藁屋根や瓦屋根がごみごみと狭苦しく建てこんで、踏切り番が振るのであらう、唯一旒のうす白い旗が懶げに暮色を揺つてゐた。やつと隧道を出たと思ふ——その時その蕭索とした踏切りの柵の向うに、私は頬の赤い三人の男の子が、目白押しに並んで立つてゐるのを見た。彼等は皆この曇天に押しすくめられたかと思ふ程、揃つて背が低かつた。さうして又この町はづれの陰慘たる風物と同じ様な色の着物を着てゐた。それが汽車の通るのを仰ぎ見ながら、一齊に手を揚げるが早いか、いたいけな喉を高く反らせて、何とも意味の分らない喊聲を一生懸命に迸らせた。するとその瞬間である、窓から半身を乗り出してゐた例の娘が、あの霜焼けの手をつとのばして、勢よく左右に振つたと思ふと、忽ち心を躍らすば

かり暖な日の色に染まつてゐる蜜柑が、凡そ五つ六つ汽車を見送つた子供たちの上へ、ばらばらと空から降つて来た。私は思はず息を呑んだ。さうして刹那に一切を了解した。小娘は——恐らくはこれから奉公先へ赴かうとしてゐる小娘は、その懐に藏してゐた幾顆の蜜柑を窓から投げ、てわざわざ踏切りまで見送りに来た弟たちの勞に報いたのである。

暮色を帯びた町はづれの踏切りと、小鳥のやうに聲を揚げた三人の子供たちと、さうしてその上に亂落する鮮かな蜜柑の色と——すべては汽車の窓の外に、瞬く暇もなく通り過ぎた。が、私の心の上には



せつない程はつきりと、この光景が焼きつけられた。さうしてそこからあるえない朗かな心もちが湧き上つてくるのを意識した。私は昂然と頭を擧げて、まるで別人を見るやうに小娘を注視した。小娘は何時かもう私の前の席に歸つて、相變らず輝だらけの頬を萌黄色の毛絲の襟卷に埋めながら、大きな風呂敷包を抱へた手に、しつかりと三等切符を握つてゐた。——沙羅の花——

二八 故國に歸りて  島崎藤村

異郷の旅ほど民族としての意識を強く吾等に與へるものは無い。その結果は、海外在留の同胞を接近させもするし、また反目させもする。外國を旅して見ると、他の同胞の在留者に逢ふことを非常に厭がつて居るやうな日本人を見受けることは決して珍しくない。曾て私は巴里の客舎で嘆息したことがある。吾等海外

島崎藤村
名は春樹
長野縣の人
文學者

の旅行者は直ぐ懇意にもなれるかはりに直ぐまた離れて了はねばならないやうな事情の下にある。あの遠い雲の往きかひにも譬へたいのが吾々の境涯だ。同胞の愛と堪へがたい旅愁と信じ難いほどの無刺戟とは實に吾等を十年の友のやうに結び着けるのだと。

今度私は國の方へ歸つて来て、再びそれらの人達に邂逅する嬉しさを味ひ知つた。假令異郷での交りに親疎の差別はあつたとしても、矢張り吾等は同じ旅の記憶に繋がれて居る。そこから歸朝者としての心持を思ひやつてもらふことが出来、一切の言行を許してもらふことも出来、歐羅巴を見た眼でもう一度亞細亞を見たときの、その鮮かな印象を互に比べ合ふことも出来るといふ氣がする。

例へば私が今度の船旅を語るとしよう。今日東洋の諸港に移



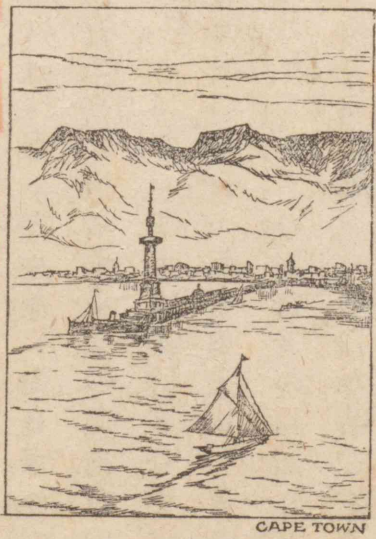
上海

住しつゝある日本人は新嘉坡に凡そ三千人、香港に凡そ千五百人、上海に凡そ一萬四五千人を數へる程の盛況に達して居ると言はれるが、所謂日本町なるものの設備には未だく見るに足るものが無い。中央亞細亞以西は言ふ迄もなく、今日東洋の主人たることを請求するものは、抱負の高い日本人でなくて事實アングロサクソンの民族である。是は必ずしも私の一家言でなく、多くの旅行者の點頭くところであらうと思ふ。斯様な話をするとしよう。それにしても、曾てこの島國を離れたこともなく、上海の英租界を踏んだこともなく、香港、新嘉坡、其他の港々に於ける英吉利人の努力の跡を見たこともなく、日

本は東洋の盟主であるとかかり力んで居るやうな人達に、どうしてこの激烈な人種の競争を想像して貰ふことが出来よう。

南阿弗利加のケエプタウンから東を歸航して見ると、今更ながら英吉利の殖民地の發達には驚かされる。實際、殖民地を別にして今日の英吉利といふものは考へられないくらゐだ。

今日の英吉利にあるやうな興味中心の藝術や、そこにある多くの冒險譚、成功談や、低級で卑俗な趣味を満足せしめるやうなもの、廣大なる殖民地の發達及びその需要といふことから引放しては考へられないくらゐだ。私の寄つて來た亞弗利加、亞細亞の港々で彼等英吉利人の勢力範圍でない場所は無いと言つて可い。

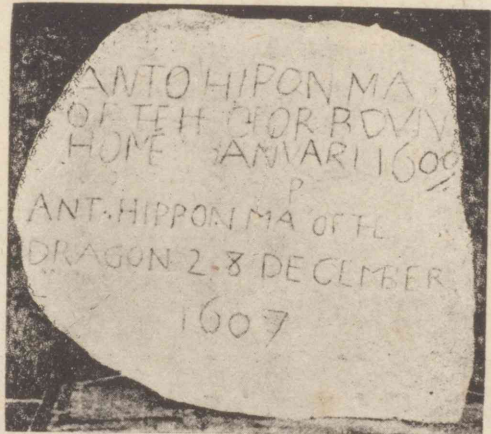


ンウターブエケ

日本郵船の乗客としてすら、所謂英吉利のコロニストなるもの無遠慮で、横着で、成金的であるにも驚かされる。さういふ人達の跳梁する殖民地が旅して見て眞に楽しからう筈が無い。そこにあるものは、一切が金づくだ。金でも儲からなくて、誰が斯様なところへ來るものかと言はぬばかりの人達の世界だ。そこに漂ふ空氣の死んだやうなものにも厭氣がさす。白人の奴隸をもつて甘んずる黒奴などはあさましいものだし、さうで無い土人は見ても可傷しい。外觀の繁昌と、内部の零落とは、私の行く先にあつた。上海まで歸つて來て、やゝこの心持は薄らいだ。吾等が故國に歸る楽しみは、實に生々として自由な空氣を吸ひ得るの楽しみである。

南阿弗利加博物館の藏版にかゝるものに、極東への航路に於ける初代歐羅巴航海者が残せし記録の一小冊子がある。それを見

ると歐羅巴人が喜望峯の迂回を企てたのは、千四百八十五年あたりの昔からだといふことが出て居る。彼等の志はみな夢想の郷なる「印度へ」といふにあつたことが出て居る。印度へ——支那へ——日本へ——さう思つてあの「黒船」が幾艘となくこの島國の近海に出沒した時代のことを振返つて見ると、吾等の先祖の中に澤山氣違ひが出来たといふも決して不思議は無いと思ふ。よくそれでもあの暗黒な時代にあつて吾等の先祖が迫り来る恐怖を切抜けたものだといふ氣もする。幸ひにしてわが長崎は新嘉坡たることを免れたのだ。それを私は天佑の保全とのみ考へたくない。歴史的の運命

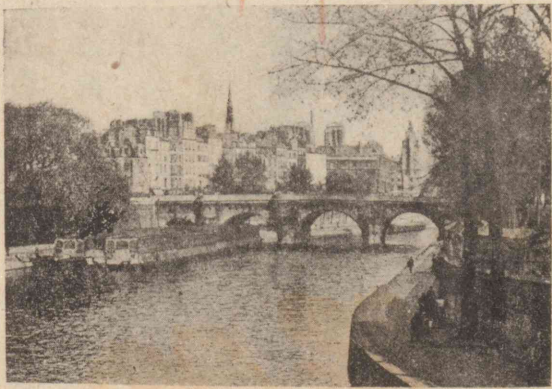


部一の録記たし記に石が等者航回峯望喜の代初

の力にのみ歸したくない。その理由を辿つて見ると種々なことが有らうけれども、私はその主なるものとして吾が國が封建制度の下にあつたことを考へて見たい。實際吾が國の今日あるは封建制度の賜物であるとも言ひたい。破壊に繼ぐに破壊を以てした過去五十年の間にすら、活ける「過去」は猶吾等の内に働きつゝあつたではないか。吾等の國が印度でもなく支那でもないのは、かういふ時代を所有したからではないか。今日の日本文明とは、要するに我が國の封建制度が遺して置いて行つて呉れたものの近代化ではないか。

お前は西洋嫌ひになつて歸つて來たといふ評判だが、事實か、とある友人に私は尋ねられた。すくなくも自分の旅は辛かつたとは私は言つても、そのために西洋が嫌ひになつたかと聞かれては一寸當惑する。

私は佛蘭西だよりとして都度々々の旅の通信を東京朝日紙上に寄せた。あの手紙の全部が私としてはその一番好い返事だ。あれを書いた時も、今も私の心持は變らずにある。あの巴里ポオルロワイアルの客舎の窓で、自分は巴里を讚美する爲にこの机に對つて居るのでも有りませんとは書いたけれども、私がセエヌの河畔などを歩いて見る度に、佛蘭西人の組織的才能と、傳統を重んずるその冷靜な意志とに對して、尊敬と羨望の念に堪へなかつたことは、あの手紙の中に言つて寄した通りだ。そこにある歴史の尊重、學問の尊重、藝術の尊重は、實に想像以上であつた。今も猶私はあのラテンの民族の天才を



河 × エ セ

愛する美しい精神を讚美するに躊躇しない。是程の自分がどうしてさう西洋嫌ひになつて歸つて來られよう。つくづく、私は佛蘭西あたりにある歐羅巴のクラシカルな文明を、クラシカルでそして同時に近代的なあの大きな包容の力を羨んで來た。それだけ私は自分の國の方のことを考へ續けて來た。何一つ日本に好いものがあるか、何一つ世界に向つて誇り得るものがあるかと言ふ海外在留の同胞に邂逅ふ度に、吾等はさういふ破壊の思想からも、自分の國を護らねばならないと思つて來た。

さうだ、吾等日本人はまだ、保守的だ。吾等に必要なことは國粹の保存でなくて、國粹の建設でなければならぬのではないのか。吾等はずとく、歐羅巴から學ばねばならない。そして自分等の内部にあるものを育てねばならない。

—海へ—

二九 野に出でよ

島崎 藤村

朝は再びこゝにあり。朝は我等と共にあり。
 埋れよ眠。行けよ夢。 隠れよ、さらば小夜嵐。
 諸羽うちふる雞は、 咽喉の笛を吹鳴らし、
 けふの命の戦闘の よそほひせよと叫ぶかな。
 野に出でよ。野に出でよ。 稻の穂は黄に實のりたり。
 草鞋とく結へ。鎌も執れ。 風に嘶く馬もやれ。

雲に鞭うつ空の日は、 語らず言はず聲なきも、
 人を勵ますその音は 野山に谷に溢れたり。
 流る、汗と膩との、 落つるや何處かの野邊に、
 名も無き賤のものふを、 來りて護れ、軍神。

野に出でよ。野に出でよ。 稻の穂は黄に實のりたり。
 草鞋とく結へ。鎌も執れ。 風に嘶く馬もやれ。

あゝ綾絹につゝまれて、 爲すよしもなく寝ぬるより、
 薄き襤褸はまとふとも、 活きて起つこそをかしけれ。
 口には朝の息を吹き、 骨には若き血を纏ひ、
 胸に驕慢手に力、 霜葉を履みて疾く來れ。
 野に出でよ。野に出でよ。 稻の穂は黄に實のりたり。
 草鞋とく結へ。鎌も執れ。 風に嘶く馬もやれ。

三〇 眞理

高山 樗牛

凡て人は、その信ずる所を忌憚無く公表するの勇氣無かるべからず。已れはかく信ずれども他人は如何に思ふらむ、若し笑はる

高山樗牛

名は林次郎
 山形縣の人
 文學博士
 明治三十五年歿
 (年三十二)

ることあらばなど思ひわびつらふは、なべて志弱く膽氣に乏しき人の常ならむかし。古よりかゝる、己れの固く信ぜざる事を爲し得ざる人の大事を成就したる例無し。學者に於ても同じ事なり。

某の時己れ固く然りと信じたることは、その時それを然りと公言するに於て何の憚る所やある。人は己れの意識を超えて何事をか信じ得べきぞ。又某の時固く然りと信じたる事も、他の時然らずと固く信ずることあらば、その説を改むるに於て又何の憚る所やある。ぞを豹變なりと云ふは、思想の變遷てふことを解せざる人の言のみ。人智は生まれてより死ぬるまで斷えず進歩すること、猶哲學の思想が歴史と共に絶えず變遷するが如し。人間智に一定固着の眞理なるもの無し。この絶えざる進歩その物が即ち眞理なりと知らずや。

もし學者にして一定渝らざる意見を樹てむとせば、それは臨終の

際に於てするの外無かるべし。又哲學者が歴史上に萬古不易の説を立てむとせば、それは歴史の終る時に於てするの外無かるべし。死は一人の思想を固定す、されど歴史の始めなく又終りなきを如何にすべきや。



高 山 稗 牛

所詮眞理は變遷の外に無し。學者が客觀的に萬古易らざる意見を定むることは思ひもよらざるなり。されば人々その時々固く然りと信ずる所を然りと公言するの外無かるべし。

かく言はば、その説旦暮に改まり、散漫として歸する所無かるべしと憂ふる者あらむか。さりながら愚昧輕佻の輩にこそかゝることもあらめ、苟も識見ある學者にありて、ざる憂は萬々無かるべし。

し。まこと學者と呼ばれむ程の人は、よしその説如何に渝るとも、一定必然の道によりて發達するものなれば、前なる説と後なる説とを繋ぎ考ふる時は、一部の小思想史を現すべきなり。さればかかる學者の説は、その時に固まらざる代りに、その發達の道に於て定まれりと謂ふべし。古より大なる學者にありと謂はるゝは、この意味に於ての一定の意見なり。

今の學者がその信ずる所を公言するに憚るは、蓋しかく思へばなるべし。——吾が説は過去に於て變化し來れり、吾は今日現に固く信ずる所あれども、過去の例によりて類推する時は、是亦明日に到りて渝るやも測られず。されば吾今この所信を公言せば、それが萬一明日に到りて渝りたらむとき、變説として嘲けられむ。この嘲りを免れむには、吾は所信を枉げて非を遂ぐるの外無からむ、これとともに吾が忍びざるところなり、如かず暫く緘黙を守らむには

——と。

かゝる緘黙の謂はれなきことは、先に述べたる所にて明かなるべし。畢竟眞理には生命あり、人智の發達は即ちそれが現はるゝ所なり。かの博物學者がピンもて蝶や蜂を刺して動物の標本を作るが如き考にて、一定固着の眞理を捉へむとするは、いみじき誤解ならずや。世の學者がその固く信ずる所をだに公言し得ざる迄に怯懦なるは、所詮このいみじき誤解に本づく。彼等にしてその學者たるの天命を完うして人生の爲に盡すあらむと欲せば、先づこの大々的誤解を擺脱せざるべからず。

——樗牛全集——

三一 内藏助と主税

大佛次郎

大石内藏助は、火箸を取つて火をかきおこしながら、淋しく更けた秋の聲に聞き入つた。軒端の風鈴が、時折雨戸の外にかすかな

大佛次郎
本名野尻清彦
横濱市の人
文學者

音をたてる。これと、縁の下の蟲の音が、この一夜の静けさに深みを加へてゐるのである。

「主税は何をしてゐるのだらう。」

ふと内藏助はかう考へた。

部屋にゐた主税は、父親がのつそりとはいつて來たのを見た。

「どうだ。」

と内藏助はいつて坐つた。

主税はいくらかはにかんだやうに微笑して、書きかけてゐた手紙を伏せた。

「もう寝たがいい。」

内藏助は胸にうかんで來た言葉を、そのまま口にのぼせながら、ひよつとすると主税の書いてゐた手紙が實家へ歸つてゐる母親や弟達にあてたものではないかと考へた。

内藏助はそれをきいて見ることゝをわざと避けた。何かしら、わが子に詫びなくてはいけないことがあるやうに考へられた。

「さびしくはないか。」

父親は暫くして慈愛をこめていつた。始めてわが子の顔をまともに見た。

「いゝえ。」

主税は、やはりはにかんだやうに、かう答へてそつと身を動かした。父は、母や弟達に會ひたくないか。いふ言葉を、咽喉まであふれさせて、手のとどくところに重ねてあつた本を、だまつて膝の上に取上げた。

これをひろげて見て、それが子供らしい努力の跡を不審紙や點で示してある論語の本であることを認めて、父親は、夜毎にこの本を二人の間に置いて講釋してやつた、遠くもない過去のことを思

ひ浮べないではゐられなかつた。その時分から見ると、この子は何と大人びて来たことであらう。まったくあどけない子供であつたが……この一二年の間に大人びて来たことは驚くべしほどだつた。おれのこの齡頃には、慥かまだ犬や小鳥を遊び相手て、いくさごつこが日課になつてゐたのだつた。

だまつてただ父親と一緒にゐることが楽しげな主税を、内藏助は感慨深く優しい目で眺めるのだつた。何かいつて、からかはうとしてゐるやうな微笑が自然と口もとを動かして来る。この齡頃では、ひと月が一年にもあたるのではないか。いや、しかし……軀よりも心持であつた。軀は大きくなつたといふだけ、まだ如何にも子供つぽい不態なところを残してゐるが、近頃の心持の大人びたことはどうだらう。それも、あの大變があつてからである。復讐のことが、行く手にさだめられてからのことである。子供は

筆蹟

私ならざる事に
御座候故無_レ是
非_一御斷申候將
又大垣より御到
來之由、一樽並
麥麵一折被_レ掛
御意_一思召寄忝
奉_レ存候期_一貴
面_一御禮等可_レ得
貴意_一候_一以上
九月十三日
大石内藏介
普門院様

子供なりに新鮮であつて、傷つき易い心の皮膚に、かへつて鋭敏に感

じたのだな。

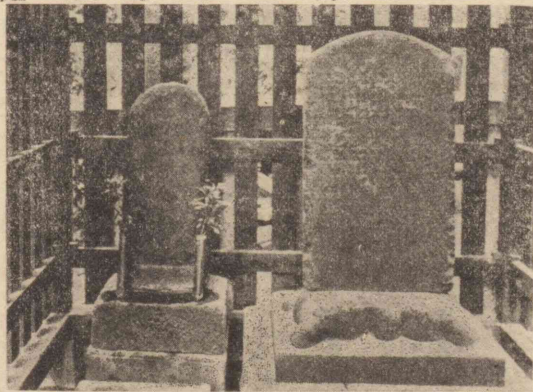
あどけなかつた目が、大人のやうに濁ることはなしに、急に深い色をたへるやうになつた。かなしげにくもつてゐることも間々ある。決しておれからは聞かせはしないが、同志の不揃ひなこと、急進、穩和兩黨の軋轢母や弟達と別れねばならぬ事情が……ものの影が池にうつるやうに、この子の心の水面に何かを投げずにはゐなかつたのだ。

知らなかつたのではない。おれは氣が付いてゐた……内藏助

は非難に答へるもののやうに躍起とかう思ひながら、いぢらしさにふるへて、次第にうるんで来る胸を淡い悔恨に似たものにくるんで、見詰めてゐるのだつた。

その心持はやがて、だまつて微笑してゐるだけの主税を眺めてゐる内に、これまでに育つた子を殺すのだと思ふ心持に變つた。

この子は何のために、漢籍を読み、何のために修養に精進するのか。その苦勞をしてもしなくても、死は間近いところまで來てゐる。この若樹のやうに強健に立派に育つて來た肉體も、また正しからうと努めてゐるみづみづしい精一杯の心持も、死神の水のやうな手に握られて、瞬間にそ



(左)墓と(右)文碑の税主石大

のまゝに終るのではないか。この子は、そのことを考へてゐないのか。大人はいい。武士といふものの資格が、靜かに死につくだけの覺悟を養ふことにあると見てもよいし、風俗も習慣もその修養を助長するやうに出來てゐるのである。しかし子供は、大人とは別ではなからうか。まだ、それだけの覺悟を作る時間もあるまいに、この落著き加減は恐らく死といふことを知らないから來てゐるのではなからうか。

内藏助はいつた。

「毎日退屈はしないか。」

「いゝえ。」

と主税は答へた。

「することが澤山ございますから。」

「なにがそんなにある。」

「劍術……」

「それから。」

「主税は、父上のお供をしまるるまでに、出来るだけ澤山御本を讀んで置きたいのでございます。それから、ほかにもつとすることが澤山あるやうな氣がしてをります。」

「……」

さうだ、主税はいそがしかつた。人が五十年かゝつてやることを、残つた僅かの時日の間にしてしまはなければならぬ。父親はつくづくとかう考へ、胸はいぢらしさに烈しく動いた。

主税はやはり、死ぬことなど別に氣にもとめてゐないのかも知れない。しかし、それにも拘らず近づいて來てゐる死、たとへ間接にでも影をさして、この生活をあわただしくしてゐることかと思ふと、父親は胸の中で泣かずにはゐられないのだつた。――赤穂浪士

榎本其角

寶井氏ともいふ

江戸の人

寶永四年歿（年

四十七）

歳尾

元禄十五年

都文公

土屋主税

本所松坂町に住

む

堀部彌兵衛

名は金丸

大高源五

名は忠雄

子業と號し俳諧

をよくした

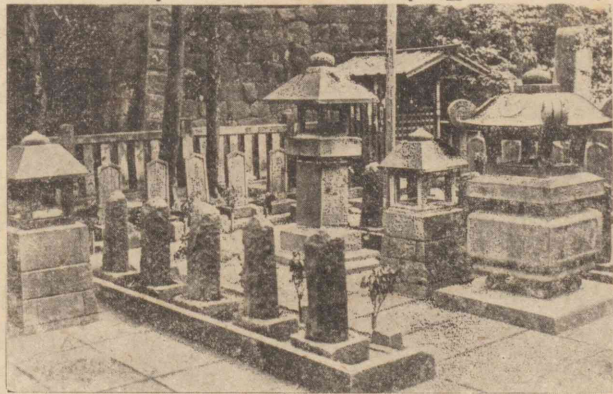
三二 義士討入を報ず

榎本 其角

歳尾の御壽として、例年の如く、遠路の處酒料一封、露の鹽漬一桶贈り下され、御厚志の程幾久しく受納致し候。御序に御家内始め御社中へも宜しく御傳へ下さるべく候。然れば、去る十四日、本所都文公に於て年忘の一興御催あり。嵐雪、杉風、我等も一席にて、折から雪面白く降り出し、風情手に取るがごとく、庭中の松は雪を戴き、雲間の月は闇を照らし、風興今は捨て難くして、夜ただ更けゆき、最早丑三つ頃になり、犬さへ吠えず打ち静まり、文臺料紙も押し片寄せ、四五人集まりて蒲團を被き、夢の浮世といふ間もあらせず劇しく門を叩く者、兩人玄關に案内し、我等淺野家の浪人堀部彌兵衛、大高源五、今夕御鄰家吉良上野介屋敷へおし寄せ、亡君年來の遺恨を果さんため、大石内藏助始め四十七人、唯

吉良殿
名は義央

今吉良殿を討ち取り候間、御鄰家の御好み、武士の情、萬一御加勢も候はば、末代の御不覺と存じ奉り候。願はくは門戸を厳しく御防ぎ、火の元御用心下され候はば、忝く存じ奉り候。といひも果さず立ち出づる、その風情、神妙なる事いふべくもあらず。今は、俳友も是迄なりとて、其角幸に爰にあり、生涯の名残を見んとて、門前に走り出づれば、各、吉良家に忍び入り候程に、わが雪と思へば、輕し笠の上



赤穂義士の墓

と高々と一聲よばはり、門を閉ぢて内を守り、堀越に提燈ともし、始終を伺ふに、その寒さ骨身に浸み、女人の叫、童子の泣聲、風飄々と吹き誘うて、曉天に至りては、本懐已

に達したりとて、大石主税、大高源五、物穩便に謝儀を述べたること、あつばれ、武士の譽といふべし。

日の恩やたちまち碎く厚氷

申し捨てたる源五が精神、いまだ眼前にのこり候。貴公年來の御入魂ゆゑ、具に認め進じ申し候。早春の内かれこれ御さしく



其角筆蹟

筆蹟
夜も既に明て水
鶏の行衛哉
其角

り御出府候はば、かの落著も承り届け、餘儀なく伏劍に及び候はば、竊に追善をも相營み申すべく存じ候。まづは餘日もこれなく、書外貴面の時を期し候。恐恐謹言。

十二月二十日

其角

文 璘 様

月雪の中や命の捨てどころ

三三 木曾殿の最期

(平家物語)

木曾
源義仲
壽永三年戦死
長坂
山城國愛宕郡小
野郷より丹波へ
通ずる路
龍華越
山城國愛宕郡大
原より近江國和
邇郡龍華へ通ず
る道

木曾は長坂を経て丹波路へとも聞ゆ。龍華越にかゝつて、また北國へとも聞こえけり。かゝりしかども今井が行方のおぼつかなさに、取つて返して、勢多の方へぞ落ち行きたまふ。今井の四郎兼平も、八百餘騎にて勢多を固めたりけるが、五十騎ばかりに討ちなされ、旗をば捲かせて持たせつゝ、主のゆくへのおぼつかなさに、都の方へ上るほどに、大津の打出の濱にて、木曾殿に行きあひ奉る。中一町ばかりより互にそれと見知つて、主従駒を早めて寄り合ふたり。

木曾殿、今井が手を取つてのたまひけるに、義仲六條河原にていかにもなるべかりしかども、汝がゆくへのおぼつかなさに多くの

敵に後を見せてこれまで遁れたるはいかに。とのたまへば、今井の四郎御誂まことにかたじけなう候。兼平も勢多にて討死仕るべし候ひしかども、御ゆくへのおぼつかなさに、これまで遁れ参つて候。と申しければ、木曾殿、さては契りは未だ朽ちせざりけり。義仲が勢山林に馳せ散つて、この邊にも控へたるらんど。汝が旗上げさせよ。とのたまへば、捲いて持たせたる今井が旗さし上げたり。これを見つけて、京より落つる勢ともなく、また勢多より参る者ともなく、馳せ集まつて、程なく三百騎ばかりになり給ひぬ。

木曾殿なめならず喜うて、この勢にては最後の軍一軍などかせざるべき。あれにしぐらうて見ゆるは誰が手やらん。「甲斐の一條の次郎殿の御手とこそ承つて候へ。」勢はいかほどあるらん。「六千餘騎と聞え候。」さては互によい敵、同じう死ぬるとも、大勢の中にかけ入り、よい敵に逢うてこそ討死をもせぬ。とて、眞先き

にぞ進み給ふ。

木曾殿その日の装束には、赤地の錦の直垂に、唐綾緘の鎧着て、いかもの作りの太刀を佩き、鉞形打つたる兜の緒をしめ、二十四さいたる石打の矢、その日の軍に射て、少々残つたるを頭高に負ひなし、滋籐の弓の真中取つて、聞こゆる木曾の鬼葦毛といふ馬に、金覆輪の鞍を置いて乗つたりけるが、鎧ふんばり立ち上がり、大音聲をあげて、「日頃は聞きけんものを、木曾の冠者、今は見るらん、左馬の頭兼伊豫の守、朝日の將軍源の義仲ぞや。甲斐の一條の次郎とこそ聞け。義仲討つて兵衛の佐に見せよや」とて、喚



(繪挿記衰盛平源版古)

戰合津栗

いて駈く。

一條の次郎これを聞いて、「只今名乗るは大將軍ぞや。餘すな者ども、漏らすな若黨、討てや」とて、大勢の中に取りこめて、われ討ち取らんとぞ進みける。木曾三百餘騎、六千餘騎が中へかけ入り、豎ざま、横ざま、蜘蛛手、十文字にかけ破つて、後へつと出でたれば、五十騎ばかりになりけり。そこを破つて行く程に、土肥の次郎實平、二千餘騎で支へたり。そこをも破つて行く程に、あそこにては、四五百騎、こゝにては、二三百騎、百四五十騎、百騎ばかりが中を、かけわりかけわり行く程に、主従五騎にぞなりにける。五騎が中までも、巴は討たれざりしが、その後物の具脱ぎ捨て、東國の方へぞ落ち行きける。手塚の太郎討死す。手塚の別當落ちにけり。

木曾殿、今井の四郎、たゞ主従二騎になつてのたまひけるは、「日頃は、何とも覚えぬ鎧が、今日は重うなつたるぞや。このたまへば、今井

の四郎申しけるは、御身も未だ疲れさせ給ひ候はず、御馬も弱り候はず、何によつて一領の御きせながを、俄に重うは思召され候べき。それは御方につゞく勢が候はねば、臆病でこそ、さは思召し候らぬ。兼平一騎をば餘の武者千騎と思召し候べし。こゝに射残したる矢七つ八つ候へば、暫らく防矢仕り候はん。あれに見え候は、粟津の松原と申し候。君はあの松の中へ入らせ給ひて、靜かに御自害候へ。とて、打つて行くほどに、また新手の武者五十騎ばかり出て来る。

兼平は、この御敵暫らく防ぎ參らせ候べし。君はあの松の中へ入らせ給へ。と申しければ、義仲六條河原にて、いかにもなるべかりしかども、汝と一所でいかにもなりなんためにこそ、多くの敵に後を見せて、これまで逃れたんなれ。所々で討たれんより、一所でこそ討死をもせめ。とて、馬の鼻を並べて、既に懸けんとし給へば、今井

の四郎急ぎ馬より飛んで下り、主の馬の水づきに取りつき、涙をはらはらと流いて、弓矢取は年頃日頃、いかなる高名候へども、最期に不覺しぬれば、長き瑕にて候なり。御身も疲れさせ給ひ候ひぬ。御馬も弱つて候。いふ甲斐なき人の郎等に組み落されて、討たれさせ給ひ候ひなば、さしも日本國に鬼神と聞えさせ給ひつる木曾殿をば、何某が郎等の手にかけて討ち奉りたりなど申されんこと、口惜しかるべし。たゞ理をまげて、あの松の中へ入らせ給へ。と申しければ、木曾殿さらばとて、たゞ一騎、粟津の松原へぞ駈け給ふ。

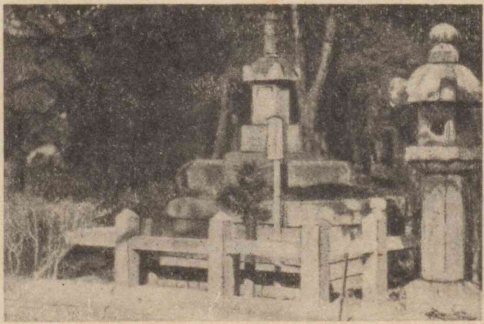
今井の四郎取つて返し、五十騎ばかりが勢の中へかけ入り、鎧ふ



粟津の松原

んばり立ち上り、大音聲をあげて、遠からん者は音にも聞け、近からん人は目にも見給へ。木曾殿の乳母子に、今井の四郎兼平とて、生年三十三にまかりなる。さる者ありとは、鎌倉殿までも知らしめられたるらんど。

兼平討つて兵衛の佐殿の御見参に入れよや。とて、射残したる八筋の矢を、さしつめ引きつめ、さんくんに射る。死生は知らず、矢庭に敵八騎射落し、その後太刀を抜いて、切つて廻るに、面を合する者ぞなき。たゞ、射取れや、射取れ。とて、さしつめ引きつめ、さんくんに射けれども、鎧よければ裏かゝず、眉間を射ねば手も負はず。木曾殿はたゞ一騎、栗津の松原へ駈け給ふ。頃は正月二十一日、入相ばかりのことなるに、薄氷は張つたりけり、深田ありとも知ら



木曾義仲の墓

ずして、馬をさつと打ち入れたれば、馬の頭も見えざりけり。あふれどもあふれども、打てども打てども動かず。かゝりしかども、今井が行衛のおぼつかなさにより、仰ぎ給ふ所を、相模の國の住人、三浦の石田の次郎爲久追つかゝり、よつこいてひやうとつ。木曾殿内兜を射させ、痛手なれば、兜の眞甲を馬の頭におし當て、うつぶし給ふ所を、石田が郎等二人落ちあひて、既に御首をば賜はりけり。やがて首をば太刀の先に貫き、高くさしあげ、大音聲をあげて、「この日頃、日本國に鬼神と聞こえさせたまひつる木曾殿をば、三浦の石田の次郎爲久が討ち奉るぞや」と名乗りければ、今井の四郎は軍しけるが、これを聞いて、今は誰をかばはんとて、軍をばすべき。これ見給へ、東國の殿ばら、日本一の剛の者の自害する手本よ。とて、太刀のきつさきを口に含み、馬より逆さまに飛び落ち、貫かつてぞ失せにける。

三四 近世の歌

殘の雪

賀茂真淵

めづらしと見そめし程になりにけり
遠山のまに残るしらゆき

賀茂真淵
遠江國の人
國學者
歌人
明和六年歿(年
七十三)



蹟筆淵真

花の歌とて

うらくとのどけき春の心より
句ひいでたる山ざくらばな
春風來海上

加藤千蔭

加藤千蔭
橘千蔭ともいふ
芳宜園と號す
賀茂真淵の門人
國學者
歌人
文化五年歿(年
七十四)

二見瀉こちふく風にあけそめて

神代のまゝの春は來にけり

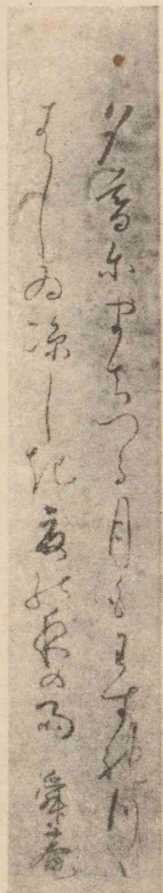
名所春曙

ほのぼのと明けゆく空もむらさきに
匂ふや春のむさし野の原

年の始によめる

本居宣長

さしいづる此の日の本の光より
こまもろこしも春を知るらむ



蹟筆長宣

瀨中眺望

富士の根は雲の絶間に見えそめて

筆蹟
夕暮にまちつる
月もわすれつゝ
はしむ涼しき夏
の夜の雨 舜菴

香川景樹
桂園と號す
因幡國鳥取の人
歌人
天保十四年歿
(年七十六)

朝 鶯

限りなき春のねぶりもさめにけり

香川景樹

あしたのどけき鶯のこゑ

事につき折にふれたる

山吹の花ぞひとむら流れける

いかだのさをや岸にふれけむ

春よみける歌の中に

井手曙覽

すくくとし生ひ立つ麥に腹すりて

つばめ飛び來る春のやま畑

山 家

白雲のゆきかひのみを見送りて

今日もさしけり蓬生のかど

井手曙覽
橋曙覽ともいふ
歌人
明治元年歿(年
五十七)

太田垣蓮月

名は誠
女流歌人
若くして尼にな
り千種有功の門
に學ぶ
明治八年歿(年
八十五)

春夕月

ありあけの霞に匂ふ朝もよし

太田垣蓮月

きさらぎ頃のゆふづきもよし

雨中蓮

ふるとしも見えぬ小雨をうけたためて

をりくこぼす池の蓮葉

山里にゆきて

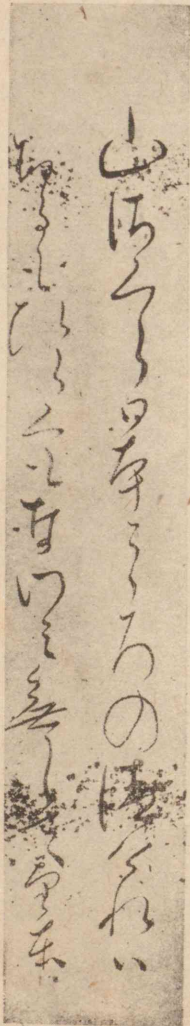
野村望東尼

ほたるとぶかげも涼しき山川を

ゆひ隔てたる里のしばかき

筆蹟

山さくら日本ご
ころの清ければ
ちるもひらくも
なづみ無して
望東



蹟筆尼東望

菜洗ふに

川の瀬に洗ふかぶらの流れ菜を
追ひあらそひて行く家鴨かな



鳥木 赤彦
本名久保田俊彦
長野縣の人
歌人
大正十五年歿
(年五十一)

三五 日本の民謡

鳥木 赤彦

日本民族には、太古から日常の感情を歌謡にうつして、自ら口に歌ひ、且又對者と唱和するといふ風があつた。それ等の民謡の中で、ある特別な形式を備へたものは、移つて短歌となつて、かの萬葉集時代に於ける大發達をなした。然るに、この萬葉集時代に、緊張の頂點まで達した短歌が、古今集以後の勅選に至つて、著しく弛緩の情態を現したといふことは、一面奇異な現象のやうに考へられるが、それは決して奇異ではないのである。

古今集以後の和歌といふものは、萬葉集の歌の如く、傳統的に民衆心理から生み出された歌ではない。民衆とかけ離れた一部貴

古今集
醍醐天皇の延喜五年紀實之等が勅を奉じて撰した歌集

勅撰集時代

醍醐天皇の時古今和歌集を撰せしめられてから後花園天皇の時新編古今集を撰せしめられた時まで約五百三十二年間をいふ
神樂歌
神樂に合せて歌ふ歌
催馬樂
雅樂の一種

族社會の玩弄物であつて、その出來方も、緊張した感情から生み出されると言ふよりも、外形を整へるに苦心して作り出されたもので、内面の空疎と萎縮とは、當時の歌人の思はぬところであつた。故に私は、萬葉集の精神は決して勅撰集には傳はらずに、却つて短歌の形を存してゐないその當時の民謡に存してゐると信じてゐる。民衆の心理から生れた短歌の精神が、民族的歌謡の一分流であるところの民謡に合流してゐることは、決して不自然ではない。

このことは、勅撰集時代のその背後に存してゐたと思はれる神樂歌や催馬樂歌の中に現れてゐる民謡を調べて見れば、容易になづくことが出来るのである。
篳分けば袖こそ破れぬ、利根川の石は踏むともいざ河原より
しながどり猪名の湊に入る舟のかぢよくまかせ舟かたぶ

くな若草の妹も乗せり我も乗りたり

といふやうなのは、ほんの一例に過ぎぬが、この民謡から採つたと思はれる神樂歌や催馬樂歌を以て、古今集以下の勅撰集に比べても、その系統が萬葉集に通じてゐることは明白である。さうして、この民謡の系統は、足利・徳川の各時代を経て、順次に發達推移して今日に及んでゐるのである。

然らば、それ等の民謡の生命となつてゐるのは何であらうか。それはやはり、民衆の苦しい生活が自然に産み出したところの、惻愴として人の心を動かす力を持つ情調である。農民の唄ふ歌謡には、のん氣に似て、その底には重々しい調子がこもつてゐるし、船頭唄や馬子唄には多くの漂泊のやるせない哀音がこもつてゐる。

乳が崎沖まで見送りましょが、それから先は神だのみ

(伊豆大島)

乳が崎
大島の西北端

浅間

浅間山
長野縣と群馬縣との境に跨る活火山

碓氷越

碓氷は碓氷峠
群馬縣碓氷郡と長野縣北佐久郡との境にある

追分

長野縣北佐久郡にある町

坂本

群馬縣碓氷郡にある町
碓氷峠の東麓にあたる

中仙道

東山道を経て江戸から京都へ行く街道

の唄の如き、必ずしも船頭とばかりは言へぬが、海中の孤島に頼りなく住む人々の心算が、神だのみの哀音となつて現れてゐる純粹さを味ふべきである。

浅間の煙が北へと靡く、今宵泊らにや雨になる。

一誦して、浅間の山裾から碓氷越をして、北國街道を往來する馬子の唄であることがわかるてはないか。浅間の裾野には追分の宿場があり、碓氷峠の下には坂本の宿驛があつて、いづれも中仙道の旅人の一夜の泊場であつた。その宿引の女が旅人を呼びとめて、一宿を勧める心がこの



浅間山の眺め

(英泉筆)

輕井澤
長野縣北佐久郡
輕井澤町

唄の心である。一夜の宿を勧める歌謡を、勧められる旅人や馬子が自ら唄つて、自分の境遇を辛うじて慰めてゐるところが、哀な漂泊の心である。年が年中、馬の鈴を鳴らして、上るは碓氷の坂、下るは輕井澤、追分の曠野である。見上げる空には、いつも淺間の煙が靡いてゐる。煙は高く南へ靡く。風が北になれば日は晴れる。煙が北へ靡けば、あすの日和は雨となる。「今宵泊らにや雨になる」は、この嶮坂を上下する脚絆草鞋の身には、決して戯れの問題はないのである。

麥ついて夜麥ついてお手にまめが九つ、九つのまめを見れば親里がこひしや。

麥をつくのは農家の新婦である。嫁入して幾ばくならず、家人の心も知り難く、起臥にいとゞ落ち着かぬ心がある。父母の愛娘として、掌中の玉であつた優しい身も、今は夜麥について掌に出來

たまめを眺めて、親里を思ふ痛切さは、恐らく人麿貫之の秀歌にも優るものがあらう。

これ等の唄は、その生活から唄はれてゐる。その職業や境遇の生む情調が抒べられてゐる。さうして、民謡としての生命も、全くその中にあるのである。

かゝる職業的個性の心理や感情を表す民謡ほど、それがまた地方的の個性を表現してゐると言ひ得る場合が多いやうである。土を離れて人なく、人の個性は少くも土の個性を離れることは出來ない。その土地の持つ情調が、その土に住む生活から唄はれた民謡に、強い影を投ずることは、誠に自然の現象である。「乳が崎沖まで」の唄が島に生れ、「淺間の煙」の唄が信濃高原に點在する宿驛の間に生れ、「麥ついて」の唄が伊豆南方の田舎に生れてゐることを考へ合せると、民謡と地方との關係を、ほゞ推測することが出來よう。

人 麿
柿本人麿
歌人
持統・文武兩天
皇の朝に仕へた
貫之
紀貫之
平安朝時代の歌
人

たゞ民謡の優れたものは、それが口うつしに他の地方に傳はり易いから、それが土地なまりを加へて、いづれの唄がいづれの地に發したかを見分け難いことも少なくない。しかしながら、よし轉訛したとしても、その唄も土と人とを離れては行かれぬから、その轉訛に自ら地方的個性が現れて來る。例へば「麥ついて」の歌は甲斐の南方では、

大麥ついて麥ついて、お手にまめを九つ、九つのまめを見れば、親の在所こひしよ

と唄つてゐる。伊豆南方の暖地と自然にその調子と響とを異にしてゐるのが味はれる。

この苗をとりあげて、どこに棲まらずや、いなごや、きりすゝき、すき草のこやのうらに棲まらずや

これは、伊豆の南方の稻生澤村いなごやの苗取唄である。思ふに、この歌

稻生澤村
静岡縣下田町の
北にある

謡は、決して近代のものではない。少くとも平安朝時代か、或はそれ以前に生れたものが、その優れた秀でた調子を持つが爲に、南方の邊土に今日まで轉訛しながらも生命を存してゐるのである。歌體が幼くて、哀憐の心が充ち満ちてゐる。この美しい心情を持つた民謡が、今日の日本に残つてゐて、現在農夫の口に唄はれてゐることは、民族の誇とするに足ると思ふ。

「苗を取りあげた後は、いなごよ、お前はどうするのか。かつたすきや、結むすきあんだ葦あしの小屋の中に、自分とともに住まないか」といふそのこゝろは、なんとといふ單純な、同情の籠つた、愛に満ちたこゝろであらう。

自然の中に愛に包まれて、その日の労働をいそしみながらも、一匹の蟲にも親しい心を持つ農夫の生活が、涙ぐましいまでに尊い。「この苗を取りあげて」は、原作は勿論「この稻を取りあげて」であつて、

八ヶ嶽
長野縣と山梨縣
との境にある山



八ヶ嶽

それが苗取唄に轉用されたものと思はれる。この唄は他の地方にも残つてゐるが唄の體から考へて伊豆のものが最も原作の形を保存してゐると想像される。

一の坂越し二の坂越して三の坂越し
や強清水

これは信濃國の民謡中、出色の一つである。草刈馬に乗つて八ヶ嶽の裾野を上る。一の坂がある、二の坂がある。坂を上るうちに汗が背に流れる。三の坂を越せばそこに清水が湧いてゐる。齒に冷たくしみ入るほどの強清水が湧いてゐるといふ意で、草刈の男女に唄はれることによつてこ

の唄の趣が深い。さうして、どこかに高山國らしい調子が現れてゐる。暖地の濕潤に對して、山國は乾燥してゐる。南の明るさは暖いが、山國の明るさは寒い。それが、これ等民謡の中にも現れてゐるのである。

三六 勝 敗

三宅 雪 嶺

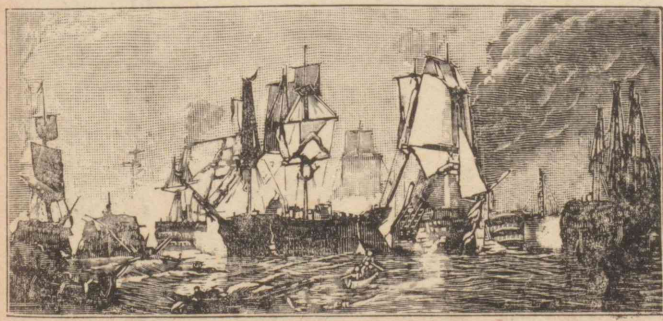
三宅雪嶺
名は雄二郎
金澤市の人
文學博士
ジョージ五世
前々皇帝
エドワード七世
の第二王子
(西紀一六五—一七
五)

英國皇帝ジョージ五世の座右の銘若干條の中に、勝ち得るならば、勝つべき事を私に教へたまへ、勝ち得ないならば、私に良い失敗者たるやうに教へたまへ」といふのがある。平凡のやうだが太陽の没しない領土に君臨する御身として、この邊に考へ及ばずに居られないであらう。勝ち負けといつても、勝ちらしい勝ちが少く、負けて尤もと思はれるのも少い。勝つならば、勝ちらしい勝ちを得べきであり、負けるならば、萬已むを得ない方法に於てすべきで

あつて、それがむづかしい。

近世英國で戦勝の最も赫々たるは、ネルソンのトラファルガーに於てしたのを指す。敵の艦隊を全滅し、もはや敵に襲はれる怖れがなくなつた。ネルソンの期待は、勝つとか負けるとかと云ふのでなく、敵を全滅せねばならぬとした。味方に何程の損失あらうとも、敵を全滅し、後の害を除かうとし、その目的を達した。それで今でもトラファルガーの海戦が昨今のことのやうに考へられる。

その後百數十年間、これに比較すべき決戦は、東郷元帥の對馬海峡に於てしたのであつて、正に東西に對立することゝなつた。かの

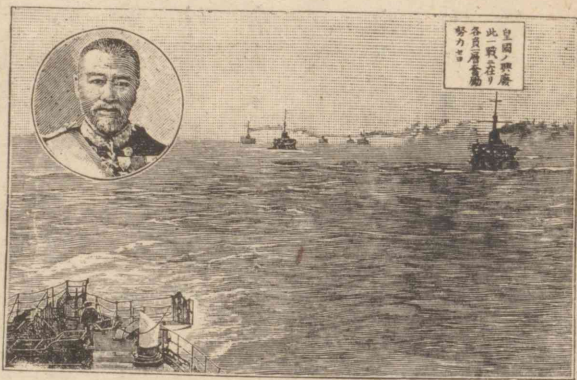


トラファルガーの海戦

海戦は實に敵の艦隊を全滅し、絶対に回復を許さなかつた。戦勝

は彼の如くならねばならぬ。

敵の司令長官ロゼストウエンスキーは捕虜となり、哀れ憐ない姿になつたものゝ爲すべきを爲したことを打消してはならぬ。バルチック海を出て、遠く喜望峰を越え、遙々極東に廻航し、そこで手ぐすね引いて待ち構へた日本艦隊に出會ひ、勝利を得るは不可能に屬してゐる。旅順艦隊が存在するならば未だしも、その全滅後日本海を通つて浦鹽に到着を



東郷大將と日本海海戦

企つるは冒險に過ぎるでないか。日本艦隊に出會へば、散々な目に遭はずにをれぬ。それでも日本を苦しめたこと一通りでない。

露が對馬海峽から進むか、北海道方面より進むか、大抵前者と思はれるも、さうばかりと決定してはならぬ。そこで謂はゆる東郷の七段返しとなり、次から次と用意せねばならぬ。露は日本を焦らしに焦らし、大抵よからうと對馬海峽に乗り込んだが、そこは段違ひの圍碁とて、運盡きて全滅した。併し、ロゼストウエンスキーは歸國し、軍法會議に廻されて放免になつた。これを旅順要塞司令官ステッセルに較べれば、よい負け方とせずにおけぬ。

ステッセルは日本軍に大損害を與へたので、日本ではロゼストウエンスキーより以上に評判になつてをるが、軍法會議に廻はされ、死刑を宣告され、次いで禁錮十年に減刑され、それが十五ヶ月で放免された。ステッセルとても相應に働いたのであり、唯、ロゼストウエンスキーに較べ、爲すべきを爲して居らなかつた。一は良い失敗者たるに近く、一はさう云ふを得ない。

成功者の多くは早晩失敗者と共に忘れられてしまふ。成功して時めくと、失敗して倒れると、記録の上で特別の異同がない。要は爲すべきを爲すと否とに在る。トラフアルガーで英將ネルソンは戦死しても爲すべきを爲してをり、佛將ヴィユヌーヴは無事でも捕虜となり、翌年放免されて自殺した。ワーテルローでナポレオンが負けても、將略に於て敵將ウエリントンに劣らぬのみか、幾等か之に優るを證明した。東洋で諸葛亮や、岳飛や、楠木正成や、西郷隆盛など、大成功者であり、最も良い失敗者である。特に戦争について述べたが、一切の成功及び失敗はこれに準じて考へ得られる。



戦の - ロルテ -

三七 熟慮斷行

藤村 作

珍しい事を外國で見出すと、如何にも感心な事として報告するが、我が國の事は、いかに立派な事でも看過してゐることが多い。これは我が國人の癖である、悪い癖である。

扁額の如きその一つである。我が國には扁額に金言名句を書く習慣がある。寒村僻地の旅館などへ行つても、一生味つても味ひきれず、一生實行しても實行し盡くせぬやうな尊い金言名句を見出すことは決して稀なことでない。それに馴れきつて一顧も與へない邦人の態度は勿體ないことである。

或時余は東郷大將の「熟慮斷行」の四大字を拜見したことがある。さうして余は直ちに日本海海戰當時の大將の心境に想ひ到つて、この四大字の尊さを特に感じたのであつた。「熟慮斷行」實に服膺

すべき金言である。軍人は常に念頭に戰爭のことを置いてゐる。戰爭に躊躇逡巡は大禁物である。ここと思つたら斷行が必要である。斷じて行へば鬼神もこれを避くといふ信念を以て果敢に實行することが必要である。併しながら、これには熟慮が伴はなければならぬ、淺慮の上の斷行は眞の斷行でない。妄動である、妄動は戰敗の本である。

戰爭をするものの熟慮は、要するに敵に對して勝を得るといふことの外に出づべきでない。鎮海灣に久しい間鳴りを鎮めて、露國大艦隊の必ず對馬海峽を通過すべきことを信じて、輕舉せず、妄動せず、遂にこれを邀へ撃つて日本海海戰の大勝利を博した、當時の我が聯合艦隊の司令長官であつた東郷大將のこの時の熟慮、――日本帝國の運命を雙肩に荷つての熟慮と雖も、恐らくこの域を出づるものではなかつたであらう。何處に敵の大艦隊を邀ふべ

鎮海灣
朝鮮半島の南部
巨濟島に圍まれ
た灣

きか、如何にしてその大艦隊を撃破すべきか、そこに複雑な各種の件があつても、要するに勝を得べきことに就いて熟考すればよい。さうしてその熟考の結果得られた道に向つて邁進の斷行が伴なへばよいのであつたらう。戦争の要訣は成るほど熟慮斷行にあるやうである。

これを廣い人生に處する我々の上に移して考へて見よう。熟慮斷行は我々の爲にも良教訓であるが、併し人生は複雑で、唯敵に勝つことを目標とする戦争のやうな簡單なものでないから、熟慮の意義も複雑であらねばならない。熟慮すべきものの何であるか、如何に熟慮すべきかが先づ考へられなければ、實際上の教訓、金言として役に立たなくなる。

我々の常に當面する人生の問題には、先づ以てその正邪・善惡・適否の判斷が必要である。人は聖人でない限り、事に當つて先づ自

己中心の判斷をなすものである。自己の利益・名譽、或は狭い自己の周囲の利益・名譽などにこだはつて、自己の進むべき方向、取るべき道を定めようとする。過失・罪惡は多くはここから起る。ここに熟慮の必要がある。我々は事に當つて第一に正邪・善惡・適否の判斷について思を凝さなければならぬ。私利・私情等の拘束を脱してその判斷を誤らないやうにしなければならぬ。我が取る道、我が進む方向について、正であり、善であり、適であるといふ確信があつてこそ、斷行の勇氣も百倍するであらう。

次には、判斷の結果を實行すべき方法の適否の問題が起る。ここに亦熟慮の必要がある。この熟慮は戦争の前の軍人の熟慮に類するが、それよりも一層複雑なものであることに注意を要する。戦争の目標は唯勝ちにあるが、人生に於ける諸般の實行は、その成否の結果は勿論、その實行なり、その結果なりの周囲に及ぼす影響

に由つて、その實行の價值が定めらるべきであるから、その實行の方法に關して熟慮を要するのである。

これに就いて余は小さい一の例を想起する。曾て新聞紙上の投書で讀んだことである。或紳士が電車に乗つてゐた。その隣に乳飲み兒を伴れた婦人がゐた。子供は母の膝の上に乳を啣みながら、紳士の携へたステッキを取らうとした。紳士はそれを知つて貸してやつた。幾驛か過ぎてから、紳士は下車驛の近づいたことに氣づいてステッキを取りかへさうとかゝつた。先づポケットから新聞紙様のものを出して、子供に見せびらかした。子供はそれも欲しくなつて、あいた方の手で受取つたので、第一の手段は失敗した。紳士は再びポケットから二枚の紙を取出し、兩方の手に持つて見せびらかした。今度は見事に子供が策略に乗つて、ステッキを棄ててそれを受取らうとした。かくて紳士は無事に

ステッキを取りもどして電車を下りて行つたといふことを、その投書は報告してあつた。

この紳士の態度には大いに學ぶべきものがある。ステッキは是非取りかへさねばならない。母親に告げて無理に子供の手から返して貰つても、少しも差支はない。併しさうすれば、子供が泣き出すかも知れない、少くも子供の機嫌を悪くする。子供が泣き出せば、母親は困り、乗客達は不快を感じべき筈である。であるから、さうした手段は拙い。紳士はそれを考へたから以上のやうな手段を講じた。さうして、少しも子供にも無理のない、母親も困らせない、乗客にも不快をおぼえさせない方法を見出して、見事に成功したのである。これは實行の方法に關する熟慮の必要を示す一例である。事は小であるけれども、大きな場合にも適用さるべき尊い事例である。

熟慮斷行有り難い金言である。併しこれを服膺するに當つては、先づこれらの點を熟慮しなければならぬ。

三八 日本精神の眞髓

清原 貞雄

日本の國家といふものは建國の當初から皇室を中心として進んで來たものであります。又實際の政治の現れに於ても、又文化の發達といふ點から見ても、一切皇室といふものを中心として進んで來たのであります。皇室を中心として一切のものが發達して來たといふ事を忘れては、日本の眞髓を掴むことは出來ません。これが日本歴史の特色であります。即ち日本の歴史を理解し、日本の國體を認識して、この理解とこの認識との下に日本國民としての正しき生活をして行かうといふ考へ方がとりも直さず日本精神であると考へるのであります。かくの如き現實の疑ふ可か

清原貞雄
大分縣の人
文學博士
廣島文理科大学
教授

らざる事實を自分自ら理解して、その理解の下に日本國民たる自覺を以て、正しき日本國民としての生活をして行く、この考へ方が即ち日本精神であると私は考へるのであります。つまり一口に言へば皇室に歸一する事によつて、日本國民全體が束になつて行かう、さうして日本の凡ゆる問題を處理して行かう、これが即ち日本精神の眞髓であると私は考へるのであります。これを外にして日本の國を發展せしめる道はないのであります。

日本精神とは、要するに日本の國體に即し、これを基礎とし、これを擁護し、これに依つて日本の國家の發展、日本の文化の發達を圖らうとすることを使命とする所の精神であります。國體を離れて日本精神はないのであります。この日本國體といふものが是認されない限りは、又國體といふものが日本の國家に就いて絶對の生命であり、何處迄も保持さるべきものであると云ふ事が決ま

らない限りは、日本精神の成立は考へられないのであります。

二千五百年の歴史に徴して見ても、先に述べたやうに、日本の國家が皇室といふものを中心とし之を中樞として進んで來たのであり、生きて來たのであります。皇室が何故にかくの如く日本に於ては中心となり中樞となることが出來ませうか。凡ゆる問題の中心・中樞が皇室であり、凡ゆる日本國家の文化の發展といふものが皇室をめぐつて行はれて居るといふ理由が何處にありませうか。これこそ日本國體の獨得なものであります。日本の建國當時の皇室と國民との關係が今日までその儘さながらに持續して居るからであります。さうして國民が一致する場合に於ても又或特殊な力を現すといふ場合に於ては、常にこの皇室の力を借りて居るといふ事は、理窟は兎に角として、疑ふべからざる事實であります。例へば日本の歴史と雖も常にこの安らかな一路平和

な道を辿つて來たのではありません。日本精神に反する様な精神が日本に勢を得て、日本國家を危機に導いた例は多々あるのであります。さういふ場合に、日本精神的な思想の現れに依つて、危機に導かれた日本國體を常に救うたのが皇室であります。換言すれば日本國民が皇室に歸一する事によつて、それ等の日本精神なるものが、反日本精神なるものを反省せしめたといふ事は、日本历史上幾多の事例が之を示して居るのであります。即ち大化の改新に於て然り、明治維新に於て然りであります。あの社會的・政治的・經濟的根柢改革である難事業が、彼の西洋の革命等に見られるやうな慘事が行はれないで比較的安らかに行はれて居ります。昔から我が歴史を考へて見ると幾多の困難もあつたけれども、兎に角立派に成功して來たのは何故でありませうか。これは皇室といふ嚴然たる心的中樞があつて、國民があらゆるものを之に捧

げて喜ぶからであります。この精神の現れたのが即ち明治維新であり、大化の改新であります。

殊に吾々が現代に近い歴史として明治維新の事情を考へると、



徳川慶喜

その當時の徳川慶喜の立場から言へば、大政奉還といふ事は、非常な難事であつたのであります。二百五十年來徳川家の恩顧を受けて居つた譜代大名があり、十五代もつゝいた將軍家を自分が潰してしまふといふ事は、非常な苦痛であり、又一身上非常な危険に曝されて居つたのであります。然し敢然と衆議を排して大政奉還を急いだのであります。この事は徳川慶喜が彼の水戸光圀以來培はれて來た澎湃たる勤王精神に生きて居つた

からであり、この精神が維新の際に於て甦つたのであります。その結果一身上の非常な危険を冒して大政奉還を急いだ事は、全く彼の勤王精神の現れに外ならなかつたのであります。

—日本精神と其の顯現—

三九 忠 僕

小笠原長生

小笠原長生
海軍中將
子爵
舊唐津藩主の嗣

私はこゝに、嘉永元年の十五の歳から、大正五年の八十二歳まで、六十八年の間、私の家に盡くしてくれた殊勝なる一老僕について物語らねばならぬ。

老僕は名を山口用助と云つた。弊家の舊領地、肥前唐津在の生まれで、私の家に奉公した抑も、から死に抵るまで、唯もう忠實誠實の一點張り、名聞も要らない、利益も要らない、主家の爲なら命も要らないといふ、南洲翁のいはゆる始末のわるい人間であるが、その

律儀なる事がいつか世に聞えて、明治四十五年には時の東京府知事から木杯一組に賞状を添へて贈られた。またこの一年前には、乃木大將をへこまして、大將から「硬骨漢」と褒められ、六年前には東郷大將から「忠僕」と稱へられたといふ光榮者である。

日露の戦役が終り、聯合艦隊が解散されて、東郷大將が海軍軍令部長に轉ぜられたのは、明治三十九年の十二月二十日であつた。越えて翌年の四月二十一日の事である。うち頗る歓迎會に疲れて居られる大將を御慰め申さうと考へ、夫人令嬢御同伴で拙宅へ御いでを願つた。私共も他人まぜずの家族ばかりで、萬事儀式ばらぬやうにと注意して、まづ新芽の匂ふ梅林で茶菓を勧め、一休憩して後、竹藪へと御案内した。その途中、家祖を祀つた小祠ほこみの側そばをとほりかゝると、丁度祠内の掃除を了へた老僕の用助が、扉を開けて顯はれた。世事に無頓着な彼も、東郷大將の英名は聞き及んで

あるし、今日見えられる事も承知してゐるので、つか／＼と進み寄つて丁寧にお辭儀をして、九州訛りまる出して、「御機嫌よう。」とやつた。大將は「はい。」と慇懃に會釋を返して後、じつと見詰めて居られたが、私を顧みて、

「鹿兒島ですか。」

と問はれた。「いや唐津です。彼は私方の名物男として、面白い經歷を持つて居ります。」と答へると、「さうですか。永く居るのかな。」

「さやう、約六十年になります。」
「六十年！そりや永い。」

こんな話で、その場は終つて、大將の筍掘りとなり、半日の清遊が果てて後、四方山の談話の序に、話頭は端なくも我が老僕の上になだ。

私が日清戦役から凱旋したのは、明治二十八年の八月下旬であった。久々で家庭の人となつて、氣持よく休んで居ると、夜の十二時頃の事である。襖の外に人の來だけはひがして、

「隊長、這入つても可いか」

と唐津訛の聲が聞えた。そのぞんざいな物言といひ、第一私の事を隊長と呼ぶものは、用助より他には無いので、

「かまはん、這入れ」

と答へると、彼は何か長い包物を抱へて、せい／＼呼吸を切らせながらはいつて來たが、平素に似ず神妙に襖際に畏まつて居る。私も床の上に起き直つて、「こんなに遅くどうしたのだ。それに、せい呼吸を切らして。何か急用でも出來たのか」と、やゝ詰問的に尋ねると、

谷中

「さうぢやあ、御座んせん。俺は谷中の御隠居さんそこへ往つて

東京市下谷區

來たのだよ。」

といふ。「何も今夜に限つた事ではないぢやないか。」といふと、

「俺はどうしても今夜往つて、御隠居様に、隊長が禁庭様のために、偉い手柄をして戻つて來た事を、申上げなきや濟まないからさ。俺は御隠居様のお役中も、戦の時も、始終側にゐたが、御隠居様がお國のためを思ひながら朝敵ちう悪者にされて、江戸にもゐられず、長い間何處に御座つたか知れないで、俺はかうして觀世音に御守護をお願い申した。」

といひつゝ、彼は左の掌を示した。彼は亡父が明治元年に江戸を脱走したと聞いた時に、亡父の無事を祈るため、日頃信仰する觀世音の御像の前に端坐して、掌に油を湛へ、燈心を垂らし、それに點火して、掌のジリ／＼焼け爛れるを、ぢつと耐へて、この荒行を三日三晩も續けた。その時の焼痕が、今も歴々と掌に遺つてゐて、彼が誠

實を永久に物語つてゐるのである。彼は今それを示して述懐するのであつた。

賢之進
長生子爵の事

「觀世音の御利益は有難いよ。御隠居様は無事で五年目に戻つて御座つた。さうして俺にかう云うたよ。『賢之進に忠義をさせて禁庭様にお詫びをする。』と。その隊長が今日立派な手柄をして歸つて來たのだ。早く御隠居様に知らせたいよ。どんなに待つて御座るか知れない。さう思ふと、迎も明日までは待たれないから、用が済むと出かけて今戻つたのさ。」

彼はかう云つて持參の包を解くと、中から拵付蠟鞘の大小二口の刀が出て來た。彼の説明によると、これは幕末擾亂の際に、重大な密使を果した手柄に對し、亡父より手づから授けられたもので、「機會があつたら私に譲りたいと、久しく考へてゐたのであつたが、今日やうやくその機會を見出だしたといふのであらう、彼は突然

例のぞんざいな調子で、

「よし遣らう。」

と云つて私を驚かした。私は感極まつて、早速は返事が出來なかつたが、結局有難く受納して、彼を満足させるより外なかつた。彼は又私の出征中、雪が降らうが、風が吹かうが、毎夜十二時を合圖に、床を蹴つて起き出で、ゴアノと水垢離をとつてから、家祖小祠の靈前に合掌して、曉天まで讀經を續け、皇軍の勝利と私の武運長久とを祈つてゐた。その態度が餘りに熱烈嚴肅なので、それを見た者は、孰れもその心根に泣かされたといふことである。

大將は以上の長物語を飽きもせず、「ウム」「ウム」と云つて聽いて居られたが、話が済むと、拱いた腕を解かれて、

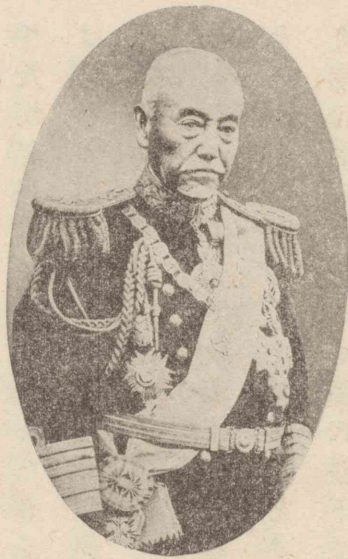
「忠僕ぢや。」

力強く頷かれたが、その中には無限の同情がこもつてゐた。私は改めて、

「如何でせう、極小さく「南無觀世音」とお書き下さいませんか。それを用助に遣はしたら、どんなにか悦びませうから。」

「僭越ぢやが、此方でよければ

書きませう。」



東

郷

平素揮毫の依頼には、容易に

大諾と言はない大將が、早速快諾

賜されたのも、思へば彼が忠節の

餘光であらう。そこで早速お札位の大さに揮毫を願ひ、用助を呼び出し、大將の好意を告げて件の名號を遣はした。彼は「有難う御座います。」と云つて平伏した。

大將は慈愛の籠つた眼で、靜かに見やつて、

「貴方には感服したぢや。折角自重して益、忠義を勵みなさい。」

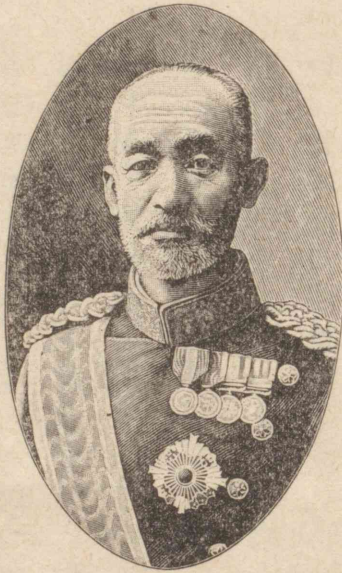
唯。

一問一答に何ともいへぬ至純の人情美が溢れ満座いづれも頭を低れてしまつた。

それから明治四十四年の春、私は學習院の御用係兼務を仰付かつたので、午後は大抵軍令部から、同院の方へ往つて、院長たる乃木大將の相談相手になつてゐた。その年の四月、乃木大將は東郷大將と共に依仁親王、同妃兩殿下に隨行して英國皇帝の戴冠式に列し、八月の下旬に歸朝されたが、それから半月程経つての或日のことである。私は平素のやうに軍令部に出勤するため、早朝邸を出て、俥で十町程行くと、乃木大將が同じく俥で此方へやつて來られるのにバタリ出會つた。

目白
東京市豊島區
學習院の所在地

「こんなに早く何方へお出でになりますか。」
 「貴方のお宅へゆくのだよ。」
 「では此處で御用を承りませう。」
 「何、君に今別段急用がある」と云ふ譯ではないのだから、不在でも構はん、ちよつとお宅まで行つて来る。」
 「さうですか、それではこれでお別れして、午後目白でお目に掛かりませう。」
 私は強ひて止めもせず、そのまま別れて出勤し、午後になつて約束通り目白の幹事室で院長に會つた。さうしてその日の要件を片づけてしまつてから、一緒に麥湯を飲みながら雑話に移つた。すると院長は妙な顔をして、
 「小笠原君、今日は君の宅へ始めて往つて、いや酷い目にあつたよ。」
 「どうしてですか。」



乃木 大 將

「實はね、これを英國から持つて來たので、進呈しようと思つて、それで今朝伺つたぢや。玄關で案内を乞ふと、顔の平たい老人が現はれて、「役所はまだ來ん。」といふ。「いや君で可い、御主人が御歸宅になつたなら、これを差上げてくれ。」と云つて、この包を出すと、老人更に受取らん。「主人が不在中は誰からでも、何でも受取つてはならぬと申付か、つて居るから。」と難解の言葉で吃々と斷りよる。「いや、俺は乃木ぢや、御主人とは御懇意で、今もつい其處でお目に掛つて來たのぢやから、決して心配はいらん、受取つてくれ。」といふとねぢつと自分を見てゐるが、いかに恐縮した様子で、「乃木様で御座いますか。わざくお出

てになつたのに、誠にお氣の毒で相済みませんが、主人の申付に背く譯には參らん。といふ。「いや、取つてくれ。」取らぬ。三十分も押問答をやつたが、しまひには泣き出しさうになつて、それならかうして下さい。主人が歸つて來て、頂戴しても可いというたら、たとひ夜中でも、何處までも伺つて、お預かりして主人に渡します。と云ふのぢや。理窟が立つちよるので、如何とも仕方がない。すごくと再びその包を持つて俥に乗つたがね。餘り器量はよくなかつたよ。近來あの位の頑物に出遇つた事が無い。實に散々な體さ。いや痛快に頑固な男ぢや。定めし御舊領の者ぢやらうが、藩中かね、それとも村ですか。」

大分閣下の御氣に入つた様である。私は最眞の彼の事であるから、得意になつて、彼が六十餘年間、三代に仕へて、忠誠一日の如く、親類一門中の褒者である事を物語つた。院長は最初は唯愉快げ

に聽いて居られたが、談話の進むにつれ、次第に昂奮された様子で、やがて瞑目して熱涙を滴らしつゝ、

「天晴れ硬骨漢。小笠原家の實ぢや。よう可愛がつておやりなさい。今後はもう滅多にさういふ人物は出まい。話を聞くだけでも胸がすっきりする。人間の活手本、乃木が敬意を表すると傳へて下さい。」

言ひ了つて、感慨之を久しうされた。

その後院長は折に觸れては、「用助氏は元氣かね。」と尋ねられる。決して呼び捨てにはされない。或時などは、私が歸りかけてゐるのを呼び止めて、白金巾に包んだ物を手渡しされ、

「これは今日宮中で頂戴して來た菓子ぢやから、用助氏に遣つて下さい。」

と云はれたこともあつた。忠實の徳といふは恐ろしいものであ

ると、つくづく、私は思つたのである。

上 鐵櫻漫談に據る―

昭和十二年六月九日	昭和十三年一月十二日	昭和十三年十一月十三日	昭和十六年十月三十一日
發行	訂正	訂正	修正
印刷	發行	發行	發行

實業帝國新國文改版

第一學年用	第二學年用	第三學年用	第四學年用	第五學年用
金八十五錢	金八十五錢	金七十五錢	金七十五錢	金七十五錢



編者	藤村作
發行者	東京市神田區西神田一丁目三番地 株式會社 帝國書院 代表者 守屋紀美雄
印刷者	東京市京橋區銀座西二丁目三番地 高橋 郁
發行所	東京市神田區西神田一丁目三番地 株式會社 帝國書院 振替口座東京六七〇一四番



広島大学図書

2000071203

